

浅野誠エッセイシリーズ2

音楽芸能

・美術工芸

2007～2013

若いころから、音楽芸能とか美術工芸という、思わずひいてしまう私だった。失敗の武勇伝さえいくつも持っていた。といっても、興味関心は持っていた。

1970年代に琉球大学教育学部に赴任して以降、同僚たち学生たちに刺激されて、関心を深めていった。とくに現シュガーホール芸術監督中村透さんの刺激は絶大だった。ということもあって、「文化活動論」にかかわる小論をかいたりもしたし、集団表現にかかわり、いろいろと試みたりもした。

2004年に玉城に住み始めて以降、周りに沢山の音楽芸能・美術工芸に携わる友人知人ができて、興味関心は輪をかけて旺盛になった。2007年から始めたブログには、それらにかかわる記事をたくさん書いた。

ということで、関連の記事を編集してみることにした。なお、2012年6月に発行した「シリーズ南城物語2 南城の芸能・工芸・芸術」にも、関連記事を収録したので、参照してほしい。

目次

コンサート シュガーホールを中心として

2013年	7
シュガーホール活性化計画 新崎誠実ピアノリサイタル	
すごく気楽でとびっきりやさしいオーケストラ鑑賞入門塾～シュガーホールにて	
シュガーホール「音楽と科学の旅 新世界を発見しよう」 張り切る知念中学2年生	
さちばるの庭 天空の茶屋 ミネハハ・コンサート	
シュガーホール新人演奏会	
ミュージックハウス・ノエル（神谷智子主宰）の「うたとピアノのコンサート」～恵美子も参加	
エネルギー溢れる「沖縄燦々」	
南城市芸能公演「組踊ってなんだろう」 刺激溢れる「玉露の妖精」	
シュガーホールオーケストラ コンサート 「運命」	
2012年	16
中高生が演じる『現代版組踊 翔べ尚巴志』を見る	
中村透出版・退職記念祝賀会	
アフリカの太鼓を聴く	
おきでんシュガーホール新人演奏会	
2007～11年	19
MYchaiコンサート シュガーホールにて	
琉球弧の音～そのひろがり～	
三線	
第17回おきでんシュガーホール新人演奏会	
南城市シルバー歌声サークルきらり結成5周年記念コンサート	
やちむんコンサート 奈須重樹・比屋定篤子カップル	
オキネシアコンサート	
玻名城律子コンサート	

音楽芸能論

- 2013年 25
 文化条例 南城の文化 しまくとうば
 音楽はアイデンティティ
 小島瓊禮「歌三絃往来」(榕樹書林2012年)を読む
 金城厚「沖縄音楽入門」(音楽之友社2006年)を読む
 大城學「沖縄芸能史概論」(2000年砂子屋書房)を読む
 仲宗根幸市「「しまうた」を追いかけて」(1998年ボーダーインク)を読む
 沖縄県立芸術大学大学院で「芸術表現総合比較研究I」の授業担当 我ながら驚き
 シュガーホール将来計画ミニシンポの案内
 充実のシュガーホール・ミニシンポ
 「沖縄感性・文化産業シンポジウム」を聴く
 シュガーホールと南城おこし
- 2008～2012年 54
 中村透「愛される音楽ホールのつくりかた 沖縄シュガーホールとコミュニティ」を読む
 松村洋「唄に聴く沖縄」(白水社2002年)を読む
 岡田暁生「音楽の聴き方」(中公新書2009年)を読む
 岡田暁生「西洋音楽史」(中公新書2005年)を読む
 阿久悠 時代を語る テレビ番組に見入ってしまう

中山合唱団と私の音楽体験

- 2012年 76
 調子外れ(音痴)と付き合いしてきた50年余りと老人性難聴
- 2011年 78
 中山音楽の夕
 「上を向いて歩こう」のウチナーグチ版に挑戦・・・中山合唱団
 中山合唱団 結婚式で歌う
 合唱 正月個人随想
- 2010年 82

第四回中山音楽の夕

シンギングボール

二重唱で音程が崩れるが、どう崩れているのかわからない私

中山合唱団 南城市広報誌「なんじょう」に載る

2009年

89

第3回中山音楽の夕

第3回中山音楽の夕の練習

50年ぶりのハーモニカ

カラオケに行く

豊年祭に向けて、中山合唱団の練習

中山合唱団、カラオケで盛り上がる

三重唱への挑戦 音程はずれに苦しむ私

2008年

95

中山クリスマス音楽の夕

夕方コンサート

中山合唱団練習風景

合唱団反省会

中山豊年祭で歌う中山合唱団

二部合唱に苦闘する私

井上靖歌う

中山合唱団コンサート 信じられない盛り上がり

2007年

105

カラオケ

中山豊年祭で中山合唱団の発表

中山歌う会 歴史的デビュー予行演習

美術工芸

2013年

107

イチハナリアートプロジェクト

2012年

109

大城清太の天描画

原研哉「日本のデザイン」(岩波新書2011年)を読む

福木工房の首里織

2011年

115

家族制作の自然素材装飾品

民泊高校生のブイアート作品

2010年

116

南城の工芸・芸術・芸能 ブログ記事の振り返り・再発見

我が家の美術・飾り・ブイアート ブログ記事の振り返り

恵美子の新作ブイアート

我が家にある小川京子クバアート作品を撮影するプロカメラマン

小川京子作クバオブジェ「創造の始まり」

恵美子新作ブイアート

2009年

11

9ブイアートの展示 半島芸術祭

小川京子作「ブッダのこぼれ種」

中山 親子でブイアート描き

みんなで描くブイアート

漢字を描く 恵美子のブイアート

私の作品

私のブイアート初挑戦

ブイアートがある我が家玄関

思い出の絵

2008年

125

恵美子新作 愛を奏でる女

半島芸術祭で販売予定のブイアート写真

海岸でブイアートを撮影する恵美子

下地敏一『宮古馬』

恵美子が描いたブイを海に浮かべる

梅原龍さんの布絵

2007年

127

小川京子新作

グループでブイお絵描き

恵美子のブイ芸術

ふくろう

131

私が収集した装飾品・工芸品「ふくろう」の紹介

コンサート

シュガーホールを中心として

2013年

12月9日

シュガーホール活性化計画 新崎誠実ピアノリサイタル

2月から検討をすすめてきた、第2期「南城市文化センターシュガーホール活性化計画書」作成がいよいよ最終段階になってきた。私の考えは、2～3月のブログ記事で披露した。多少は生かされているかと思う。

これまでの歴史的蓄積に立って、新たな創造へと向かう計画だ。その柱は、次のようだ。

目標1. 音楽を中心とした実演芸術を継承・創造・発信し、芸術家と市民とを多様な回路で結びます。

目標2. 伝統文化を尊重し、コミュニティ・ホールとして多様な市民をつなぐ文化交流の場とします。

目標3. 南城市の将来人材を育成するために、文化芸術の教育支援を通して青少年の創造性を高めます。

具体的には、南城市の町づくり全体と結びあい、かつそれを先導するような位置にあるシュガーホールらしい発展を、『公募型事業』のような市民参加色の強い取り組みで築こうとしている。さらに、これまでシュガーホールの多様な取り組みが育ててきた人材をベースに、そうした多角的な企画をマネージできるような人材をさらに育てていくことをも視野に入れている。

シュガーホールは、すでに高い水準の活動を展開しているので、それをさらに発展させるのは高度な課題ではあるが、それに挑む5年間になりそうだ。

8日には、2005年開催の第11回おきでんシュガーホール新人演奏会オーディションでグランプリを取り、フランスで修業し高度なレベルの表彰を受けてきた新崎誠実さんの、『里帰り』ピアノリサイタルが開かれた。私たちも参加した。

水の流れが多彩なドラマを生みだしているような曲たちであるし、演奏だ。音相互のつながり、響き合いが凄い。

シュガーホールでの、こんなコンサートがさらに継続発展することが期待されよう。

10月20日


すごく気楽でとびっきりやさしいオーケストラ鑑賞入門塾

～シュガーホールにて

〈ドボルザーク作曲 新世界交響曲の料理法発見〉
 11月12日(火曜日)12:30～14:00
 シュガーホール・ステージで
 参加料 ¥500
 どなたでも先着50名様まで(要予約)

シュガーホールは、平日のお昼時間に、だれでもが音楽を楽しみながら音楽のしかけを発見するおもしろ「おんがく塾」にトライすることにしました。生の演奏をまじえ、ときには参加するみなさんもやさしいパフォーマンスにとびこんでうきうきとなる、リフレッシュ・タイムへのこころみです。11月12日はシュガーホール・オーケストラの選抜メンバー6名による**〈ドボルザーク作曲 新世界交響曲の料理法レシピ発見〉**です。塾長中村透の軽快なトークと、オーケストラの代表楽器&ピアノが、交響曲の謎をステージの上のみなさんといっしょに解き明かしていきます。乳幼児お連れの方は、客席から参加することもできます。どうぞお気軽にご参加下さい！

予約申し込み先：南城市文化センター・シュガーホール
 「おんがく塾」と、お申し込み下さい。
 ☎：947-1100 FAX：947-0099
 e-mail:nagamine00466@city.nanjo.okinawa.jp



当日は11時からロビーを開放しますのでお弁当持参もOK。ヘルシードリンクあり(有料)

11月12日昼の企画です。詳しくは、写真をご覧ください。

昨年からはじめたシュガーホールのオーケストラ企画の一環です。楽器にさわった事もないし、オーケストラを聴いたこともないと言った人が対象です。これを機会に、オーケストラを聴いてみようかな、という気分になるはずですよ。

これまで、南城市内の中学2年生全員を相手に、クラスごとに実施してきたものです。私も一度参観しました。これを、中学生だけのものにするのはもったいないから、大人向けにもしてみたらと、シュガーホール芸術監督の中村透さんに声をかけてみました。

それがきつかになったかどうかは分かりませんが、この企画が誕生しました。

昼間ですが、勤務している方も年休をとって参加したくなるような企画です。中味は、3000円相当だと、私は思いますが、500円です。

9月7日

シュガーホール「音楽と科学の旅 新世界を発見しよう」

張り切る知念中学2年生

昨年スタートしたこの企画。昨年は「運命」だが、今年は「新世界」。

企画の最初は、シュガーホールオーケストラメンバーが、南城市内の全中学校に出かけ、中学2年生を対象に、「第一の旅 ドヴォルザーク交響曲第九番「新世界」の料理法を発見しよう」だ。



9月2日、知念中学校2年2組を相手に実施したものを、私は参観した。

オーケストラメンバー6名、ほかのスタッフ数名で盛りだくさんの企画をすすめる。最初は、とても緊張していた2年生。プロの演奏を、1メートルの距離で生で聞くなどと言う事は、初体験だろう。圧倒されていた。

この企画は、楽器にじかに触れ、ちょっとした演奏体験などもあり、90分が一つの音楽ドラマ風に構成されていることもあって、生徒たちはどんどんノッてくる。

音楽室にもちこまれたティンパニーを叩いてみる生徒。初体験だけど、うまい。近年の中学生は、音

楽水準がとても高い。私たちの世代からは信じられない。

ホルンの管を伸ばすと4メートルになる、ということビニールパイプにして見せる。それを演奏家が吹いて見せる。生徒がやると、空気が通りぬける感じ。

こんな体験だが、「新世界」の要所をおさえた「料理」に、生徒は大感動だ。

音楽への関心が、飛躍的に高まりそう。

そういえば、知念中学校で美術を教えているのは、近隣の画家の磯崎さん。音楽も美術もすごいレベルになりそう。こんな風に市内の全中学校で進んでいくと、南城の芸術レベルは、すさまじいばかりの底上げになりそう。全国から羨望のまなざしが大波のように押し寄せるだろう。



6月27日

さちぼるの庭
天空の茶屋
ミネハハ・コン
サート



25日夕。数か月ぶりに、山の茶屋の裏の「さちぼるの庭」を登って、天空の茶屋に行く。我が家から歩数計で、3000歩足らず。午後6時

という、時間が時間だけに、誰もいない庭を歩く。整備が進む。

植え付けて1年余りのメキシカン・スイート・ハーブ（左上写真）



が、一面に広がる。新しい植物を見つける。名前がわからない（右上写真）。

天空の茶屋からは、我が中山海岸が見事に見える（右写真）。



散歩道を登り切ると、

天空の茶屋。屋根のてっぺんには、イソヒヨドリがとまる（左中写真）。

天空の茶屋の庭で、ミネハハのコンサート。巨大ガジマルをバックにして見事な歌唱（右写真）

「CMソングの女王」といわれるミネハハは、「地球ありがとう」をはじめ、ステキな曲を見事な歌唱力で披露。聴衆をうっとりさせる。



5月21日

シュガーホール新人演奏会

右写真は、休憩中のロビー風景

19日、第19回シュガーホール新人演奏会が開かれた。ここ数年、毎年出かけている。音楽を解さない私が書くのも変だが、今年の水準はかなり高い。演奏中、時々集中が切れることが多い私だが、集中が切れる回数が激減状態だった。

専門家に聞いて見ると、やはりそうらしい。例年だと、グランプリをとっていい人もとれず、入選していい人も、表彰人数が決まっているので、残念なことになった人も多らしい。

10代後半から20代前半の演奏者たちなので当然のことだろうが、エネルギーというか迫力というか、そんなものが聴衆を圧倒する演奏が多い。緊張しているのだろうが、それをプラスにして集中



を高め、見事な演奏になっているように感じる。



左写真は、クラリネットでグランプリに輝いた宇根康一郎さん。終了後のパーティーで撮影。

すごい演奏だった。偶然、演奏会終了後、旧知の方に出会ったが、彼のレッスンをうけているとのこと。

高校生も二人入選。お一人の池田聖香さん（右中写真）は、シベリウス作品で、フィンランド世界をバイオリンで見事に表現する。沖縄では想像が難しいフィンランドの、表では「陰鬱」さを帯びつつも、その中に複雑な

逞しさ、底深い主張さえ感じさせる激しい情念を見事に表現。終了後のパーティーで懇談。ぜひともフィンランドに行ってみてはと勧める。数年前、グランプリをとったのは、彼女の先輩高校生、同じくシベリウス作品だった。



終了後のパーティーでは、ドイツからこられた入選者のロガー・ゲーリックさんのギターの弾き語り（左写真）が披露された。

満足の時間だった。

5月7日

ミュージックハウス・ノエル（神谷智子主宰）の 「うたとピアノのコンサート」

～恵美子も参加

5月5日午後、具志頭城址近くの「スタジオ ティー トウツティ」で開かれる。半年前からピアノレッスンを始めた恵美子が弾くというので、私も家族参加だ。木造の素晴らしい会場。演奏者の家族や知人がいっぱい聴きにきて会場は溢れた。左下写真は、ピアノを弾く恵美子。

プログラム（右写真）



出演者の全員写真（左写真）

恵美子は、三線で「なだそうそう」も歌った（右下写真）。

近親者の演奏は、こちらもドキドキする。

小さな子どもたちは、楽しく演奏。小中高校生ともなると、緊張感溢れる演奏だ。うならせる演奏もある。大人は恵美子以外に、神谷先生と賛助出演の合唱団。

小さな地元地域で、こんなコンサートがあるのは、なかなかいいものだ。



2月23日

エネルギー溢れる「沖縄燦々」

20日夜、新装沖縄タイムスホールで観る。

沖縄芸能どころか、日本全体の芸能の大御所である三隅治雄さんの作演出による舞踊劇だ。かねてからおつきあいのあるACOからの御招待だ。

1時間余りと短いのだが、すべて踊りで綴られている。沖縄芸能の粋を、現代風にといいか、若者にも響くように、あるいは沖縄外からの来訪者にも響くように構成されている。それだけに極めて新鮮なインパクトをもっている。

三隅さんの本は読んだことがあるが、こういう現代的感覚の作演出をなさるとは驚きだ。おそらく80歳代だろうし、その晩も来られていた。

踊り手は、注目の若手踊り手の佐辺良和そして女性五名で、すべて進行する。音楽は、ロック・バイオリニスト ARIA。

よくもまあ、こんなエネルギッシュな踊りを続けられるものだ、と感心の域を越えてしまう。

そして、とびきり美しい。沖縄の広さ深さを「燦々」と表現。

圧倒された。

伝統舞踊の世界を継承しつつ、モダンダンスの世界を表現している。沖縄のパワーそのものだ。

こうしたうねりが生まれていることを、おおいに喜ぶたい。

このところ、こうした舞台を連続して鑑賞し圧倒されている。終了後、17日に観劇した『玉露の妖精』の作・演出・主役をした西村綾乃さんとお話する機会があった。こうした若手が新しい沖縄芸能を創造している。

この後の物語展開が、大変楽しみだ。

ところで、ACOは、「人と人、人と地域を結ぶ「文化」の役割を重視し、「文化」による地域の活性化と豊かな環境作り、芸術文化の発展をめざし沖縄を拠点に地域の文化を取り入れたオリジナルな創造活動や時代を見据えた作品を企画・制作しています。」というパンフレット説明にある通りの活動を精力的に展開している。キジムナーフェスタが代表的なものだが、その他多面的に活動をすすめている。

今回の公演は、『「めんそーれ美ら島沖縄」～沖縄文化観光ファン増大促進事業～』の一環だが、無料公開して鑑賞者のアンケート結果をもとに、今後の公演のきっかけにしようというものだ。

すでに沖縄舞踊の日常公演が観光客向けにいろいろと行われているが、そうしたものに、こうした公演が付け加わると、一段と興味深く「活性化」がおしすすめられていくだろう。

2013年2月23日

南城市芸能公演 「組踊ってなんだろう」

刺激溢れる「玉露の妖精」

17日夕シュガーホールにての公演。

第一部は「子（シー）の会」による「組踊を200%楽しむための組踊レクチャー『手水の縁』より」

何度か組踊を見たことのある私も初めて知ることばかり。勉強になった。しかも、若者たちによって、まさに若者風にしているのがよい。こうしたことを学校訪問してやっているとのこと。

組踊に新たな旋風が吹き始めている印象。

新たな旋風といえば、第二部「市民で創る組踊 創作組踊『玉露の妖精』」は、まさにそうだ。伝統の組踊を踏まえつつ、ここまで創造できるのか、とうならせるほど。しかも出演者のほとんどが女性であり、南城市民なのだ。素人舞台ではなくプロの舞台とっていいものなのだ。

シナリオ・演出・踊・音楽・所作・照明・舞台装置などいずれも、組踊の新たな息吹を感じる。私の経験でいうと、1960年代後半に歌舞伎の新たな展開を提起した前進座公演を見た時を思い出した。

現代劇を見ている印象だった。美しい。

組踊を見る時、ウチナーグチについていけない私にとって、途中どうしても集中が切れる事があったこれまでも、今回はそうではないどころか、ストーリーの面白さもあって、最後まではらはらしながら、感動を伴いつつ、はまりこんでいた。

観客も舞台と一体化していた印象。これまた、1960年代前半に岐阜で新劇『郡上一揆』を見た時に、舞台と観客の一体化を感じた時を思い出した。

シナリオ・演出・主役を務めた西村さん、そして旧知の伊良波さゆきさん、井上はるかさんが、大活躍する舞台でもあった。観客の平均年齢は高かったが、以上書いてきたような若い刺激が強いので、いずれ若い層を引き出し始めるだろう。

シュガーホールの芸能公演はしばしば見るが、今回の企画は、重要な一歩になるだろう。

ところで、タイトルの妖精は、サガリバナ＝さわふじの花として登場し、それにかからまる蜘蛛と、それをとる佐敷里之子とのからみでドラマが展開するのだが、サガリバナ＝さわふじの花のイメージぴったりだ。それが、私には強烈な印象だった。

写真は、2012年7月に撮影した我が家のサガリバナの花だ。



1月27日

シュガーホールオーケストラ コンサート 「運命」

20日に出かけた。

チラシには、こう書かれている。

<県内唯一の音楽専用ホールとして開館して19年・・・

遂に待望のプロオーケストラを結成

シュガーホールオーケストラ コンサート 「運命」 >

文化庁の助成を受けて、昨年から継続的に取り組み、ここまでに至った。無論、19年間の蓄積が大きい。50名余りの演奏者のなかには、これまでの「おきでんシュガーホール新人演奏会オーディション」入賞者10数名が含まれている。

「運命」演奏の前に、指揮者の大勝さんの「運命」についての詳しい説明が、演奏を交えてなされたので、「ずぶの素人」の私には、とっても助かる。

「調子外れ」の私は、音楽を感性ではなく理屈でとらえようとする癖が長年にわたって蓄積しているので、理屈説明は助かる。だが、それは『邪道』のような感じもする。理屈を横に置いて聞くようにしたい。

それにしても、この曲は、巨大なドラマ仕掛けだ。「激しい⇔穏やか」をはじめ様々なものが折り重なりつつ醸し出す豊かさ。とてもじゃないが、曲・演奏の0.01%も捉えきれない私だが、なにかしら感動というか、豊かさというか、重いものというか、そんなものを感じた。そして、何百年という西洋音楽の歴史的蓄積に圧倒される。

翌日の新聞報道によると、全琉からのオーディエンスがいたようだ。沖縄で「運命」が、しかも自前のオーケストラで聞けるなどというのは、沖縄の音楽愛好家にとってはたまらないことだろう。南城市からも、中学生を始め多様な客が来ておられたが、もっともっと市内からのオーディエンスが増えたらいいのと思う。

シュガーホールは、こうした西洋音楽だけでなく、沖縄音楽芸能の公演が頻繁にある。次は2月17日のくみうどうる（組踊）だ。音楽を軸とする芸術芸能が、広がりとともに専門性においても深化発展していくことを感じる。



2012年

12月24日

中高生が演じる

『現代版組踊 翔べ「尚巴志」を見る』

22日夕、大里農村環境改善センターで上演された。とても、素晴らしかった。中高生が演じるので、初々しさとエネルギーを強く感じる。踊りと劇で構成され、美しくリズムカルで躍動的な舞台だった。

こうした世界が最近の沖縄ではぐんぐん広がっている。中高生たち彼らに情熱な動きを生み出すものとして、スポーツ・音楽に加えて、新たなジャンルが広がってきているようだ。

観劇のきっかけは、タイ料理シャムのノッコさんからの誘いだ。実は、尚巴志役を演じたのは、お嬢さんなのだ。もうプロ並みの演技だ。

お嬢さんが小学生の頃、玉城体育館での卓球練習に親子で来ていたころ以来の出会いになった。今後おそらく素晴らしい活躍を見せていくことだろう。期待できそうだ。

9月8日

中村透出版・退職記念祝賀会

9月5日、本の出版（詳細は後掲）と退職記念祝賀会が開かれた。

各界から数百人にのぼる方々が参加する大盛況の会だった。

中村さんらしく、音楽演奏、そして本人による解説プレゼンテーションも行われた。写真は、その時の中村さん。

今回の本もそうだし、シュガーホールもそうだし、35年余りの音楽を軸にした、沖縄での彼の多様な出会い・協働の表現ともいえる会だった。

お陰で、各界の初対面のかたとの会話、あるいは30年ぶりの卒業生、元同僚との再会があった。また、沖縄の音楽・芸術・地域おこし等をめぐって、意見交換する機会もあった。

ところで、律子さんの和装、透さんの服装が素敵だった。透さんの服の由来を聞いた。彼らしい貴重でオリジナルなものだった。

余談 会場のナハテラスは、私達の子ども3人が生まれたメディカルセンター（現在は西原）があったところ。そこに、30数年ぶりにきたわけだが、まったく姿が変わった。



8月8日

アフリカの太鼓を聴く

4日夜、近くの天空の茶屋でのコンサート。

※夜なのに、フラッシュをつけなかったため、見にくいですが、お許してください。

近隣の知人たちの尽力で実現した、沖縄各地での一連のコンサートの一つだ。素朴さのなかに、健康さとおそらくは高度な音楽性をもつ太鼓が演奏される。

ケニアからマテラ長老、そしてケニア在住の大西さんが演奏。さらに、アフリカ楽器のカリンバを演奏する近藤ヒロミさん（左写真）。



加えて、近隣のセミプロチームの方々の演奏。長坂ゆきさん、稲福哲夫さんほか。三線、サクソ、シタール、ギターという組み合わせも面白い（右上写真）。

そして、三線と唄は、稲福剛二さん（右中写真）。

太鼓は、会場の掛け声と交流しながらすすむ。若い方々には踊る出す人も多い。私達60歳以上も数人参加。注目されて、妙な気分。

後で、マテラさんに聞くと、私と2つ違いだった。私より20歳以上若い印象を受けた。



5月21日

おきでんシュガーホール新人演奏会

20日午後開催された。グランプリを獲得した藤井さんは、芸術大学ではなく、教育学部卒業でグランプリは初めてか。音楽プロの道だけでなく、教員の道も、と考えているという。彼女の今後は興味深くもあり、期待していきたい。

演奏会は、ここ3、4回参加している。クラシックに深い関心があると言うわけではなく、「役目がら」という面が強いが、演奏にはインパクトを感じる。「新人」ということで、20代10代のエネルギッシュな演奏に、圧倒されるというか、おされる感じを受けてしまう。果敢に挑戦する年代だ。

音楽上の感度では、演奏についていけない私は、演奏につながる人間的な雰囲気のようなものを味わうことからアプローチしがちだ。演奏者がかもしだす、緊張感、挑戦的姿勢、若者の遊び感覚、荒削りのなかに現れる必死さなどを感じていく。選曲、演奏姿勢などにも、それらがあらわれやすい。音楽の楽しみ方と言う点では、異例かもしれないが。

観客は、出演者の関係者が多いが、もう少し、地元市民の参加があってもいいな、と思う。

それにしても、このオーディションは、世界的に認知されてきたようだ。今回も台湾からの方が優秀賞を獲得し、その方も含めて海外で修行中の方が何名もおられる。そして、以前のグランプリ受賞者で、ベルリンのトップクラス劇場のソリストになった方もおられる。

沖縄がそうした世界の重要な「基地」になっていることは、特筆すべきことだろう。

ところで、演奏会終了後にもたれた祝賀会には、演奏者とその家族・友人達、そして市長社長をはじめとする主催団体関係者、そして審査員をはじめとする、この企画を推進している音楽関係者やシュガーホール職員など、大きく分けて3グループがある。立食式の会場も、これらで「島」ができる。「島」をあちこち渡る人がもっと多く出て、相互交流が発展することを期待したくなる。そう言う私も、なかなか渡り歩かない、というか渡り歩けないのだが。

でも、文化の発展には、そうした面も必要だと思う。

2011～2007年

2011年11月20日

MYchaiコンサート

シュガーホールにて

19日夕、聴きに行く。

演奏外間三千代 (M)、平良優子 (Y)、金城貴子 (T)のみっちゃい、中村透・玻名城律子企画、シュガーホール合唱団きらり・ウイングス・ジュニアコーラス、などシュガーホールにかかわってきた多くの音楽関係者の「ハーモニー」的コンサート。

シュガーホールらしく、「異質協同」的な表現。クラシック・(ジャズ)・ポップ・子ども向け・シュガーホールオリジナルなど、音楽ジャンルも多彩。キャッチフレーズ「カジュアル」的雰囲気をかもし出す。

ピアノだけでなく、チェンバロ、おもちゃピアノ、ピアニカといった楽器を重ねる。口笛も。3人のピアニストに加えて、合唱団も歌う。聴衆も、カジュアルな雰囲気。

それでも、本格的クラシック演奏を含むところが、また絶妙？ 微妙？ こんなところから、クラシック音楽の広がり、そして地元音楽の高まり、が生まれてきたのだろう。音と人との重なり、響き合いが興味深い。

こう書く私も、牛歩の歩みで音楽階段を上っていく。クラシックを味わうレベルは初心者のままだが。



2011年10月12日

琉球弧の音～そのひろがり～

10日午後、国立劇場おきなわで行われた「第7回沖縄芸連の日」公演を聴きに行った。

この公演を観、聴くのは、3, 4回目だ。超ラッキーにも、前回の視聴者のアンケートで、恵美子がくじにあたって、招待券をいただいたのだ。しかも2年連続あたったのだ。こんなラッキーもあるものだ。

今回は、沖縄芸連の主団体の中心の方々（その多くが「国指定の重要無形文化財」に指定された方々）の、歌三線踊、そして、奄美・沖縄・宮古・八重山の民謡が演目だった。

八木正男の司会で、演者たちとの会話をまじえながら、さらに、同じ曲の島によっての変化を紹介するなど、楽しみの多い公演だった。

人間国宝に指定されたばかりの西江喜春さんの歌三線は、実はトロントで聴き、お話の機会をもって以降のお付き合いだ。ハリとかノビにある声に、西洋音楽の歌との共通性を感じてしまった。

島々の歌の違いと共通性は興味深い。各々に感じさせるものが異なり、その背景に自然・文化・歴史の違いと共通性をもつ。

音楽を中心として、沖縄が豊かな文化を創造してきたのは、確かな財産だ。それが、他分野、特に教育にどのような豊かさをもたらすのか、それは私の「沖縄おこし・人生おこしの教育」の一つの関心点でもあった。

40年前、初めて琉球音楽に出会った時、私の文化とは相当な距離を感じていたが、少しずつ共振の度が強まってきているようだ。

2011年8月30日

三線

プレゼントするために、恵美子と三線を買ってくる。

7年前、那覇の松尾にいたころ、近くの平和通の三線店での三線教室に私は2回出かけたきり、三線とはつきあっていない。恵美子は継続しているが、その後は教室にはいかず、恵美子流でやっている。

三線店で、いくつか音色を聞くが、みんな異なる。音の太さ細さ、響きの具合、など微妙な違いが、私でも分かる。

最近、アジア製のものにおされているが、地元の職人が踏ん張っているようだ。私たちが最初買った10年以上前より随分安くなっている。本物のへび皮で3万円の品もある。

写真右側が、これまでのもの、左側が今回購入したもの。



2011年5月15日

第17回おきでんシュガーホール新人演奏会

15日、シュガーホールで開かれた演奏会には、オーディションで入選・優秀・グランプリを受賞した方々が出場した。ピアノ（2名）、バイオリン（3名）、ソプラノ、フルート、コントラバス、ホルン、マリンバの若手演奏家たちだ。緊張しまくりのようだったが、新鮮だけに、印象深い演奏が続く。

なかでも、最後の二人、下里さんのピアノ、奥村さんのマリンバは、会場を圧倒した。

終了後のレセプションで演奏家が感想を語った。写真は、その時のもの。左端が奥村さん、二人目が下里さん。

下里さんは、世界的視野のなかで沖縄を語っていたのが印象的だった。奥村さんの演奏について、どなたかが、手が16本あるみたいだ、と語っていた。

下里さんと2、3分話した。演奏曲目は、ハンガリー出身のリストによるスペイン狂詩曲だったが、それらの地域の「熱いもの」と沖縄の「熱いもの」についての話が出た。ぜひ、そうしたところにも行って、視野と体験を広げ、いろいろなところで活躍することを期待したい。大きな世界に花開きそうな予感がする。

この演奏会の推進役の中心は、シュガーホール芸術アドバイザーの大勝秀也さん。演奏会でも、演奏者への見事なインタビュー、そして、選考経過報告と活躍。さらにレセプションでも、南城市・おきでん・タイムスなど各界の指導者と出演者をつなぐ役目を巧みに果たしておられた。

彼と並んで、注目を浴びたのは、県の新部長平田大一さん。注目人事なので、当然ではあるが、かれの挨拶では、彼がキムタカホール館長の際、シュガーホールを何度も訪問し、多くを学んだことを紹介。最後に自作の詩でしめくくるなど、芸術家らしい。今後の活躍が期待される。





2010年7月18日

南城市シルバー歌声サークルきらり

結成5周年記念コンサート

シュガーホールにて。他市町村からも合唱団が参加。団長の井上好子さんが見事な挨拶。井上さんは、中山の方でいつも出会っている方。

今日の合唱は、豊見城や西原、さらに今帰仁からも合唱団が参加していた。

それがなんと、今帰仁の指揮者は、30数年前一緒に研究会をしていた方。久しぶりの出会い。この今帰仁の合唱の水準は高い。

また、シュガーホールを拠点にしているウィングスの実力はかなりのものらしい。「かなり」というのは、私には計り知れないからだ

そして、熟年合唱団員が多いので、時には、『脱線』があ。るが、それが私をほっとさせる。

こんな風に、いろいろな合唱を聞いていると、合唱の奥行きを感じる。私たちの中山合唱団は、そのスタートラインにたったところだ、というのを実感する。

写真は、参加した全合唱団がそろって歌う、最後の場面だ。

2009年10月18日

やちむんコンサート

奈須重樹・比屋定篤子カップル

5時前に、奈須さんの突然の来宅。今日のコンサートの案内。

会場の浜辺の茶屋に着くと、子供二人が突然「ハーブおじさんだ」と叫ぶ。誰だったっけと考えていると、奈須カップルの子供であることがわかる。私はすっかり忘れていたのに、子供はよく覚えている。

奈須さんは30年近く前の卒業生。8月にも卒業生一行といっしょに来宅。





2009年8月3日

オキネシアコンサート

オキネシアコンサート第一部

「ザ・ティードの歌」

ならい千鳥さんの赤馬節

西表の祖納出身ということで、八重山民謡を聞かせていただいた。

即興の方も出て、八重山デーという感じ。踊っている方も、おそらく八重山舞踊の名手だろう。

今日は十三夜で、「月ぬかいしゃ」が合う日だ。



2007年4月22日

玻名城律子コンサート

21日夕方、我が家の一階セミナールームで開かれたコンサートには近隣の方20名が集まった。

歌手と聴衆がすぐ近くでのコンサートは民謡などではあるが、クラシックでは珍しいようだ。でも、200年ほど前のモーツァルトの時代では当たり前のことだった。

近いので、双方とも最初は緊張気味だったが、だんだん親しみを感じ、かけあいの雰囲気まで生まれてきた。曲目は、親しみのある曲、最後には「なりやまあやぐ」「トバラーマ」まで含まれて、聴衆は大感動のしどおしだった。

参加できなかった方は、4月22日シュガーホールでのリサイタルには是非参加してください。私のところでもチケットを預かっています。

こんなコンサートはいいね、ということで、この近隣でもくりかえしもちたいとの声があがっている。

終了後は、歌手も含めてみんなでの懇親会が夜まで続いた。

我が家でのホームコンサートにひき続いて、シュガーホールで彼女の歌を聴く。日本・沖縄の親しまれてきた曲を中心に、やさしい気持ちを引き出すものが連続。

圧巻は、最終場面。なりやまあやぐ トゥバラーマ、千の風、そしてアンコールでの、えんどうの花、よなぐにシヨンガネー。

これまでもそうであったが、沖縄民謡とクラシックとを見事に融合させた表現が聴衆を魅了する。声がすばらしいだけでなく、心を感じる歌いっぱい。

「千の風」は、よく歌われている「千の風にのって」の元の英詩をもとに、中村透が作詩作曲したもの。曲・歌・ピアノの三つがからみあって、深みをもつ歌となっている。「千の風にのって」が真っ青になる感じ。

歌い手の深みと聴衆の感性とが融合しつつ発展していくドラマをつくりだしている。聴衆の重なるアンコールの請求がそれを示す。今後もそれをますます発展させていかれることを期待する。

音楽芸能論

2013年

11月11日

文化条例 南城の文化 しまくとぅば

2001年に文化芸術振興基本法が制定されて以降、地方自治体でも文化芸術振興条例を制定する動きが広がっている。沖縄県もつい先ごろ制定したばかりだ。そのなかに、「しまくとぅば」の普及振興が含まれている点特徴的で注目されている。

※ 「しまくとぅば」を促進することは、ここ150年の沖縄歴史を考えると、画期的なことだ。とくに教育史を考えると、「教育政策の根本転換」ともいうべき性格を持っている。

いま、新聞などを中心に大きなうねりがつくられているが、その具体化には、いくつもの大きな課題がある。教育にかかわっていえば、どのくらいの使用を追求するのか。地域による差異が大きいなかで、どういう言葉を促進普及定着させていくのか。子どもたちに指導する教師の大半が「しまくとぅば」使えない現状の中で、指導をどう展開するのか。あるいは、今、沖縄教育界が中心課題と位置付ける学力問題のなかで、また、教科や授業時間などのなかでどう位置付けるのか。

さらには、これらの取り組みが波及的効果をもつ沖縄教育界の歴史的体質転換という問題をどう見据えるのか。



南城市のシュガーホール運営審議会でも、昨年制定された劇場法と並んで文化芸術振興条例のことが話題になった。ということで、少しは学習しなくてはと思い、根木昭・佐藤良子「文化芸術振興の基本法と条例」(水曜社2013年)を呼んで、あらましを知った。

「いますぐにどうするどうなる」ということではないが、南城市の文化振興の流れを全国的な動向のなかでつかむうえで参考にはなる。

南城市は、合併後8年にもならないが、文化面では、沖縄県内だけでなく全国的にも注目されるような活動を展開している。無論、合併以前からの佐敷町立時代からの蓄積を含めて、音楽を軸とするシュガーホールの実績が大きい。それにとどまらず、さまざまな地域芸能行事、半島芸術祭 in 南城をはじめ、いくつもの文化的取り組みが百花斉放のように展開されている。

それらの取り組みを、新たなレベルを切り開くものとして展開することを内容とするシュガーホール第二次計画が現在作成中だ。そうしたものを含んで、南城市全体の文化計画を豊かに形成し、文化都市としての流れを大きく膨らませつつある。4万人人口で「よくやるな」という印象さえ受ける。

10月19日

音楽はアイデンティティ

9月から始まった、沖縄県立芸術大学大学院「芸術表現総合比較研究」(演習)は、毎回4コマ(8時間分)の2回を終えた。

今年は、このほかに4大学・学校で前後期合わせて5コマ担当している授業は、すべてワークショップ形式で進めているが、これだけは研究討論形式だ。小人数の研究会的雰囲気ですすめている。それだけに、濃密かつ楽しい。

私の体力がもつかな、と心配したが、このブログでも紹介した抑肝散加陳皮半夏を前後に服用している効果なのか、頭の疲れも穏やかだ。そして、17日の授業の前日もその晩も、大変順調に卓球練習できた。そして、18日には琉球大学の授業2コマ4時間、無事できた。

しばらく前までは、こんなに集中して仕事をしたらパニック間違いなしだった。それだけ体調がいい、ということかなと思う。それでも、1日4コマ(8時間分)は大変なので、受講生の都合もあって、11月は2回に合わせることにした。

音楽史・音楽教育史研究をしている方々相手に、音楽に疎い私が科目担当でうまくいけるのか、という不安もなんとかやって行けそうな感じ。むしろ異なるアプローチをする私だから、かえって面白く感じていただいているのだろうか。

内容だが、9月は、私の「沖縄県の教育史」(思文閣1991年)を検討した。出版20数年たち、その後の多彩な方々の研究進展の中で、私なりに深めるべきことや音楽関連個所について、10ページ余りのレジメを提出

して検討討論していただいた。

10月は、まず受講生が研究作業として作成した「近世琉球音楽教育関係年表」の検討討論を行った。冊封使や江戸上りなどに関わる行事の際におこなわれた芸能音楽。それを担当した楽師や楽童子などの音楽学習訓練などを記録した家譜などの記述の検討だ。史料では詳細な過程はなかなか見えにくいとしても、その間から見えてくる世界を探り当てる仕事だ。

もう一つは、三島わかな「近代沖縄における洋楽受容の歴史的研究—伝統の再編をめぐって—」の検討討論だ。近代沖縄音楽史を考える上で、大変重要な示唆を提出している博士論文。私は、引用紹介とコメントの長いレジメを作成して、討論素材にした。近く単行本として出版される予定だ。

こんな討論の中で、沖縄の音楽・音楽教育史を探っている。

たとえば、神への祈りとしての音楽、外交行事に不可欠なものとしての音楽芸能、国民形成のための音楽、そうした流れと並行しつつ、人々の日常の暮らし（仕事、人間関係、余興、趣味など）の中でも音楽が不可欠な存在として嗜まれ愛されてきた。その音楽を活用、あるいは我がものとするために、どんな形での学習・教育が展開されてきたのか。

ここ20、30年は、人々の暮らしのなかでの音楽のありように激動が進んでいる。たとえば、ある受講生が語った「私にとって、音楽はアイデンティティ」だという言葉。歴史的に見れば、近年の若者にとって、その言葉の意味は大変大きい。私などは、その言葉を使用する環境には全くなかった。そんな私にとって驚きに近いほど、とても新鮮な印象を与える。

学術的な要素が高いこの授業の中で、こんな言葉が強力なアクセントを与える進行だ、

写真は、芸大建物とその前の通りだ。



10月11日

小島理禮「歌三絃往来」（榕樹書林2012年）を読む

このところの沖縄音楽史学習の一つとして、店頭で見つけた本を読む。帯には、「古文献・伝承・伝統芸を通して中国・琉球・大和を貫く「三絃の道」を辿る」とある。

歌三絃（歌三線）の歴史について、その成立に焦点をあてた研究の成果を詳述する本だ。16、17世紀において、単純に中国→琉球→大和といった流れだけでなく、それら相互間の交流・刺激の与えあいの過程の中で、それぞれの地域で成立発展していった過程が深く追究されている。登場する地域文化には、中国福建を中心とする東アジア、琉球、薩摩、堺を中心とする上方などがある。そうした盛んな交流の中で、地域独自の歌三絃（歌三線）が成立発展していくのだ。

本書のおおもとは、1962年の琉球新報連載とのことだ。そこでの本テーマ追求が、その後も今日に至るまで継続展開されているわけだから、50年余りの研究作業だ。飽き性の私には想像もつかない継続作業だ。また、本研究の分野は、民俗学、文献史学、音楽芸能史、国文学といった境界をまたぐ独自のものであり、圧倒的な印象を読者に与えるだろう。

これらの分野の研究者、そして関心をもつ人には必読文献になっているのだろう。

ちなみに、私は著者と同じ職場に、20年足らず在籍し、会議などで同席させていただいた。とくに、琉球大学教育学部の現在地への移転計画策定の際には、多くのことを学ばせていただいた。

9月

金城厚「沖縄音楽入門」音楽之友社2006年を読む

1. 御座楽 楽師 楽童子

素人の私にも馴染みやすくわかりやすい「入門書」だ。県立芸大教授でプロの音楽研究者が書いたものだ。

私が示唆をうけたいいくつかを紹介コメントしよう。最初は、近世における御座楽についてだが、次のように書かれている。

「江戸上りの使節団は、王子が正使を務め、そのほかの外交官は外交実務に通じた高級官吏があてられた。御座楽の演奏者は楽師と楽童子であった。楽師は若手の官吏で、「楽」では唄吟を担当し、「唱曲」では歌を担当した。楽童子は主として十二～十五歳くらいの少年で、各種の楽器を演奏した。彼らは江戸城の晴舞台での主役であった。

ところで、御座楽は娯楽の音楽ではなく、特別な機会にだけ演じる儀礼用の音楽であった。御座楽を伝習することは国政にかかわる重要な仕事とされ、十何年かに一度おとずれる江戸上りの時には、王府は大騒ぎをして特別な練習の事業を組んだ。御座楽の実技面の準備には三年程度も要したという。

こうした御座楽の伝習を実質的に担ったのは、久米村出身の歌楽師あるいは楽生師と呼ばれる人々であった。彼らは江戸上に同行することはなかったが、実際に演奏を担当する楽師や楽童子に御座楽の実技を教える教師の任務を背負っていた。中国文化の窓口はやはり久米村人だったことを忘れるわけにはいかない。」P35

ここには、「伝習」という用語が使われているが、事実上の意図的計画的教育が存在している。それまでの教育的活動の大半は、生活習慣的なもの、あるいは先人の行うものを見聞しながら学ぶ徒弟制的なものだった。それらに対して、ここでは教育訓練する組織を作り、教える専門家を任命し、教育内容を設定したものだのだ。

では、そこにおける教育方法（教え方）については、どうだったのか。そのことについての、意識化されたものがあつたのかどうか、関心もたれる。

その際、次の紹介文で示すように、歌楽師あるいは楽生師が、福州でどのように学んだのかに示唆するものがあるだろうが、そのことについては詳述されていない。

では、上の紹介文の続きを見てみよう。

「歌楽師は、ふつう江戸登りの二～三年前に任命される。彼らはまず、王府の命を受けて中国福建省の福州に赴き、そこに一年あまり滞在して音楽を修得する。そして帰国後、数カ月にわたって楽童子に集中的に練習させた。首里の安国寺というお寺に楽童子たちを合宿させ、さらに習得が足りない楽童子には個別に家庭教師として張り付いて特訓するという、大変なものであったようだ。

江戸上りプロジェクトの花形とも言える楽童子に選ばれる少年は、まずは家柄が良いことが第一条件だった。が、それだけではなく、音感が良いこと、聡明であることが求められ、美少年であることも条件となっていたようだ。江戸城で披露する技芸は御座楽ばかりではない。唐風の立ち居振る舞い、食事の作法を身につけて実行するよう指示されていた。また、書を所望されることも多かったので、礼法、書道なども訓練され、総じて「中国の学芸をさまざまに身につけた教養の高い琉球人」を演じてくることが求められた。」P 35～6

個別学習ではなく、お寺での合宿という組織的教育形態が注目される。さらに、次のようなことにも興味もたれる。

楽童子の選抜基準は興味深いが、選抜過程はどのようなものだったろうか。

楽童子や楽師たちは、江戸上りのなかで、どのようなものを学んだらうか。

近世においては、御座楽以外にも、多様な技芸の学習活動が展開されていたはずだが、それらには、御座楽伝習のような組織的計画的なものがあったらうか。

近世における士族世界での教育を解明するうえで、示唆に富みそうな事柄が多い。

2. 踊りにおける男性・女性 雑踊

踊りにおける男性・女性にかかわる次の叙述は興味深い。

「沖縄の村々では女性の方が圧倒的によく踊る。民俗芸能の分野では女性だけの舞踊ジャンルもある。首里城の宮廷の中でさえ、王家の私的な祭祀行事にともなう舞踊は女性のみによって踊られていたと考えられる。

つまり、近代の現象は女性が男性の領分を侵食しているのではなく、女性がかつて男性に乗っ取られた踊りを取り戻したと言ってもよい。女踊りは、琉球王国の時代には男性の女形が演じるころの「様式化された女」を表現する踊りであったが、女性舞踊家が踊るケースが一般的になったことによって、女踊りも「女性による女性の表現」として追求されるようになってきている。」P 57

近世における儒教イデオロギーが、士族の公的場面での女性の踊りを隠したとでもいえそうだ。

雑踊についての次の叙述にも興味もたれる。屋取を中心とする士族層と農民層との間の、芸能をめぐる関係を考えるうえで示唆的だ。

「楽譜「工工四」の掲載曲を歴史的に見ると、歌三線のレパートリーが最初に整備された十八世紀以降、曲目再編を重ねるたびに新しい曲目が加わっているが、そのほとんどは村々の歌が芸術的歌曲となって採用されたものと見られる。

十九世紀末から二十世紀にかけて、こうした民謡系の音楽と舞踊とが結びついて、新しい舞踊「雑踊り」が誕生した。一八七九年、琉球国が廃されて沖縄県となったが、その際、それまで王府に奉公し、その禄によって生活していた士たちはお役ご免となって収入を失った。

多くの士は開墾地を与えられるなどして地方へ散っていった。彼らは地方の村々で農業のかたわら歌三線や組踊などをその土地の人々に伝えたので、それまで宮廷の中だけにあった歌三線や組踊が、いっきに地方に広まることとなった。農民たちはあたかも砂地が水を吸い込むように、宮廷からの歌や踊りを吸収し、それぞれの村の年中行事として舞台を組み、舞踊や組踊を演ずるようになった。今日の沖縄の地方芸能の豊かさは、この時期に築かれたものが多い。」P70-1

「雑踊りは庶民の娘や若者、遊女などを題材とした舞踊で、《浜千鳥》《谷茶前》《加那ヨー》《花風》などがとりわけ愛好されている。これらの多くは一八九〇年代に作られている。

雑踊りの誕生は、沖縄芸能史上最大の革命だったと言ってもよい。題材の設定や衣裳が、宮廷で生活する男女（二歳、若衆、女）から、庶民を主人公とし、庶民の姿の衣裳となったからである。」P72

これらの記述からは、政治上の時代変化とは異なる芸能上の時代変化が読み取れて興味深い。

3. 歌掛け 奄美 八重山 集団の音楽 個人の音楽

しばし前に仲宗根幸市さんの本を紹介コメントした際に登場した「歌掛け」をめぐる叙述が、本書にも登場する。とくに今もそれが豊かに展開する奄美の例が、次のように書かれる。

「歌掛けの妙味は、信じられないほど数多くの歌詞のストックの中から、その場の状況に最もふさわしい歌詞を選んで、当意即妙に繰り出すところにある。このようなウィットに満ちた歌の遊びを聞かせてくれる奄美の人々の音楽性には、心から脱帽である。

歌掛けにはもうひとつナガレという方式もある。これは一連の長い物語をリレーで歌い継いでいくやり方で、八重山のコンタのやり方にも似ている。

奄美の歌掛けは、おそらくは沖縄全域にかつてはあったであろう歌掛けの風習とわざを今に見せてくれている。もしかすると、万葉や風土記の昔にあったとされる歌垣も、このようなやりとりの技術があったのかもしれない。」P178

「奄美では、舞台という特別な場で観客に見せることよりも、自分たち自身が歌い興じることに創造的な精力が注がれているように思える。その結果、沖縄よりもはるかに技巧的な歌かけが今日まで生き生きと残り、また、沖縄よりもずっと繊細でダイナミックな表現に満ちた島唄の数々がこれまで歌い継がれてきたのではないだろうか。」P184

こうしたことは、沖縄でも存在してきた。八重山について、次のように書かれる。

「ユンタが節歌に変身したとき、音楽や歌詞、歌い方はどう変わっただろうか。まず、交互唱の相手からの掛け声がなくなった。理由は、三線が掛け声の変わりをするからである。(中略)

交互唱そのものが無くなった。これもひとつには、かけ声の場合と同じ理由からだ。一節歌い終わって次の節に移るまでの三線の間奏、これを歌持ち(ウタムチ)と呼ぶが、これが奏されることによって歌い手は声を休め、次の歌詞を考え、気持ちを立て直す十分な余裕が与えられるようになった。交互に歌わずに、自分ひとりで続けて歌える技術的保証は、三線の伴奏によって与えられたのである。

もうひとつ重要なことは、交互唱＝集団の音楽から、独唱＝個人の音楽への変化が見られる。協同による楽しみの表現ではなく、演奏者個人の技芸の表現という要素が、明らかに前面に出てくる。」P135-6

新旧の安里屋ユンタの違いについての次の叙述も、同様のことを示しているだろう。

「ここには、「みんなで歌う歌」「みんながいっしょに協力・分担してはじめて歌える歌」から、「ひとりだけがカッコよく歌う歌」への変化がある。生活の場の歌としての民謡から、舞台の上でスポットライトを浴びながら歌う大衆歌曲への変質がある。八重山諸島の歌には、こうした歌の音楽的発展とか社会的変質の問題が凝縮された形で現れている。」P116

こうした変化がありながらも、今日の沖縄には、ここでいう「集団の音楽」の歴史が存在し続けてきたと私は考える。形が変わっているにせよ、である。

たとえば、カチャーシー、エイサー、さらには結婚式にもそうした側面がみられる。

※ 仲宗根幸市「カチャーシードーイ」(ボーダーインク2002年)は、それへの問題提起でもあろう。

無論、かつてのような形での存在というわけではないだろうが、それらを現代的に再創造する形で行われているし、またそれは「個人の音楽」が前面に出ているという現実をも視野に入れて展開されているのだろう。

こうした動向は、沖縄に限定されずに、「個人化」が進行する現代であるだけに、かえって世界的にも一つの流れになっているようにさえ感じる。

もう一つ私が知らなかったことを紹介しておこう。八重山の生活の歌・ユンタ・ジラバについてである。

「草刈をしながら歌を歌ったというけれども、「草刈歌」というものはない。家を建てるための地固め作業のときにみんなで声を揃えて歌ったけれども、「地固め歌」という歌はない。つまり、特定の産物や特定の作業形態と結びついた歌ではない。また、仕事をするためだけの歌でもない。」P126-7

4. 三線 知念績高 フロ音楽家 バイ・ミュージカル

最後に、いくつか注目したい事を並べておこう。

まず三線史にかかわって。

「明代の中国南部で、都会の市民の間で三弦が盛んだったことや、そのころ福建省から多くの移民が沖縄へや

って来て、久米村を拠点に中国文化を広めたという歴史的ないきさつを考えると、福建省の三弦が沖縄に伝わって、十五世紀の早い時期に「三線」に生まれ変わったと見るべきだろう。

おそらく、十五世紀のころは、主に華人居住地である久米村の人々を中心に中国の三弦音楽が馴染まれていて、十六世紀に入るころまでには沖縄の士（さむらい）のあいだにも充分普及して、沖縄の歌もこの楽器にのせて歌われるようになったものと思われる。」P101

このあと、16世紀から17世紀にかけて、三線は、宮廷・士族のなかで高い位置を確保していくのだが、その過程の研究は多くない。今後の研究に期待したい。

その高い位置の確保にかかわって、著名な知念績高（ちねんせっこう）についての次の記述は注目される。

「績高は無系、すなわち家柄のない下級の士の出であった。しかし、声も節回しも三線も抜きん出て優れていたため、師匠の賞賛を得て何度も御前演奏を務めた。」P79

「知念績高は、家柄によらず、純粹に音楽的实力だけで地位と名声を築いたという意味で、沖縄音楽史上きわめて稀な「職人的音楽家」と言えるかも知れない。」P79

士族が独占していた歌三線の世界にあって、微妙な位置にあった知念が、なぜ、どのようにして、歌三線での成功をえたのか、その過程に興味をもたれる。

現代の話で興味深いのは次の記述だ。

「沖縄にはプロの音楽家は少ない。たしかに、民謡歌手のなかにはプロもいるけれども、伝統的な歌三線の演奏者のなかにはまずいない。人間国宝になるような偉大な演奏家でさえ、つい最近まで会社員だったり、技術者だったりする。圧倒的多数の実演家は、本業を持ちながらアフターファイブの生き方として歌三線や琉舞を教えたり、舞台をつとめたりしている。」P187

確かに、私が知っている人にもそうした方がおられる。

次の記述は、音楽関係者にとって、強烈なパンチだろう。

「現代は逆に古典音楽が権威を追い求めて発展の力を失い、演奏団体や「文化財指定」などの看板に頼ろうとする傾向も垣間見える。また、日本本土や中国あるいは西洋の古典的音楽を学ぶことの大切さを忘れつつある。歴史に学ぶならば、二十一世紀の歌三線音楽を作り出すこれからの若い人々に求められるのは、バイ・ミュージカルと芸人（芸術家）の意識ではないだろうか。」P89

私は、バイ・ミュージカルなどの主張にとくに關心をもつ。音楽の分野に限らず、複数のアプローチをもつことは重要なことだろう。

立て続けに沖縄音楽関係の書籍を乱読しているが、音楽素人の私には興味深いことの連続だ。まだしばし乱読が続く。

9月

大城學「沖縄芸能史概論」(2000年砂子屋書房)を読む

1. 三線の影響

タイトル通りの本で、450ページにもなり分厚い。御冠船踊、古典舞踊、雑踊、組踊、狂言、沖縄芝居、民族芸能、三線音楽、楽器などと、沖縄の芸能の多彩さを反映した本だが、とくに組踊に詳しい。

そのなかで、私が知らなかったこと、あるいはあやふやな知識しかなかったことを中心に、いくつか紹介していこう。

まず、こんな記述が注目される。

「六二九年から六五六年にかけて編集された隋一代の歴史書『隋書』(流求国伝)には、「歌呼蹋踏し、一人唱えて衆皆和し、音頗哀怨、女子を扶けて膊を上げ、手を揺りて舞う」とあり、腕(膊)をあげて手を揺り動かして舞うという琉球舞踊の特徴的な手の振りについて記している。P31-2

この時代には、どんな人たちが住んでいたのだろうか。考古学的なもの以外は乏しい。この時代から数百年以後になると、かなり事情がわかってくるのだが、この史料と数百年後のことと、どういう関連があるのだろうか。

ところで、多くの沖縄音楽史にかかわる叙述は、次のような指摘から始まる。

「沖縄諸島ではノロを中心とした神女(巫女)集団が、神をまつる御嶽に集まって「ティルクグチ」「キューナ」「ウムイ」「ティルル」などと称される神歌(叙事的歌謡)を鼓や手拍子に合わせて歌っている。初源的な民謡である。」P252

これらが、民謡を含め、沖縄の芸能の源流だという指摘は多い。そして、それらが、三線と出会う中で、大きく変貌していく、という次のような指摘は重要だろう。

「古謡と称されるキューナーやウムイ、オモロといった叙事的歌謡から抒情的歌謡ウタ(琉歌)への移行には三線が大きな役割を果たしていたと考えられる。そして、三線音楽は舞踊や組踊と深く結びつくことになる。」P252

以下は、三線にかかわる歴史の叙述だ。

「三線は十四紀末～十五世紀初頭に、中国から伝来した。そして、永禄年間(一五五八～七〇)に琉球から大阪の堺に渡来し、本土でも普及したといわれている。」P255

「中国から伝来した三線は、当初はいわゆる宮廷楽器として定着した。士族の男性の嗜み、教養であった。三線音楽は、男性中心の音楽へと発展するのである。」P255

「琉球王府では、一五七五年に島津義久公の御前での演奏や、一六一〇年に尚寧王一行が薩摩の川内新田八幡宮に参詣して「三絃の秘曲」を奉納するなど、すでに高度な三線の演奏技術の存在を示す史実があり、さらに一六一二年の王府における貝摺奉行の三線打匠夫管掌は、三線の式楽化をうかがわせるものであると考えられる。」P251

2. 組踊の地方伝播

沖縄の農村には、現在の字毎に組踊などをする「伝統」を持っているところが多い。私が住む南城市でもそうだ。では、その「伝統」の起源はどのようなのだろうか。それをめぐって、本書は、以下紹介するように、いくつかの示唆的な叙述を行っている。

「一八〇〇年代初頭には、役人たちによって地方にも組踊がもたらされ、村踊り（収穫祭、豊年祭）のプログラムに組み込まれて上演されるようになった。

さて、組踊の内容をみると、「……敵討」と外題のつくもの、つまり〈仇討ち物〉がもっとも多く、全体の約八割を占めている。次に〈孝行〉を主題としたものが数演目あり、〈恋愛〉を主題としたものもある。

組踊のテーマは、封建倫理の徳目である〈忠〉〈孝〉が中心であり、それに王府が介入することが強調されている。その要因は、組踊が冊封使歓待のために作られ、上演されたこと、つまり、組踊が支配階級内部で閉鎖的に創作され、演じられ、鑑賞されたという事情によるものである。琉球王府は支配の論理を組踊のなかに具現させてみせたのである。冊封使歓待の宴が、王府が主催する国家的な行事であり、組踊は、そこで上演される歌舞劇だったからである。儒教の国からの使者を歓待するのに、それがどのような内容になったか、想像にかたくない。」
P 267-8

組踊を通して、儒教イデオロギーを地方にもちこんだという指摘は注目される。その際、地方役人層を担い手にしていたことを、以下の叙述が示唆している。

「組踊は廃藩置県以前にすでに地方に伝播していたということになる。

一八一八年には松田で組踊が上演されているが、おそらく松田以外の地域でもそのころにはすでに組踊を上演していたと思われる。松田だけが特別にこの時期に上演していたとは考えられず、おそらく、他地域にも組踊は流布していたであろう。琉球王朝時代に冊封使歓待のために演じられた組踊は、士族の社会でもその都度上演されていて、御殿内あたりを介して地方へ伝播していったのではあるまいか。また、地方役人が王府へ赴いたときに組踊を習得し、後日、島に戻る際には組踊を携えていたこともあったと考えられる。」 P 324

「どういう経路で組踊が地方に伝播し、上演されたのか、ということだが、各村の組踊関係者の答えの多くが〈未詳〉であった。芝居役者が地方興行の際に教えたのではないか、という話もあったが定かではない。廃藩置県（沖縄は明治十二年）以後に上演されるようになったと思う、という話はよく耳にした（宜野座村字宜野座、伊是名村、伊平屋村、他）。必ずしもヤードゥイ（首里・那覇の士族の帰農者）によって地方に組踊がもたらされたとはいえないようだ。

伊江村では「組踊りが村芝居で上演されたのは廃藩後で主家の総地頭から台本十種をもらったことによるという。（中略）台本が入ったとはいえ科白（せりふ台詞）が百姓には覚えられず、当分は文字の読める会所出身が中心になって指南役をつとめた」（『伊江村史』上巻、一九八〇年）ということである。

本部町字伊野波では、組踊や舞踊などの演目もふくめて、「明治三十三年頃から首里那覇から踊り師匠など迎え、

各役とも理想的に仕込まれたと言う。又、裕福の息子達は踊り季節になると、自費で那覇まで行って踊り師匠から手踊り流行歌など習得して来て所柄に似合わない程の上出来を呈した」という（『伊野波公民館落成記念誌』一九七八年）。」 P 3 2 2 - 3

以上の引用には、微妙な差異があるが、1800～1900年ごろに、組踊などが地方に伝播したと言えよう。

3. 村々における民俗芸能の独自性創造性

各地域における民俗芸能の独自の展開に関わる以下の叙述が注目される。

「組踊をはじめ民俗芸能は、その年その時の村人の嗜好や工夫を加えながら上演され、生き生きと発展してきたものである。よって、同じ演目であっても地域によって台本に異同があったり（登場人物名、せりふ、音曲名などに異同がある）、演じ方に違いが生じていることは何ら不思議なことではなく、むしろ当然な現象であって、〈芸能が生きて継承されている〉証である。」 P 3 4 4

「沖縄の村踊り全般についていえることだが、演目の多くは琉球王国の首都であった首里士族社会で生まれたものであった。それがいったん村々島々に受け入れられると、それぞれの村の生活や風土にマッチした、その地域独自の芸能として完成させている。」 P 2 4 9

首里士族社会からの規制が弱く、地域社会による（再）創造としたから当然だろう。それにしても注目されることだ。

また、各地域における三線使用について、次の記述に注目したい。

「三線が庶民の間に普及するのは、明治十二年の廃藩置県以後だといわれ、沖縄芝居の歌劇の世界が民謡流行のきっかけをつくったといわれている。」 P 2 5 3

「多良間島をのぞく宮古諸島は、三線にのせて歌う民謡が比較的になく、三線を用いない民謡が豊富である。」 P 2 5 3

なぜ宮古でそうであったのか、興味をもたれることだ。

八重山における民族芸能に関わって、以下の叙述に注目したい。

「全地域でみられる芸能には〈巻踊り〉〈獅子舞〉〈棒踊り〉〈太鼓踊り〉〈盆アングマ〉〈弥勒踊り〉などがある。巻踊りは集団舞踊で、ウタキ（御嶽。オン、ウガン、ワーともいう）と称する祖先神をまつる聖地の庭や、祭りの広場で踊られる。円陣をつくって踊るが、振りには両手を前後の上げ下げろしたり、広げたり、拌み手をしたりする。緩やかなテンポで踊りはじめるが、次第にテンポアップする。神女の祭式舞踊から発展した踊りであると考えられる。」 P 2 4 6 - 7

弥勒節にかかわって 「弥勒世は常世国＝ニライ・カナイから来訪すると人々は考えているのである。元来、仏教で説く弥勒菩薩は、特に農業と関係があるわけではないし、遙か彼方の海からやって来るとも言っていない。しかし、現実に沖縄では、海の遙か彼方から五穀の実りをたずさえて来訪する神であると考えている。つまり、固有の常世神来訪の信仰の上に弥勒出世の信仰が重なったのである。」 P 248-9

エイサーも含めて、近世沖縄における仏教展開は、他府県とはおおいに異なる点には注目される。

このように見てくると、沖縄芸能、ことにその地方における展開が、独自性創造性の濃いものであったことが、注目される。その特質が「中央メディア」が強力な今日まで続き、そのことが、他府県とは大きく異なっていて、現代における沖縄の音楽芸能の独自性創造性の強力さの基盤になっているともいえそうだ。

9月

仲宗根幸市「「しまうた」を追いかけて」1998年ボーダーインクを読む

1. はじめに

「琉球弧の民謡」についての小論を綴り合わせた本だ、小論は主に1980年代から90年代にかけて発表されたもので、初出から時間は経過しているが、私がこれまで知らなかった興味深い論が続く。このところ音楽関係の本をあさっていて、店頭で見つけたものだ。

まず、民謡が歴史的にどのようなものであったかをめぐってである。

「現代人にとって、民謡は娯楽的側面しか理解されていないが、歌は場合によって恐ろしいものでもあり、人間生活のあらゆる分野であたかもわれわれが呼吸するかのごとく生き、それぞれの社会的機能を果たしてきた。基本的に民謡は集団作業の場の目的を歌の目的としており、歌い手自身の個人的心情や体験を歌うようなことは、歌の場の社会性や歌の目的が拒否する。」 P 17

「一昔前までの沖縄の農村社会や、今日のアジア・アフリカの未開発社会に於ては「生きる」ということと、「歌を歌う」という行為は同じ意味をもっている。」 P 118

「本来、民謡は集団作業を「場」としており、歌自体共同作業の所産であり、一個人の「作」ではない。むしろ、歌がある限り誰かが作ったのであることはまちがいない、しかし、それはあくまでもその時の生活共同体を支える各成員の所産である。」 P 99

「古代歌謡の研究者で知られる土橋寛氏は、『古代歌謡』で「民謡の場は多く協同作業であるが、その場を構成しているのは地縁的、職業的共同体の成員である。そこには芸謡や文芸のような歌い手と聴衆の分化はなく、す

すべての者が歌い手でもあれば同時に聞き手でもある。歌は協同作業を場とするのみならず、歌そのものも協同性業である」として、全員が参加することが集团的民謡の条件としている。」P100

「最近、沖縄民謡の歌唱法は、その多くが独唱形式に大きく変化しつつある。民謡を独唱するという事は、歌謡史の上で新しい形であり、歌い手と聴衆の分化を強く感じさせる。反対に宮古・八重山・奄美諸島では、男女や集団による交唱歌が今日も瑞々しく生きており、民謡の古い姿をしのべる思いだ。

本来、歌を掛け合うという習俗は、古くは日本本土において唄歌とか歌垣と呼ばれ、広く行われてきた、春山入りなどに見られる遊びがそうである。(中略)

南島における歌掛けもおそらく、これら日本本土の古い時代の唄歌や歌垣、そして今日もアジアの照葉樹林文化地帯で広く展開されている歌掛けとほぼ共通した世界であろう。」P29-30

ここに書かれていることで思い出されるのは、1960年代後半以降、合唱や群読指導などで旺盛な活動を展開した家本芳郎さんのことだ。多様な声をハーモニーとして、あるいは掛けあいとして、生徒たちの集団表現活動を展開していたことは有名なことである。その際、中世の連歌にも、かれは注目していた。それらは、近世以前の民衆の表現世界を復活させようという意味合いがあったようにも思う。

2. 掛け合い歌

次の徳之島の例などは、まさにそうだ。

「徳之島では戦後の一時期まで男女が座って輪をつくり、木枕を次々回して遊ぶ習俗があったという。そのとき歌われる古いうたが枕節なのである。」P76

これなどは、私がワークショップ型授業で行っているものとも共通する。

私は、家本さんの集団表現展開に強く刺激され、1970年代後半から1990年代前半にかけて、多様な文化表現活動を展開してきた。それらでは、多様なメンバーによって構成される集団が、個々の持つ多様さを生かしつつ、つまり「異質協同」で表現することを重視した。また、「歌い手と聴衆の分化」ではなく、「すべての者が歌い手でもあれば同時に聞き手」でもある表現活動であった。

いくつも行った結婚式の演出、琉球大学教育学部のフレッシュマン・フェスティバルでのキャンプファイアの演出、学校教師対象の研究会での集団表現、現在進行中のことであると、大学授業で60分足らずで創る集団表現などがそうだ。それらの概要は、『学校を変える 学級を変える』(青木書店1996年)などに掲載したので、興味ある方は参照されたい。

同じことは、同時並行的に展開してきたワークショップにもいえることだ。

脱線したが、本書の記述には、これらとも関連して、次のように注目される記述が続く。

「沖縄本島でも、戦前までは掛け合い歌が多かったようで、それは「モーアシビ歌」に顕著に見られる。モーアシビで湧水の如く歌の出る人を「歌袋」を持っている人といい、また歌あそびに慣れていなかったり、はずか

しくて応答しえない相手に対しては、気やすく歌えるよう掛け歌で誘い込んで座の雰囲気をつくるというから、すばらしいという一語に尽きる。お隣り奄美大島の民謡は、それこそ掛け合いを中心とした唱法で、歌あそびに於て単独で歌うというのは少ない。全て複数の人々による交唱形式が貫かれている。(中略)

奄美と比べて沖縄の掛け合い歌は大きく衰退し、昔の歌あそびや、そこで展開される古い形の交唱形式が変化を遂げ、消失している。また、掛け合い歌の研究もほとんどなされていない。「歌かきと歌話の掛け合い的構造は東南アジア歌謡の普遍的な特長とみられるのであって沖縄諸島だけが例外ではあるまい」(「南島文学」二八〇頁)と、古代歌謡研究家、土橋寛氏はインドネシアや東インド諸島の歌掛きの行事や交唱歌を紹介しながら、これまで発表されてない沖縄の掛け合い歌の研究を強く望んでいる。」P102-3

さらに、私にとってきわめて新鮮な、次の指摘にも注目してみたい。農業的色彩に包括されない視点を持つことは重要だろう。

「海を生活の糧にしてきたポリネシアやメラネシアの海洋文化を背景にした諸民族の中には、揺れる動き、スイングする動作があると、専門家は特徴づけているが、達観である。沖縄の古典舞踊は、農耕民族の動きと深い関係があるが、カチャーシーや種々の巻踊りに見られる沖縄・奄美の庶民芸能には、海洋民族の波の動きがしっかりと脈うっている。」P29

3. 古謡・オモロ・琉歌、宮廷音楽と庶民音楽

本書は、歌の変化・歴史について鋭い問題提起をおこなっている。時代は、今から数百年前の話だ。注目したい論を、断片的になるが紹介していこう。

「琉歌形の形成は三味線歌以前の民俗舞踊歌にその謎を解くカギが秘められているのではないかと考えている。民俗舞踊歌とは何か。それは奄美では八月踊り歌であり、沖縄ではウシデーク(臼大鼓)歌のことである。」P15

「ウシデークには古典音楽と共通の節が多くあり、一般の民謡の元歌と考えられる歌がある。」P45

ウシデークの実演には、私が住む字の隣字の奥武島で出会った。

「南島歌謡はキューナの段階まで節への自覚がほとんどないと思われるが、おもしろでは節に分かれて、一唱百和ではなく、これまでの歌をより音楽的に高める囃子の部分が強調されてくる。キューナより節が長く、音楽的表現の可能性が大きく進展しているともいえよう。」P84-5

「オモロは沖縄の古謡であり(沖縄での古謡というのは、三弦楽が登場し、三味線と琉歌が一体となって音楽芸術として洗練され、節歌が生れる以前の歌謡をいう。沖縄本島・周辺離島のオモロやキューナ、宮古のアーグや八重山のアヨウ、ジラバ、ユンタ等が含まれよう) (中略)

オモロは誰が作ったのだろうか（ここでは個人を指しているのではなく、その社会の階級との関係）。多くのオモロは首里王府と関りのある身分の人々の線が濃く、地方オモロでも地方の常民の歌ったものではなく、首里王府とむすびつく神女を通して多く歌われている性格がつよい。（中略）

古謡は宗教的性格が強く、祭りの場を中心に唱えられたものが歌謡化したものであり、のちに「農民はおもろの内容を集团的に多くの巻踊の中にうけついでいる。（中略）宮古、八重山の古謡は、王府の権力支配がすすむ中で当時の神遊びなどが禁止され、琉球化の強要によってもとのものはこわされてしまった。しかし、ここでもそれを農民たちは豊年踊などいくつかの巻踊の中に、また宮古では数々のアヤグ（歌）、八重山ではジラバユンタ（集団労作歌）などうけつぎ発展させた」（杉本信夫著「沖縄の民謡」二三六頁）。

オモロの衰退と共に生れたといわれる琉歌は三味線の登場によって急速に発達し首里王府の保護・将励もあって、宮廷音楽として洗練され、芸の極地を求めていった。他方、本来謡う歌である琉歌は、本土との交流による影響もあって詠む歌としても自立・発展していくのである。（中略）

琉歌は琉球で生れ、琉球の人々の思いを歌った歌謡である。その発生年代は十六世紀前半説（仲原善忠）と十四世紀末から十五世紀始めという説（新里恵二）一があって確定していない。当初、歌謡として歌われていたが、のちに詠み歌として、鑑賞の対象としての文学性も備える。首里王府の保護将励によって発展した琉歌は、封建社会の上流階級によって育てられ、維持・発展させられてきた社会的背景がある。とすれば、今日伝承されている歌（古典音楽と称している歌謡）は、もともとどのような歌詞やメロディーであったのか、伊波は、首里の芸能家によって集められた地方唄は宮廷芸能として位置づけられるようになって首里化されて発達してきたと述べている。

一般庶民の間で歌われた歌が首里の王族の間で歌われるとすれば、当然品位を重んじ、芸の深さ、重みへ走り、洗練に洗練されよう。ここに沖縄の琉歌のあらたな「発展」への軌跡をみるが、伊波は『古琉球』の中で、山内盛彬氏の祖父から伝受された湛水流を聞き、素朴な田舎情調を感じた旨述べている。それにしても、宮廷芸能として位置づけられる以前の地方唄がどのような歌詞やメロディーであったかは興味のあるところである。」P107-9

「古い時代の沖縄・宮古・八重山の歌あそびでは、農民独自のこまかいルールがあったと思うが、いつの間にかこれらの古い習俗は消失し、宮廷の影響を多分に受けている。もちろん、宮廷の音楽や儀礼でも、逆に農民の歌や歌あそび（儀礼）をかなり取り入れていることを見逃してはいけない。それは宮廷音楽の系譜を究明していけば判明してこよう。」P37-8

これらの叙述で提起されている、宮廷音楽芸能と庶民音楽芸能との相互影響の関係には注目していかなくてはならない。それは、数百年前だけでなく、100～200年前にあっても、そのことが認めれる。これらは、音楽芸能の継承とか教育に深く関係することでもある。

以上紹介した文を読んで、仮説的要素も含めて、古謡、オモロ、琉歌の歴史の概要を知ることができよう。

これまで紹介したことが、別の角度から、次のように整理論述されている。

「筆者のいう民謡とは、農業中心社会の庶民による労働（作業）—それを中心とした人間の「行ない」、それによって啓発される人々の思いや感情を、庶民自らが歌い伝承されてきた歌謡だと考えている。民謡の主人公（歌を生み歌う人）は、あくまでも一般の農民・漁民であり、昔の共同体を支えてきた担い手たちである。

オモロは南島に伝承されている歌謡群の中の古謡である。オモロ歌謡の担い手は決して平民ではない。平民が歌謡の中心的担い手となり、主人公たりうるのは、オモロ歌謡の衰退前後からではないだろうか。

南島の民謡が花咲く母胎の一つにオモロがあるという意味で、オモロも民謡と関係がある。だが、歌の目的や場の構成（員）等厳密に検討すれば、民謡の範疇から分けて考えた方が穏当の様に感ずる。この件は後日の研究課題としたい。

一方、首里士族の上流社会で、労働の場を離れて、上流社会の教養や鑑賞用として目的意識的に創作された歌が、本来いう民謡の概念でストレートに扱えられるか、ということも疑問を持つ。只、かつて上流階級の音楽だったのが、封建社会の崩壊によって大衆化され、歌われるようになると、流動性の激しい民謡の性格から、場所的・現代的に考えれば、民謡と考えられ追認されないこともない。いずれにしても研究の余地は残る。

『琉歌百控乾柔節流』（一七九五年）には歌のつくられた地方名も記されているが、当時、地方の農民が実際に八八八六の短詩形を生活化するまでに浸透し、作ったかについては疑問を持たざるを得ない。むしろ、芸能の心得のある役人の地方赴任によって、それぞれの任地（地方）で役人が歌を作り、その地方名を冠せたことも考えられるのではないか。とはいえ、伝説入り混つての恩納ナベなどの存在から、農民の文化をもっと評価してよいだろう。地方の農民の間で作られたとしても中央に集められる段階で、歌詞や詩型の改作があったのは考えられることである。」P109-110

私にとって、そして、現在再開している沖縄教育史研究のうえで、大変示唆的だ。教育史で文化伝達創造にかかわる営みを扱うが、そのなかで音楽芸能が重要な意味・位置をなすことを改めて考えさせられる叙述だ。

ただ「平民が歌謡の中心的担い手となり、主人公たりうるのは、オモロ歌謡の衰退前後からではないだろうか。」という表現は気になる。オモロ以前に平民が歌謡の中心的担い手になることはなかったのだろうか。ズブの素人の私には何とも言えないことだ。

この紹介文を、八重山に焦点をあてて述べているとも言えるだろう次の文にも注目したい。

「一九二五年、東洋音楽の研究者田辺尚雄氏の八重山訪問によって、八重山の名もない農民の間で歌われていたユンタ・ジラバ・アヨウ等、生活息吹の感ずる口承歌謡の価値が説かれた。それによって八重山民謡は、新しく生命をふきかえしたといえよう。

これまで、八重山の農民は役人の作った「節歌」に対するコンプレックスを多分に持っており、どうしても祖先から伝承されてきた労作唄には自信をもつことができなかつた。また、音楽家といわれる人々も節歌の優越性を強調、農民の生活の歌であるユンタ・ジラバ・アヨウを民族音楽として正しく評価することができなかつたのである。」P98

さらに、こんな文もある。先に紹介した歌垣・歌掛けにかかわる指摘だ。

「筆者の知人によれば、八重山のある地域では独特の歌あそびがあり、座がクライマックスに達すると、トゥバラーマが歌われる。まず、三味線を弾く人が歌を打ち出せば、座を構成しているみんなは、関連する歌を即興で作り、歌掛けをして応えていかねばならない。だから参加者は次々と内容的に連続させていくことになるのである。歌あそびに参加した人は皆真剣であり、どうしても即興で歌掛けの出来ない人は、この座の失格者になり、歌あそびを停滞させるため責任重大であるという。

今日、八重山でもこういう歌掛けはほとんどみられないが、地域によってはそういう古い唱法が残っているという興味深い報告も受けている。しかし大方は、男女の交唱形式ではあるが、男が歌い手となり相方の女性がハヤシをやっているのが現在の唱法である。だが昔は男女の歌掛け歌であったことは歌詞を検討すればうなずけよう。」 P100-1

異質協同という視点から考えてきた私にとっては、きわめて重要な視点だ。これらを現代的に創造再生させていく示唆を与えているように思う。

4. 口承歌謡としての民謡 創作としての「民謡」

民謡の展開について、次のように興味深い歴史的把握がなされている。

「沖縄の民謡には二つの流れがある。一つは奄美同様、庶民の生活の中から生まれた自然発生的口承民謡の世界であり、もう一つは、琉球王国を背景に、宮廷音楽と呼ばれる芸術性高い古典音楽である。これら二つの流れを汲む口承民謡と芸術音楽は、発生史的に歌の目的、歌われる場、歌の社会的機能、歌い手と聞き手の文化の問題等、その差が顕著にみられる。

工工四と称する楽譜の誕生により、沖縄の古典音楽は宮廷風としての荘重典雅、繊細華麗な洗練された技法が発達した。この音の記譜化により、多くの人と一緒に演奏できるというプラスの半面、地域の多様な節まわしが削ぎ落とされ、民謡の統一化、画一化へつながったマイナス面は否めない。(中略)

沖縄の古典音楽は技巧を重んじるあまり、三味線も抑制され、緩やかなテンポで画一化し、生活の躍動が切断されている。いわゆる、奄美のような生活の中に歌があるという本来のものではない。そこには芸術性はきらめいても、生活の生き生きした輝きは希薄なのだ。」 P92-3

民謡と深いかかわりがあるとみなされがちな琉歌についての次の指摘は、琉歌に疎い私には新鮮に感じられた。

「琉歌はもともと口承歌謡であったが、首里王府の保護・奨励もあり、本土との交流も重なって文字文化が伝わると、記録化される。当然文字化されると音楽の世界を離れて自立して歩み、あくまでも文字を通してその歌詩、表現、意味内容に主眼点がおかれざるを得ない。それ故に歌の性格変化によって、大衆性を失ない、そこには個人の世界が生まれ、文学の世界がひらかれるのである。」 p111-2

さらに時代が下って昭和初期以降になると、口承民謡を中心とする民謡にも新しい動きがでてくることを次のように述べる。

「沖縄民謡の世界は、昭和の初期より目的意識的「創作民謡」が流行り大きな転機を迎えた。むろん当時の「民謡」は比較的民謡の「心」が大事に継承・発展され、ウチナーンチュの「思い」がにじんでいる。つまり、その頃までは、まだ地縁・血縁的意識が強く残っていたからであろう。

だが、昭和四〇年（一九六五年）頃を境に沖縄の民謡は更に新しい局面に突入した。それは「民謡」を歌う、

歌手の大量登場によってである。(中略)

個々の歌はその地域の文化と切り話しては考えられない。だからこそ郷土性を失った「民謡」は民謡ではなく、単なる流行歌でしかないといわれるゆえんである。(中略)

只、ここで注意せねばならないのは、自然発生的口承歌謡と「創作民謡」は、歌の生れる社会的基盤、歌の内容の果す役割等全ての面でその性格が大きく異なること。だから、「創作」にあたっては本来いう自然発生的・口承歌謡としての民謡と、あくまでも個人の意思のはたらきである創作としての「民謡」とは概念を明確に区別せねばならない。」P116-7

著者は、この「創作」民謡を「民謡」と見るかどうか、微妙な提起をしているのだが、それにかかわって、次の引用は、実に注目すべきものだ。

「沖縄で、ある民謡関係の人たちと話し合う機会があった。

幹部の一人いわく「昔の人のように即興で歌詞をつくって歌える人はもういない。歌詞が固定化している。だから、トゥバラーマ〈掛けあいの代表格たる叙情歌〉も近いうち斉唱になっていく。自分たちはそういう方向を考えている」一と。

私はそれを聞いて愕然とした。なぜなら、南島の民謡のよさは掛けあいのふくよかさにあり、斉唱になったら節の統一がなされ、画一化は避けられない。早速私は「たしかに各地の民謡をみても、いまどき即興で歌詞をつくり歌っている人はほとんどいない。しかし、共通歌詞から臨機応変に歌詞を選び、歌の流れにマッチするような交唱歌は厳然と生きている。こういう掛けあいの形式が生きている叙情歌の伝統は、地域の節まわしや個人の持ち味を生かすところに意義があり、それを画一的に斉唱で固めたのでは伝統をつぶし、面白くない。反対だ」一と、応酬したことを覚えている。」P91-2

私は、ここでの著者の発言に共感を覚える。1970年代末から90年代にかけて、私が旺盛に展開した文化活動は、この著者の主張に響き合うものだからだ。

とはいっても、「創作民謡」が支配的位置をしめている現代においては、口承民謡・掛け合い民謡だけでなく、「創作民謡」、そして両者の交流関係をも視野に入れて発展させていくありようを創りだしていくことが必要だろうと思う。

5. 民謡と学校教育

民謡と学校教育にかかわっての指摘に注目しよう。

まず、近代学校成立以前の伊江島における「ケージュウドウイ」というのが興味深い。

「ケージュ(会所)というのは、現在の学校の前身で十五歳以上の島の番所役人の子弟などを三、四年教育する学習所であり、伊江島の場合、舞踊も教え、年一回旧正月に披露する習わしとなっていた。王府のやる御冠船踊りの上演は禁止されていたので、島の民謡やヤマト民謡に振りつけをして舞踊化したのが特徴。」P42

会所で踊りを指導したという記述を目にするのは、私は初めてだ。というよりも、見過ごしてきたのかもしれ

ない。

そして、現代の学校に関わって、以下のような問題提起をしている。

「なぜ「民謡」を学校教育に位置づけられないのか

このテーマは長年抱えている筆者の正直な気持である。知識人であればあるほど、自分たちの国の音楽について無知無関心の人が多いとよくいわれるが、民族音楽の研究で有名な小泉文夫氏は「ある民族の音楽文化は音楽だけで成り立っているものではなく、言葉だとか身体的運動だとか、さらに自然環境、歴史的風土、社会的習慣など、要するにその民族の文化全体と密接な関係の中で育ってきている」（「日本音楽の再発見」八頁）と述べ日本の民族音楽を大切に、わらべ唄を出発点として教育を根本からやり直すべきことを過去に幾度となく提案しているが、これらの提起は西洋音楽中心の風潮の中で、ことごとく批難され、拒絶されている。

（中略）

沖縄の現状に目をむけると、七二年の本土復帰を前後して中央文化の攻撃が激しくなるにつれ、ふるりの文化を見つめなかつた気運が高まり、学校教育でも一部では郷土芸能を位置づけていく努力が試みられてはいる。しかし沖縄の民謡はシマグチを使い、庶民の生活や思いが生々しく表現されているため、卑猥であるとかいろいろの理由で蔑視されてきた。

だが、沖縄の民謡（しまうた）のすばらしさは、南島の山河や海の香り、土の香りが息吹き、豊かで創造力たくましく、そして美しいウチナーンチュの思いが自由奔放に方言で表現され、歌われているところにあるのではないだろうか。

我々は郷土の民謡をもっと陽のあたる場所におしあげていくべきである。とくに、学校音楽を担当している教師に強調したい。」 P 114-5

共感できる主張だ。この課題実現には、教師に期待する以上に、政治家を含めた文教行政にかかわる人の役割が大きい。そしてそれは、ここ130年間の学校のありようの大転換につながりそうな課題なのだ。

8月9日

沖縄県立芸術大学大学院で「芸術表現総合比較研究Ⅰ」の授業担当 我ながら驚き

5月芸大の先生から非常勤講師依頼の電話。当初は、教職科目だろうと推理し、過剰状態なので、「お断り」を軸に応答するつもりだった。

ところがだ。今年大学院の博士課程に進学した院生が、私の「沖縄県の教育史」を読んだことをきっかけに、授業を受けたいと申し出たそうだ。大学院の授業では、院生の希望を生かす方向で設定するということらしい。

なにも私が音楽の授業をするわけでもなく、音楽研究の指導するわけでもない。その院生が沖縄音楽教育史を専攻しているので、彼女に必要な沖縄教育史を語りながら、一緒に研究をすすめるという流れでいいのだ、という話を聞く。受講希望の院生とも話す。修士論文を戦前沖縄の学校音楽史で書いたとのことだ。それをベースにして、近世と近代をつなげた沖縄音楽教育史をしたいとのことだ。

そういうことなら、ということで受諾した。

これに類したことは、10年以上前、中京大学大学院であった。体育・健康教育分野で文系型の博論を目指す院生がいて、理系を中心にする教員構成の中で、担当できることが限られるので、私が「健康科学セミナー」のうちの1クラスを担当することになった。3年余り続けたが、数人～10人ぐらいの院生を対象に、この分野の研究課題について、研究ワークショップ風に展開した事が、私にとっても印象深い体験になっている。

私にとって、院生であるにしても、異分野の人と研究討論していくことは、やりがいがあるだけでなく、新しい発見・創造があって、とても有意義だし、それだけに楽しいことだ。

ということで、9月から月一回8時間の授業を開講することになった。この分野に関心を持っている方にも、参加してもらい、授業を充実させようという話も進んでいる。

ということで、授業準備を始めた。まずは、久しぶりに、私が書いた「沖縄県の教育史」を読み直し、その後の研究進展にあわせて補足発展させるべきポイントを調べている。

後期は、このほかに、琉球大学で「特別活動の研究」を、金曜日4、5限、10～11月に担当することになった。4コマの授業をフーフーいしつつ担当した前期と比べて、落ち着いて進められる点でよかった。そして今、次年度前期が4コマにならないように、いろいろとお願いしている最中だ。

4月10日

シュガーホール将来計画ミニシンポの案内

シュガーホールは、佐敷町立時代も南城市になってからも、大変創造的な活動を展開し、市民ばかりでなく、沖縄県民、さらには全国・海外からも注目を浴びてきた。

南城市になって、5年間の第一期の計画が終了し、現在、第二期の計画を作成中だ。私も、その運営審議会会長としてかかわっている。

この計画作成を、関係者だけでなく広く市民の声を結集してすすめるということで、ミニシンポを開催する。誰でも参加できるので、関心をもつ多くの方の参加が期待される。

シュガーホールでは現在、シュガーホール活性化計画を作成中であり、県内唯一の音楽専用ホールであるシュガーホールを市民の皆さんにより身近なものとして活用していただくためにはどうしたらよいかと考えています。そこで、南城市のまちづくりについて、音楽・文化・芸術という視点から語り合ってみませんか？我が南城市は、琉球開闢の神話をもと、歴史が深く、数多くの文化財が残っており、地域には多くの民俗芸能が継承され、手藝芸術祭が行なわれるなど現代の工人も多く住む文化芸術が薫るまちとなっています。文化芸術から起こすまちづくりを皆さんに語り合ってもらい、今後の南城市の文化創造の発信にどのように結び付けていくことができるのかをご提案下さい。

開催日	平成25年4月20日	土曜日
時間	午後2時～5時	
場所	南城市文化センター2階 集会室	
主催	南城市文化センター・シュガーホール	

4月22日

充実のシュガーホール・ミニシンポ

20日開かれたミニシンポ。5人のパネリストの力がこもり、溢れんばかりの中味の提案、そして、後半の討論は、参加者全員発言で盛り上がる。そこでも硬軟多彩な提案で満ちていた。

私の頭は、満杯だ。それでも、発見した事、印象的な提案のごく一部を紹介しておこう。

- 1) ホールと祭りとの結合
- 2) 東北大震災で生まれ変わったホールと、そうでなかったホール。
- 3) 貸館中心のカルチャセンター型ホールではなく、コミュニティの核になるようなホール
- 4) シュガーホールの屋上からは、素晴らしい「気」がたっている。
- 5) シュガーホール紅白歌合戦。素人がホールでスポットライトを浴びて歌う。
- 6) 「スタンウェイ」ピアノを、リレーで弾く企画。
- 7) 音楽挙式（ホテルと提携して）。還暦祝いの場。
- 8) シュガーホール・ビアガーデン（カフェと提携して）
- 9) 子どもたち自身が企画し運営するイベント
- 10) 量の追求（動員客数など）と質の追求（音楽の質の高さ）
量の追求に追われないこと
 - 11) 「シュガーホールを盛り上げる」と「町おこし」の二つの柱。どっちなのか。両方なのか。
 - 12) 「なんじい」を活用
 - 13) 広場で、「旗頭」を。上からも見られる。
 - 14) 青年会の「青年芸能祭」と結ぶ。青年会芸能が、シュガーホールで発表できる
 - 15) シュガーホール近くのきび畑で「迷路」を作って遊ぶ
 - 16) シュガーホールへの道路を、シュガーロードと命名して街並みができるようにする。
 - 17) 館長がいなくてもいいのか
 - 18) 新人賞受賞者が、高校生などを対象に有料ワークショップをする
 - 19) 楽屋廊下でライブをする
 - 20) ロビーで、ライブ&スイーツ・バイキングをする。投票で美味しいスイーツ年間グランプリを選出する。
 - 21) ヒト・ワザ・文化・景観・空間のつながりを、歴史的に捉え、南城市エコミュージアム作りにつなげていく。

満杯で書ききれない。

シュガーホールは、すでに市内外の広汎な場で全国的话题になるほど活性化している。今後、さらに市内の多彩な文化活動とつながりあいながら、より洗練された活動を展開し、それが南城市の町づくりに貢献するように、一層の工夫を追求できるようになればと願う。

3月10日

「沖縄感性・文化産業シンポジウム」を聴く

8日夜、県立博物館・美術館講堂で開かれた、沖縄総合事務局主催のものだ。

私の知らない世界が一杯だった。知っている人という、パネリストの下山久さんと平田大一さんだけで、たくさんいた聴衆のなかには、たった一人しか知人はいなかった。その知人から「浅野さんがいるなんて」といわれてしまった。

聴く話も、「文化の産業化」「エンターテインメントビジネスの振興」がテーマなのだから、「初対面」のことが大量だ。でてくる単語、とくにタレントやエンターテイナーについては、まれに知っている人がでてくるくらいだ。それに、みなさん、ひどく早口だ。まるで別世界だ。

それでも、参加動機はある。地域おこし、とくに沖縄おこし・南城おこしという事と、音楽芸能を中心とする文化、さらに歴史遺産文化遺産とを結びつけて考えることを、この一カ月足らずしてきたので、その流れで、偶然手にしたチラシを見て、出かけた。

だから、私とは関係ないこと、異論をもつことも多いが、勉強になり刺激を受けたことも多い。いくつか並べよう。

- 1) ここわずか10年ほどでの激動 「CDの売上激減からライブ化へ」が象徴
- 2) キーワードが「参加と変化」。私自身も、80年代に指摘したことだが、静かに鑑賞するという時代から、観衆自らが参加してパフォーマンスするという事が、業界のなかでも主流になっている。
- 3) 130万余りという沖縄の人口では、産業化できる量ではないが、600万という観光客数を入れると、日本の人口の何%かになり、産業化の検討対象になる。海外からの観光客が音楽芸能を求めてくる可能性。ハワイ、バリ、ベトナムなどの事例を参照。沖縄から海外にも音楽芸能をもって出かける。

沖縄の特徴と課題にかかわって、

- 1) 沖縄の伝統としての強みがある文化とエンターテインメントとをどう関係させるのか、という問題が一つの焦点。
- 2) 沖縄文化と観光とをどう関係づけるか。観光客は、沖縄の海洋レジャーを楽しみにくる比率が高い。沖縄の音楽や文化を楽しみたいという観光客も多いが、そうしたものを楽しめる場がとても少ない。
- 3) 沖縄芸能は、レッスンを受けることが中心の「習う」スタイル。それを「見せる」「発信する」というものへと発展させること。
- 4) 文化を産業化するという事は、それで生活できる職業にすることでもある。アーティストは多いが、それだけでは「食べていけない」現状。
- 5) アーティストは多いが、それを支えるスタッフ、マネージングする人が少なすぎる。
- 6) 「皆がステージに立つ」と言うだけでなく、「一流」のものを育てる必要がある。

さらに、こうした問題を、文化芸能と教育とを比較して考えるとどうなるのか、とまたまた考えてしまった。いろいろと考えていきたいことが多い。

2～3月

シュガーホールと南城おこし

1. シュガーホールと南城まちづくり

「広報なんじょう」2月号で、4月から南城市の新しい機構がスタートすることが書かれている。南城市文化センターシュガーホールは、従来の総務企画部観光文化振興課ではなく、企画部まちづくり推進課に移るということだ。

そこで、改めてシュガーホールが南城のまちづくりのうえでどういう位置にあり、どういう役割を果たしてきたか、今後果たしていくか、についてあらためて考えてみたくなった。

この1月には、シュガーホール・オーケストラのスタート、2月には「組踊」公演と、またまた新たな企画が出てくるなど、話題が次から次へと出てくるシュガーホールだ。しばし前には、市民ミュージカル「太陽の門」が大きな脚光を浴びた。新人オーディションは、すでに県内はいうまでもなく県外どころか国外にも知られ、国外の応募者も増えている。そこで表彰されたこともきっかけになって、県内県外国外でプロとして活躍する人を輩出している。

さて南城まちづくりとシュガーホールという事で考えると、いくつかの連鎖反応を引き起こすサイクルが注目される。

一つは、南城の外側との関わりだ。外側サイクルと名付けよう。

優れた企画・公演 ⇒ 市外県外国外からの注目 ⇒ 公演への来場者増加・南城への注目・公演への参加 ⇒ 南城について知りたい訪問したい観光したい ⇒ 次の企画・公演への注目、参加希望、観光滞在 ⇒ というサイクルが生まれている。

その効果を並べてみよう。

1) 南城市の知名度好感度人気度アップ。

「南城ってどこ?」「シュガーホールがあるところよ」、「シュガーホールはどこにあるの?」「南城よ」という会話

2) 南城市訪問者観光客数アップ

3) シュガーホールに学ぶ人アップ

「そんな田舎に音楽専用ホールがあり、多彩な企画公演で沸かせているのはなぜ?」という質問。ここ30～10年間に、各地に文化ホールの的なものが誕生したが、そのなかにあっても抜きん出た評価を得ているホールとして、参考にしようとする動きが広く見られる。

4) シュガーホール企画への市外参加者数アップ

5) シュガーホール企画への提案アップ。

市外からの持ちこみ、ホール利用申し込みが多く、使用率が平均的文化ホールよりずっと高そうだ。

ということで、音楽関係者や行政関係者にとってだけでなく、一般市民にとっても「誇り」「自慢」のホールになってきつつある。

2. 外側サイクルと内側サイクル

前回述べた外側サイクルについて、一つ補足しておこう。シュガーホールをめぐる評判の高さは、文化ホールや芸術創造をめぐる国の先進的施策で、シュガーホールが大型予算を何度も獲得していることにもあらわれている。いってみれば、日本全体のなかでも、先進的な文化ホール創造をしている地方ホールの一つとして、国レベルでも評価されているといえよう。

その外側サイクルのパフォーマンス性の高さは、当然、南城市内の内側サイクルに強い影響をもたらす。無論、内側サイクルも外側サイクルに強い影響をもたらす。

この外側と内側のからみ合いが重要な意味をもつ。たとえば、外側の音楽関係者が、シュガーホール内外の演奏で、南城の音楽に強い刺激を与える。逆に、外から来てシュガーホール内外の南城の音楽に触れた人が、外で新たな音楽行動に出る。あるいは、その刺激がきっかけとなって、南城のなかに入り込んでくる。

こうしたことを見方を変えていうと、シュガーホール内外の南城の音楽・文化は、沖縄全体・日本全体・アジア全体・世界全体の音楽を軸にした文化の渦・サイクルのなかで生きているということだ。

こうした外側サイクルをバックにして、二つ目の内側サイクルを、まずシュガーホールでの公演を例にして、考えてみよう。

公演 → 鑑賞体験（感動・リフレッシュ・癒し・エネルギーを得る） → 日常生活の活力・音楽生活の充実 → シュガーホール内外での企画への関心 → 公演やワークショップなどの企画参加

観客を例にしたが、このサイクルに演奏者などのサイクルが並行する。

公演 → 公演体験の振り返り → 日常練習 → 次の企画立案 → 公演練習 → 公演

このサイクルは、観客と演奏者の二通りがあるように書いたが、実は、時には演奏者、時には観客というからみがある。また、さらに、今回のシュガーオーケストラのように、中学生のオーケストラ・ワークショップ参加のようなかわり方がある。また、新人演奏会で活躍した人が出演者になるという例も多い。さらにまた、「玉露の妖精」のように、南城市民が、オーディションで演奏者になるという流れもある。

こうした流れに、音楽芸能及びそれに関わる多様な文化ジャンルがからんでくるのだが、それらは、音楽を軸にした文化的表現にかかわるものに限定されない。演奏者・観客の精神性・日常生活を豊かにする点にも注目したい。それには娯楽あるいは癒しといったことを含むかもしれない。

そして、日常生活から離陸して高い芸術的なものを感じる場である一方で、日常生活感覚で音楽文化を楽しむという面も結構多い。民謡やジャズのように、生活のなかで楽しむ音楽も結構あるだろうし、高度な芸術的なものと日常的なものとの中間といった感じのものも多い。

シュガーホールの特徴は、高度に芸術的なものと見なされがちなものを、観客の感覚にフィットするように、展開する所にもある。今回のシュガーオーケストラや組踊の公演はそうした色彩が濃厚だ。また、学校や公民館などへの各種の出前企画が、多様な展開をつなぐ橋わたし機能を果たしている点にも注目しておきたい。

3. 人間関係を育む 多様な文化の協同

前回述べた内側のサイクルは、市民間の人間関係を広げ深める機能を果たすことが並行している点に注目しておきたい。

たとえば、先日の「組踊」公演には、字（シマ）の高齢者たちと一緒に来られたグループを見かけた。また、出演者の家族・親戚・知人が多いのは、多くの公演に共通することだ。地元の出演者が多い時には、どんなジャンルであっても、そうしたことが多い。

演目そのものへの関心ではなく、出演者との人つながりで来場されるのは、地域に根差したホールの強みであり、消極的に見る必要はない。来場、鑑賞をきっかけに音楽・文化への関心・取り組みを引き出すきっかけになるととらえたい。こうした公演が、音楽を軸にする文化の裾野・輪を大きく広げるのだ。

また、自分が関心をもつジャンルごとに、文化のすみ分け状態にあることを打ち破って、異文化間に橋をかける役割もあるだろう。また、世代間に橋をかける効果が潜在しているだろう。さらに、これまでの字（シマ）単位を中心にしたつながりが、ここでの出会いをきっかけにして、さらに輪を広げるだろう。

シュガーホールで行われている三つの合唱団には、そうした面が多分にあるだろう。また、それらには、練習・公演などを通して、プロとアマの橋をかける役割も果たしているようだ。

シュガーホールが多彩に展開しているワークショップ企画など、市民参加型企画は、そうした裾野・輪を意図的に広げる役割を果たしている。

そうしたつながり・人間関係を作るきっかけになるような「カフェ」的な場、あるいは「下駄ばき」（沖縄ではシマゾーリか）感覚の場として、シュガーホールを活用してはどうか、という提案も聞こえる。そういう場で、ソロコンサート、さらには詩の朗読、読み聞かせなどをおこなってはどうか。そういう活動は、ホールだけをイメージするのではなく、ロビー、集会室、さらにはつきしろ広場なども活用できよう。そうしたものを



を各学校への出前コンサートのような感覚で開くのもよいだろう。またつきしろ広場でのエイサーなど、そういう感覚のものがあっていいだろう。さらに最近しばしば開かれる、駐車場でのフリーマーケットに、路上コンサート、大道芸的なものを加えるのもありそうだ。実際、そうしたものを目にしたことがある。

三つ目は、「多様な文化の協同を推進する」サイクルだ。

市民ミュージカル「太陽の門」に代表されるように、シュガーホールはこうした分野で、沖縄のみならず日本全体でも先駆的といえる創造活動を展開してきた。

それは、西洋音楽やジャズなど世界の音楽と、民俗的なもの古典的なものを相含めた、地元南城を中心とする沖縄の音楽芸能とを結びつけて展開する、きわめて創造的なものであった。さらにそれらは、地域の歴史と民俗、さらには神々とかかわりに象徴されるスピリチュアルなものを含んだ、まさに総合的な文化表現である。

特定の音楽ジャンルに限定されない多様な表現の協同が、文化表現として新たな世界を作ってきたのだ。

それは、シュガーホールにとどまらない南城の一つの大きな行事として位置するものになりつつある。行事、

その一つの集大成である祭りは、多様な生活感覚の文化に大きな橋をかけるものであるし、さらに、それは先祖と神と、現世の人々との間に、さらには未来の世代との間に橋をかける表現ともなっている。そうしたものとして位置づけられるシュガーホール企画がいくつもある。

未来の世代との間に橋をかけるということであると、マスメディア・学校・おけいごと、遊びなどを通して、音楽のなかに生きている子どもたちを、総合的で創造的なものとしての音楽・文化へと世界を広げていく点で有意義だ。

こうした取り組みは、その先の展望として、南城市外にある豊かな美術工芸文化と音楽芸能との提携協同へと開かれたものである。その一端は、すでに半島芸術祭 in 南城をシュガーホールでも行うなどの形で行われてきた。

子どもたちとのつながりということであると、学校での音楽授業・部活での音楽活動だけにとどまらず、保育園・幼稚園・学童保育での音楽・文化活動との連携協同も視野に入ってくるであろう。たとえば、シュガーホール敷地に隣接するシュガー児童館・風の子学童クラブなどとの連携があってもよいだろう。

さらに、近年、高齢者福祉の世界での音楽の活用が話題に頻繁になるが、そうした取り組みも視野に入っているだろう。

あえて広げると、尚巴志マラソンをはじめとするスポーツ行事が、シュガーホールでの音楽・文化行事と、どのようにつながっていくのかも興味深い話になることだろう。

こうしたことが、南城市の観光事業とも関わってくるだろうが、それについては後論しよう。

4. 音楽サイクル 南城おこしサイクル

四つ目は、音楽そのものの発展サイクルだ。

制作者・演奏者に即して言うと、「構想（作曲編曲選曲脚本書きなど）⇒練習⇒演奏⇒鑑賞者の批評の受けとめと再構想⇒練習⇒演奏」といったサイクルだ。もう一つ、鑑賞者のサイクル「公演情報入手・選択決断⇒鑑賞⇒感想・印象⇒次に向けての選択⇒公演情報入手・選択決断」がある。この二つのサイクルがシュガーホールでからみ合うのだ。このように、ホールでの演奏という場合には、自らが演奏・鑑賞するとは異なった、二つのサイクルのからみあいになる点に留意したい。

また、その演奏表現には、これまでの文化遺産の継承・再表現という色彩が濃厚な場合と、新たな表現の創造の色彩が濃厚な場合とがある。また、演奏者の場合には、プロ・アマによる差異があろう。

重要なことは、「貸館」的なありようでは、演奏者がプロで、観客はアマの聞き手ということに限定されがちだが、シュガーホールの場合は、演奏者と鑑賞者との距離が近く、両者の交流協力協同関係が強いことにある。演奏者と鑑賞者の二つのサイクルのからみあいが強いとあってよいだろう。

そうした要素が強いシュガーホール音楽であるが、いずれにしても、音楽そのものの質向上のサイクルを保障促進する点に、音楽専用ホールとしてのシュガーホールの大きな役割があることに注目したい。曲制作・曲演奏・曲鑑賞のいずれにおいても音楽固有の発展サイクルが推進されなくてはならない。町づくりと関わるからといって、音楽そのものの質をないがしろにするわけにはいかない。優れた音楽が優れた町づくり推進に関わるという姿勢を堅持したい。

そうした音楽それ自体の営みの質的发展が、音楽関心が低かった人がシュガーホール鑑賞をきっかけに音楽に

はまるといった音楽人口の増大、そして音楽鑑賞者愛好者の音楽水準の引き上げを後押しするような関係を築き上げたい。「南城市民の音楽水準は、ここ〇〇年間で相当なレベルに達した」と周りから語られるようなありようが、いつの日か実現することを目指したい。

五つ目は、南城おこしのなかでのシュガーホールというサイクルであり、「南城おこし各分野との連携の発展」サイクルと表現することもできるだろう。「南城市全体・各地域・各分野の取り組み ⇒ シュガーホールの取り組み ⇒ 南城市全体・各地域・各分野の取り組み」といったサイクルだけでなく、シュガーホールを含んだ協同の取り組み、あるいはシュガーホールの場での南城おこしの取り組み、といった形でも進行する。

別のいい方すると、南城全体の取り組みの渦（サイクル）、各地域の取り組みの渦（サイクル）、各分野の取り組みの渦（サイクル）、それらとシュガーホールが作り出す渦（サイクル）とが、からみ合って、大きな渦・多様な模様の渦を作りだし、南城内外を豊かなものにしていくのだ。

では、ここでは、シュガーホールが交流協同しあう多様な渦について並べてみよう。

- ・地域行事・民俗芸能 村芝居 エイサーなど
- ・音楽以外の文化諸分野 美術工芸 半島芸術祭 in 南城
- ・地域在の民謡研究所 ピアノ教室 合唱グループ
- ・スポーツ分野
- ・青年会 青年芸能祭やエイサー
- ・老人会 カラオケ大会
- ・学校 保育所 幼稚園 学童保育
- ・福祉施設
- ・商工会・観光関連 イベント フリーマーケット カラオケボックス
音楽関連産業 シュガーホール来館者＝南城訪問者にかかわる各種産業（市内宿泊飲食や産物購入）

5. 音楽・シュガーホールに焦点化した南城の文化発展への提案

これまで書いてきたことをもとに、提案を並べていこう。

いろいろなアイデアが浮かぶ段階で、それらがまだ十分には整理深化されてはいないので、順不同で並べることになる。これまでのシュガーホールで展開してきた活動・企画の継続を前提とするのはいうまでもない。

1. 南城市としての町づくりと結合した文化政策づくり。その重要な軸の一つとして音楽・シュガーホールが位置づく。

一般的に言って他の分野と比べると政治的性格が低く見なされ、また、直接的な費用対効果が低く評価されがちな音楽・文化では、行政的サポート予算的サポートが後回しになりがちである。対照的に、南城市では、シュガーホールおよびその音楽活動に対して、町づくり的視点を含みつつ、職員配置予算措置を含めて強力な対応がなされてきた。それは市町村合併以前から続く歴史的伝統であり、それを継承し、さらに発展させることが求められる。

2. 推進主体の形成

まず何よりも、シュガーホールオーケストラメンバーなどの演奏家、合唱団メンバー、そして、芸術アドバイザー、指揮者などの音楽専門家音楽者の確保拡大水準向上。

3. 南城市の音楽を含む文化政策を立案するだけでなく、その実現に向けて活動する働き手集団を形成発展させる。それは、音楽専門家、市職員、市内外のボランタリーな「文化を愛し、意気に燃える」人々などで構成される。

4. 3をさらに広げて、「音楽&町おこし」有志の確保と諸取り組みへの彼らの積極的関与の推進

音楽面と町おこしの両面での持続的な働き手を一定量以上組織することが不可欠である。それにふさわしい組織体制をこれまで以上に創出拡大維持していくことが必要となる。「シュガーホール友の会」メンバーがその重要な一角を占めるだろう。シュガーホール企画アイデア提案や実施をボランティア的に担うメンバーを、市内各地に何らかの形で組織して育てたい。

※ シュガーホール運営審議会が発展的改組することも視野に入れてもいいだろう。

5. 多様な研究会

- a. シュガーホールをめぐる研究会。あるいは、全国研究会をシュガーホールがかかわって開催
- b. 音楽創造に関わるワークショップ・研究会
- c. 町づくりと音楽・シュガーホールの研究会

シュガーホール創設以来の歴史は、たんなる「はこもの」提供ではなく、シュガーホールを主要場所とする音楽創造活動の展開と並行していた。それは『並みのもの』ではなく、日本全体のなかでも矚目される取り組みの連続的展開であった。そうした歴史的伝統を継続していくことが求められる。

6. シュガーホール・アネックス「あちこち（あちこーこー）のシュガーホール」の設置。大里市役所・大型スーパー、学校音楽室、児童館など

出前コンサートの継続発展 お手軽音楽会、音楽カフェなどがあちこちの「シュガーホール」で開かれてよいだろう。

7. 広報活動の活性化

- a. シュガーホールミニコミ紙の発行
- b. FMなんじょうにシュガーホール・コーナーを作る
- c. 「広報なんじょう」にシュガーホールコーナーをつくる

8. 協同の拡大深化

これまでのシュガーホールの取り組み企画は、多様な協同のなかで展開されてきたが、それをさらに新たな協同の拡大深化へと進めること。

地域の音楽芸能との協同

地域の諸文化との協同 とくに、美術工芸分野との協同 文化協会との協同

町づくりのなかで

小規模の地域単位での音楽ともかかわる町づくりの動向を育てる。

地域の諸産業が音楽・文化と響き合って発展するような戦略を作り上げ展開する。

観光客を含む市外からの来訪者と共に、より豊かな音楽・文化を構築できるような体制を、住民・産業関係者・行政とともに構築していくこと。

9. 諸組織・諸分野との協同

a. 福祉との連携 学童保育・保育園などとも

b. 学校教育との連携

c. 地域産業との提携

レコーディングの場としてシュガーホールを生かす提案も耳にする

フリーマーケット 音楽関連品があってもよいだろう

いつかは音楽通りが誕生することを夢見るのもいいだろう

いつかは、シュガーホール公演鑑賞ツアーで観光客がくるようになるのもいいだろう。

d. 青年会・老人会・女性会などとも提携 カラオケ大会 青年芸能祭典

10. こういった様々な取り組みの集約点として、次のようなイベント構想の企画

a. 尚巴志総合文化祭典、南城市音楽祭り

欧米に著しいが、アジアでも日本でも、自然遺産歴史遺産を現代文化創造のなかに位置づけて、町おこしをする事例があるが、南城に豊かにある自然遺産歴史遺産とかかわる音楽企画が登場させることも視野に入れたい。

b. 新人演奏会と並んで、南城音楽（大）賞の創設

11. シュガーホール音楽塾・音楽学校の開催

12. 企画の公募 1企画20～50万円予算での募集

13. 2013年度からの5ケ年を、多様なことへのチャレンジとして捉える

2008～2012年

2012年8～9月

**中村透「愛される音楽ホールのつくりかた 沖縄シュガーホールとコミュニティ」
を読む****1. 中村透さんとシュガーホール**

著者から贈呈された、中村透「愛される音楽ホールのつくりかた 沖縄シュガーホールとコミュニティ」(水曜社2012年)を読む。

数年前に出された博士論文をベースに、いくつかの論を加え、全体を加筆して作成された本である。専門書ではあるが、音楽に関心ある人、シュガーホールに関心のある人などには親しみやすい本だ。さらには、音楽と他ジャンルとの関係、音楽とコミュニティとの関係、文化行政、ホール行政に関心のある人たちにとって、興味深い論が、事例をもとにどんどん進行していくので、是非とも読んでいただきたい本だ。

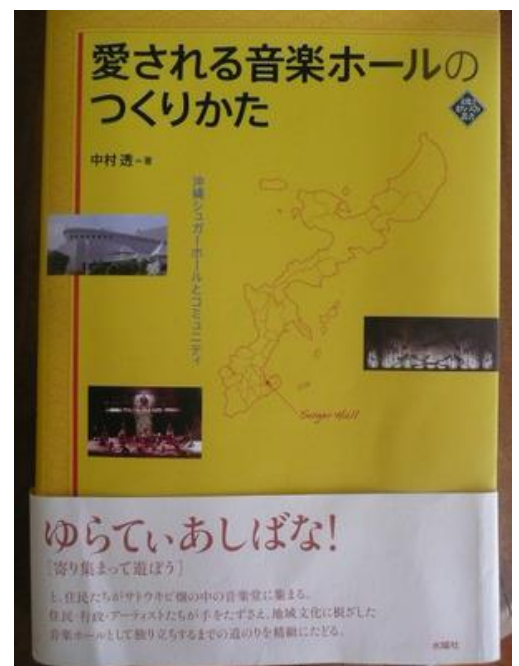
私は全くの音楽素人どころか、音楽に縁遠い人間だが、琉球大学での同僚としての彼との出会いの中で、本書が言う、異質なものが協働していくことを進め、そのなかで、興味深い世界に発見創造させていただいた。

そのあたりは、たとえば、中村さんに登場していただいた浅野誠編沖縄生活指導研究会著「行事・文化活動と集団づくり」(明治図書1980年)に出てくる。また、奇しくも、同じ出版社となった、浅野誠「大学教師奮戦期」(日本科学者会議期問題委員会・原正敏・浅野誠編『大学における教育実践』第三巻「実践的大学教育論」水曜社1983年)にも、彼と私の協働実践が登場してくる。

それ以降の付き合いだが、途中、私が10数年間、愛知在住となり、協働の機会はなくなった。しかし、私が来沖のたびに、彼は、シュガーホールを中心にした展開の場面につきあわせてくれた。とくに、本書にも出てくる「町民ミュージカル《ぐわんぐわんタンメーチャーがんじゅう》」(1996年)は、シュガーホールの「伝統」になりつつある町民・市民ミュージカルの初回だが、その際も観劇させていただいた。そして、その取り組みを、その年沖縄で開いた日本生活指導学会の分科会でも取り上げ、私はコメンテーターをつとめた。

この一連の取り組みについては、本書を見ていただきたいが、当時、感動した私は、この取り組みを全国に知らせるために、出版計画をつくったが、出版不況のあおりを受けて実現しなかった。

そして、2004年に私が沖縄に戻って以降、時々お会いしたが、ほとんどがシュガーホールのステージがらみだった。そして、2009年以降、シュガーホール運営審議会で同席してきた。



本書にかかわっては、こんな私の個人的な歴史があるのだが、本書には、個人的な歴史を遥かに超絶する壮大な歴史が織り込まれている。その歴史記述は、シュガーホールがある佐敷というコミュニティの歴史から始まる。

そして、そこで生まれたシュガーホールが、「ソフト面では佐敷の各集落が継承してきたコミュニティ文化を想定しつつ、ハード面ではクラシックを中心とした『音楽ホール』という専用施設の建設に舵を切ったのである。」P58といったことに至る歴史経過も詳細に、かつ分析的に描かれている。

2. 西洋音楽と伝統音楽をつなぐ「再創主義」的挑戦

シュガーホールは、西洋音楽の蓄積が多くない地域で、西洋音楽向けの専用ホールを創設するという大胆な構想から始まった。だから、それは地域の蓄積として分厚く存在する沖縄伝統音楽と西洋音楽とをつなぐという大胆な課題をも突き付ける。

その課題をリーダーとして、あるいはコーディネイターとして、あるいは創造者として、あるいは実演者としての役割を、先頭を切って担ったのは、芸術監督に就任した中村さんだった。それは地域内外にある潜在的願い、そして潜在的可能性を具体物にする役割をになうものでもあった。

そして、実際、スタート直後には、次のような計画が設定され、推進されていく。

「文化事業を4つのカテゴリーに分類し、そのなかに具体的プログラムを位置づけて中期計画で実施することにした。そのカテゴリーは、「新しい知と技の発見（生涯学習文化事業）」、「地域市民とホールを結ぶネットワークづくり」、「鑑賞型事業は創るもの」「地域資源としての人材開発を」である。」P91-2

それらの実際展開について次のように書かれている。

「シュガーホールが開館2年目以降に軌道修正して行った継続的な音楽事業は、各種コンサートの実施や音楽の人材開発に加えて、町の人々の多様な音楽行動を仲立ちとした音楽芸術の創造へと歩むことになった。

生涯学習文化事業、コミュニティ・ネットワーク事業、自主創造・鑑賞型事業、地域資源としての人材開発は、それぞれが網の目のように関係し合いながら、地域の人々と音楽との関係に、新しい視界を筆者及びホールスタッフにもたらしたのである。

一方で、地域の文化に根ざしながら、多様な音楽芸術をどのように人々にとって価値あるものとするのか、またそのことをどのような概念でとらえるべきかという課題も生じたのである。」P118~9

それらは、多くの地方ホールが陥る貸し館ホール化ではない道を創造するものでもあった。本書は、そうした創造作業を、具体的事例に基づいて詳細に語る本でもある。何回も行われ、さらに南城市市民文化センターになって以降も追求される、町民（市民）ミュージカルとか、「みっちゃい」コンサートなどが典型的なものだ。

それは、たんに音楽鑑賞の場という域を越えて、創造の場としてのシュガーホールを意味するものであった。

だから、「地域社会に持続的に音楽文化を織りなしていく「工房としての機能」がホールに構築されなければならないと考える。このことが実現できる条件は、まさしく今、地方の公共ホールにしかないからである。」P26

3と述べるのだ。

その際、音楽理論家でもある中村さんは、多様な理論を学び吸収し創造する。
たとえば、次のように、である。

「山田（奨治）は、日本の美術・文学等の表現における模倣（コピー）文化の歴史的な文脈から、芸術における「独創性（オリジナリティ）の神話」（山田 2002：序）に疑義を呈し、“再創”の概念を打ち出した。「誰もが快適に感じる表現は、人類共通の有限な資産として、この世にすでにある表現のなかに鑿められている」のであり、「古典への回帰と異文化の取り込みが、芸術表現の革新の常套手段である」ことは、芸術における再創を裏付けているとした。さらに「ひとの創作をもとに楽しみながら何かを加えてゆく」ことを再創主義とし、「コミュニティで情報を共有し、先人のまねをして、共に栄える」「先達のまねをすることで、技、心、リテラシーを獲得することができる。そして自己以外のものを排斥するのではなく、コミュニティでの共栄をはかる」という再創主義を薦めているのである。」P 249～250

このあたりの論は、私もおおいに共感するものだ。

このように紹介してきたからといっても、シュガーホールが音楽専用ホールとしての性格を弱めている、といたいのではない。最近では、シュガーホールは、音楽関係者の中で、全国的に、さらには海外にも名声が広まっているが、それには、中村さんのアイデアと推進力がおおいに働いた新人演奏会がある。それについて、本書では、次のように書かれている。

「県内音楽家・団体のフランチャイズ化事業」を構想し、リサーチを行ったが、シュガーホールの上記理念に賛同者を発見することは困難であった。また、能力・資質に可能性があっても、公共ホールとの財政的・日程的な課題を交渉するマネジメント能力が演奏家の側に不在で停滞したケースもあった。

そこで筆者は、沖縄在住・出身の音楽学生の動向と、県内で行われていた音楽コンクールの実態を調査したのちに、若い音楽家の発掘と養成を目的とした「新人演奏会オーディション」企画を立ち上げた。」P 117

また、事業展開のなかで、伝統音楽と西洋音楽との創造的関係が構築されていく。それについて、本書は次のように述べる。

「伝統音楽と西洋音楽の二つの領域は、一見大人を中心とした地域の生活空間を場とする音楽＝伝統的音楽、子ども中心の学校を場とする音楽＝西洋音楽と二分されているように見えるが、実際はそのように単純な関係にはない。小・中学生が集落芸能の演者として起用されることもあり、その際には伝統的音楽の学習を行うことになる。また、戦後は運動会や学芸会等の学校行事で、エイサーや琉球舞踊といった伝統芸能を演目としてとりあげることが多く、指導できる教師がない場合地域の芸達者の大人の指導を仰ぐこともある。（中略）

一方、地域の大人も、かつては学校で西洋音楽を学び、また親となつてからは地域開放型の学校行事で子や孫の洋楽系の合唱や合奏を鑑賞した経験をもつ。さらに学校音楽コンクールでは、保護者が物心両面から活動に関わり、支援してきた関係にもある。（中略）

一般に沖縄では、音楽様式の差異がコミュニティの人々の受容層を分断することはあまりない。むしろ血縁、地縁等の人的繋がりによって、送受信の場が緩やかに共有されることが多い。そういう意味では、伝統音楽も洋

楽もともにパフォーマンス系の表現行為として共有しあう関係にあるといえる。このことは、かつて農村舞台と宮廷舞台とを往還した沖縄芸能が、「演じられる場と状況によって、内容と演じ方が変化する」柔軟性にも関係しているといえる。同時にこのことは、(中略) 世代を超えた町民が多様な音楽の様式を統合した舞台芸術へ参加する潜在力ともなったのである。」P 49～50

こうした営みを支える背景として、次の指摘にも注目したい。

「年中行事の脈絡からはずれたことで、神への奉納芸＝神アシビ(遊び)としてあったものが、アシビそのものへと転じる契機となったことは確かである。いわば、19世紀型の村踊りが「農村舞台と宮廷舞台を往還しながら、芸能を変貌させつづけた」(大城2003:78-80)ことに近い現象が生じたのであろう。」P 45

かくして、沖縄の音楽界、とくに西洋音楽と伝統音楽との関係において、新たな創造的展開が生まれてくる。今では、両者の協働はごく普通のことであるし、また学校音楽が両者に関わる営みを広く行うようになった点も注目される。20年前とは、大違いの状態になったのである。かくして、シュガーホール、そして中村透は、沖縄音楽界の、注目すべき問題提起・問題発信の機能を担ってきたのだった。

3. 異質協働創造のシュガーホール音楽・中村透音楽

シュガーホールにおける音楽活動の展開、そしてそれを長く主導してきた中村透音楽の特質を一つのキーワードでいうとしたら、異質協働(協同)であろう。

それは、多様な音楽ジャンル、プロとアマ(芸術家と市民)、地域性など様々な違いを問わず、と言うよりも、違いを積極的に生かしていく取り組みである。また、たんに違いを持ちより合わせるといったことにとどまらず、違いを持つものが協同創造することによって、それまで各々が持っていたものとも異なる新たなものを創造するということに特質がある。

こうした違いによるトラブル・対立敵対の発生といったことは、極めて日常的に存在するだけでなく、不幸を増幅させることさえ、しばしばである。沖縄が深くかかわらせられ、史上まれなほどの不幸を住民にもちこんだ戦争も、違いを同化によって処理しようとするなど、違いへの誤った対処、あるいは違いを意図的に拡幅させようとする動向の中で生まれてきた。その意味では、異質協働創造は平和の論理に貫かれている。

こうした異質協働がシュガーホールの取り組みで典型的に表現されたのは、ミュージカルだ。

こうしたことにかかわって、本書には随所に珠玉のような叙述が見られる。いくつかを紹介しよう。

「これらに対立的な文化としてとらえるのではなく、「芸術家の、近代的で個人的な知・技量に支えられた高度能力」、「伝統芸能の共同体の結束を促すコミュニティ機能」として双方に価値を認める。さらに、若者が志向する音楽も“実演文化”“身体文化”という脈絡に位置づけて捉え、これら多様な音楽文化が相互に行き交えるものとして再編成する。そのために、各々の領域の芸術家と市民とが協働する方法を、地方のホールでは探求してゆく必要があると考える。

本節ではその一例として、シュガーホールが行った市民参加ミュージカルにおける市民と芸術家との協働を分

析的にとりあげる。」P148

「双方向型事業の実施、地域社会儀礼への音楽参加、芸術家との協働による舞台芸術創造等の経験は、シュガーホールに直接・間接的に参加する市民にまったく新しい音楽経験をもたらしたことになる。その結果、第1に音楽ホールという既成概念を変化させ、演ずる「場」の文化変容をひきおこしたこと、第2に、ミュージカルに参加した市民音楽が新たなコンテクストで変わったこと、第3に、そこから地域コミュニティの音楽文化環境を多元化的に捉える必要が生じたことである。」P153

「シュガーホールでのミュージカルでは、

- 1) ある市民の生活史からもたらされた異文化の音楽が劇中歌として用いられたとき
 - 2) 伝統音楽の様式による即興音楽が、洋楽系の感覚をもつ出演者にもたらされたとき
 - 3) ホップ系のオリジナル曲が、演劇的要求に応えるために変更を求められたとき
 - 4) 和太鼓のパフォーマンスが洋楽器とのアンサンブルとの共演を必要としたとき
- に、さまざまな文化触変が生じた。」P161

「以上のように、異なる音楽様式や言語・身体性を持つ人々が接触する際には、人々の生活記憶、自己文化としてある音楽スタイル、伝達の方法、演奏動作に関わる身体性、用いる感覚系等の多様な文化が交錯し、その異文化接触の合間に新たな音楽創造が立ち上ってくることを意味する。異文化の出会いから異文化を超えた協働の努力が生じてくるのである。異なった文化に属する人々が、音楽創造を行うことによって、外部刺激としての、あるいは内発的要因から動的な文化触変を生じさせる例である。」P167

「沖縄民俗芸能の底流には、時代の文化様式や異文化接触に柔軟に反応する資質が濃厚にあるだけでなく、芸術・芸能を正典化しない性格が民族性の基層にあることの表明でもあろう。沖縄に限らず、独自の文化をもつ日本の地域社会でも、こうした視点からの音楽ホールにおける動態創造は充分可能なはずである。

「われわれの知性に身体性の領域を回復することは今日的な課題であるが、必要なのは個々の感覚をとぎすますことではなく、身体経験の共同化（均一化ではない）をはかることであろう。それによってのみ、言語や視覚的形象によって支配されているわれわれの意味の世界が、より豊かなものになることが期待できるのである」とする野村の指摘は、今日の社会状況にあって一層重要な意味を持つと考えるのである」P173

私自身の話だが、1980年代末から「異質協働」をキーワードにして多くの仕事をしてきた。主として人間関係や教育の場で展開したのだが、それが今日にまで至っている。私がかかわるワークショップなどもそうである。

その原型的ヒントの一つは、1970年代末に、中村さんに導かれて出会った音楽、とくに民族音楽の世界における異質協働的なものがあったことを書き加えておきたい。

以上は、音楽レベルでの異質協働の話だが、それは音楽レベルを越えた異質協働にもつながって行く。

4. 音楽ジャンルをも越えた異質協働型文化創造へ

本書が述べるのは、音楽文化に限らない。音楽に近いところにある演劇や舞踊表現などは、すでに協働の実績がある。一連の叙述は、さらに陶芸・景観をはじめとして、佐敷・南城にある多様な文化ジャンルにかかわる人々の文化協働創造活動への示唆を多分に含んでいる。さらに、佐敷・南城の自然と生活、そして歴史（過去の歴史だけでなく未来の歴史も含めて）文化をも視野に置きうるかもしれない。また、人々の生活を支える産業のありようにまでかかわらないとはいえない。生活芸術と言う表現が多用された歴史があるが、南城における陶芸・織染等、さらにそれにかかわる観光などの第三次産業はそうした要素を多分に含んでいる。

となると、南城ですでに実施され一定の蓄積が生まれている「半島芸術祭 in 南城」、あるいはオープンガーデンなどとのつながりが視野にも入ってくるだろう。そうしたことのなかで、シュガーホール、そして音楽における異質協働体験の蓄積が強みとなって生きてくるだろう。

そうしたことにかかわって、本書には、次のように示唆的な記述がある。

「コミュニティアートは一般の人々の生活から遊離したアートを生活の中に持ち込み、普段はアートと縁のない一般の人々にアートのおもしろさや素晴らしさを知ってもらうことを目的とした活動である。芸術家は個人の制作・創作活動ではなく「一般の人々と一緒に、あるいは彼らを指導する形でコミュニティ（地域）の中で行うアート活動」、社会貢献として、英国を主とした海外の事例が報告されている。欧米では、多くの場合演劇、舞踊、美術の領域でのコミュニティアートが活発である。そして、社会貢献という意味合いの背後には、コミュニティアートが、芸術・芸術家を媒介にして地域の「一人一人すべての人が社会の参加者であることを目覚めさせてくれる活動」を狙いとし、欧米の都市社会における多文化・多言語、あるいは貧困という社会格差問題解決の脈絡にあることをも示している。日本の地方社会にこうした状況を想定することは現実的ではないが、音楽芸術と人間の関係からみた場合、欧米のコミュニティアートは示唆に富むところが少なくない。地方での芸術環境をみたとき、そのありよういくつかの問題が浮上するからである。

第一は、高度な身体技能として芸術家の身体に収斂された芸術に、直接触れる機会が圧倒的に少ないということである。多くの場合、マスメディアやコピー製品（CDやDVD等）による第二次口頭性の、間接化された情報としてしか音楽体験の機会を持たないのである。市場化された音楽産業の消費者としての一方的な位置に追いやられているともいえる。

第二は、世代や職業による音楽受容の領域断絶、あるいは音楽様式の多元性である。とくに農村型の社会では、今も伝統的な民俗芸能や音楽が重要な行事の一環として継承される一方、若者はロック系のポップ・ミュージックやビートミュージックに自己投入し、学校音楽の場では吹奏楽・合唱といったクラシック音楽に熱中している現実がある。こうした音楽の多元文化現象のなかで、地方のクラシック音楽家は、ごく身内のネットワークに依拠して細々と音楽活動を行っているのが現実である。いずれもそれぞれの個別的組織のなかに埋没し、互いに交流しあうことは稀である。」 P 146-7

南城を歩けば、自然が作り出す景観の美しさだけでなく、生活文化が作り出す景観の美しさも語られるようなありようを作りだそうと言う動きが少しずつ生まれてきそうな予感がする。シュガーホールの建物・空間はその先行的一環であろう。

そうした文化の協働創造は、経済的効率主義とは異質な歴史的創造作業だろう。その点でも、注目すべき叙述

が見られる。

「ホールで行われる生の音楽演奏や舞台芸術は、本番公演に至る過程で、多くの人の知的・身体的な協働作業を経て、次第にその姿を明らかにするものである。今日の効率中心主義の経済原理に立てば、その生産性の低さは明瞭で、ますますそのコストは現代の産業生産コストに逆行する。

だが、大量生産、コピー型生産物中心の消費型経済のまっただ中であって、ミュージッキングという言葉に象徴される音楽行動は、スローフードのような手作りの価値を再発見し、等身大の音楽創造活動を基盤に置きながら、自己の、あるいは自己と他者との関係系で何かを創りだしていくとなみでもある。」 P 234-5

「公立ホールにありがちな数値評価による外形的な基準にのみ価値を置くのではなく、音楽に参加する人々の内部におきた芸術経験そのものを評価する眼差しがシュガーホールにはあったということになる。このことは、地域性を問わず「音楽芸術を創造する」音楽ホールが、音楽家を芸術監督・芸術アドバイザーとして招き入れる際のひとつの指針となろう。」 P 260

財政状況が厳しい折、全国的に文化への支出削減をすすめる自治体が増えている。20～30年前に、「ハコモノ」ホールをつくった自治体のホールが、実質的に貸し館ホールとなり、地域の文化発展に寄与すると言うよりも、文化の個人消費に寄与する色彩を強めている、そうしたなかで、シュガーホールは、文化創造活動の展開と蓄積と言う意味で、特色ある地位を獲得してきた。それを今後いかに発展させ蓄積していくことができるだろうか。

その際、協働創造の担い手には、地域住民（市民）を軸にしつつも、南城市に來訪する那覇などの隣接市町村住民、さらには観光客を含む超多数の県外海外からの來訪者、これらの協働を組織していくことが求められる。

その点では、協働をコーディネートする人・組織が決定的に重要になる。その点でも、音楽部門で、先駆的コーディネイター事例を自ら提出した中村さんの活動展開から学ぶ点は多い。彼は本書で次のように書く。

「地方の音楽ホール・演劇ホールには、市民と芸術家とを専門的な見地から結び、コーディネートする人材が必要となる。そのための芸術監督、あるいは専門スタッフを置くべきであろう。」 P 168

「市民参加の音楽創造は、双方向、というより多面的な関係で交差しつづける行動の動的集積なのである。したがってオペラのように、マエストロが君臨して音楽像を自分の占有するイメージに一方向的に連れ行く、というわけにはゆかない。直線的に「作品の完成」をめざすやり方が、市民協働では必ずしも成功しないことのひとつの理由である。演劇用語でいう「予定調和」そのものが成り立たないし、型入り系の「段取り」のはかれないことが圧倒的に多いからだ。こうした場面での芸術監督（筆者）の仕事は、「作品」を創ることではなく、市民の創造行為をコーディネートしながら、徐々に高度化を促す演出家のような立場が理想的である。

「今」「ここで」「ともに」の身体協働の場を、地域の音楽工房として音楽ホールに設定することで、これらのことが可能となる。」 P 169

こうして、本書が示すようなシュガーホールで展開は、佐敷をこえて、南城として、さらには沖縄としての展開への問題提起となっている。さらに、先に述べたような多様な協働文化創造への手がかりを与えている。それは、先にものべたような「半島芸術祭 in 南城」だけでなく、「青年芸能祭り」、「南城祭り」などの動きとも響き合

う関係になっていくだろう。

さらにいうと、「型入り系」が主流を占める音楽そのものをひっくり返して、創造としての音楽を作り出す流れをより大きくしていくだろう。

こうした考えてくると、南城における文教学術の展開、スポーツの展開、産業の展開などとも刺激し合う関係を視野に入れていく必要が出てくるだろう。

少々「おおげさな視野」になりすぎたかもしれない。だが、そうしたモチベーションを与える本書であることは確かだろう。

2012年4～6月

松村洋「唄に聴く沖縄」(白水社2002年)を読む

1. はじめに

書店で見つけた本だ。10年前に刊行された本だが、私には新鮮で深みのある記述に満ちた本なので、10回ほどの連載になりそうだ。

この本の特質は、沖縄の唄・音楽を沖縄社会のなかに位置づけて性格・特質を明らかにし、唄・音楽そのものの変化も読み取っていくことにある。そうした視点は、私にとって大変親しみやすいものだ。

たとえば、次のような記述がある。

「ウチナーヤマトグチは、外から入ってきた共通語が、方言の発想や言語感覚によってねじ曲げられてしまったものである。それは、思いのほか根強く、そう簡単に消滅しない沖縄文化の力を示している。音楽にも同じようなことが言える。新しく作られる沖縄の唄は、外から入ってきた音楽をとり入れ、何十年か前の唄とはスタイルもタッチもずいぶん違ったものになっている。しかし、それでもやっぱり沖縄らしさをはっきりと表現した唄が、たくさん作られている。

伝統というのは、はるか昔から変わらずに受け継がれてきたものではない。伝統は、時代とともに変化しながら受け継がれてきたものである。それが、沖縄の唄を論じたこの本の基本となる考え方である。では、沖縄の唄は、なぜ、どのように変化してきたのか。

唄には、人びとの感じ方や考え方、暮らし方が刻印されている。人びとの感じ方、考え方、暮らし方が変われば、唄も変わる。社会が変われば、唄も変わる。だから、沖縄の唄の変遷を探ろうとすれば、沖縄の人たちの暮らしや意識の変化、沖縄社会の変化について考えなければならない。この本では、沖縄の唄と、ウチナーンチュの暮らし、意識、沖縄社会のあり方をできるだけ切り離さず、それらに関連づけて語ることを心がけたつもりである。」P15

ここでの「伝統は、時代とともに変化しながら受け継がれてきたもの」という指摘は、私が長年言い続けてきたことと一致する。さらに言えば、伝統は、今生きる人々が、これまでの伝統をもとに、新たに創造するものな

のだ。伝統は、歴史上のものを原型そのままに復元・保持・継承するのとは異なるのだ。

2. カチャーシー 共同性と個別性の絶妙のバランス

カチャーシーについての次のような分析は興味深い。

「共同飲食によって、人びとの絆が強化される。そうした宴席の最後に置かれているのが、カチャーシーや「六調」である。そこでは、一座の人びとが、交互に立ち上がり、中央に進み出て自由に踊る。「私」の喜びや願いは、その場集った「みんな」の喜びであり願いである。そのようにして、念を押すように、人びとの絆が再確認される。だが、同時に、カチャーシーや「六調」は、身振りを揃えて踊る集団舞踊ではなく、個々人のフリー・ダンスであるという点が重要である。すなわち、ここでは、個人の個別性もまた浮かびあがってくる。」P40

ここまでは、私も知っており体験しているが、次からの指摘が私には新鮮だ。

「宴席の最後に踊られる「六調」について、奄美音楽文化の研究者・酒井正子は「何かの目的に向かって統合・構造化された集団の意識が、散会する前にほぐされ、多様な個に戻ってゆく転換点として、六調は重要な儀礼的役割を果たしている」と指摘している。

カチャーシーについても同じことが言える。宴では、絆が強化され、共同性が確認されるが、宴が終わると人びとはそれぞれの生活に戻っていく。宴の終わりを「お開き」と言う。ぎゅっと絞められていた輪が緩められ、開かれるわけである。そのような「共同性」から「個別性」への転換点に、カチャーシーや「六調」は置かれている。」P40～41

そうなのか、と思うと同時に、私の周辺での実際はそうなのか、と振り返る。いろいろなタイプの人がいる。それに関わって、次の座談会の発言がおもしろい。

「だが、そこで浮かびあがってくるのは、あくまでも共同性のなかの個別性であり、人びとの絆が断ち切られることはない。大工哲弘と照屋林賢は、ある座談会で、カチャーシーの踊りについて、次のように述べている。照屋——カチャーシー踊るときにも、誰かに手を引っ張られると踊り出す。だから、誰かが誘ってくれないかな、という気持ちもどこかにある。でも、自分から率先して立ち上がるというのは・・・。

大工——それで、またみんなが踊り終わったときに、目立とうとして踊るのがいる。人に見せようと思って、チャーガチャーガ（どうだ、どうだ）って踊るのがいるさ。オレはこんなに踊れるぞ、みたいな。そういった人が嫌われるわけさ。そういう人のためには、三線弾きたくないんだよ。

照屋——三線弾チャー（三線の弾き手）も早く終わらせたいんだけど、しょうがなく弾いているんですね。

大工——逆に、控え目に、何となしに自分に向かって踊っているカチャーシーなんか、なんてもう素敵でしょうかとと思うけど、そういうものが光るわけよ。沖縄の精神文化には、そういうところがあるんだね。」P41～42

私の周りにも、「目立とう」とする人、「控え目」な人に加えて、人を引っ張りだそうとする人、さらには絶対

に出ていかない人といういろいろだ。ここでは、「何となしに自分に向かって踊っている」人が肯定的に語られているが、私にはそう言う人は気になる。カチャーシーは、いつもでないとしても時々、誰かの目を見て踊り合うという「対人性」の面があると思う。それを本書の次の記述のように「共同性」と言っていいかもかもしれない。

「個人の喜びの表現は、個性的であっていい。だが、個人の喜びは、他の人びとの喜びを邪魔するものであってはならない。周囲を無視したエゴの突出は、共同体内でマイナスの評価を受ける。逆に、人びとの絆のなかで、控えめに自分の喜びを表現する人は、プラスの評価を受ける。プラスの評価を受けること自体が、また喜びでもある。

カチャーシーや「六調」の踊りは、人びとの共同性と個別性が絶妙のバランスで調和したとき最高潮となる。それは、人びとがそれぞれに異なる自分自身の人生を生きつつ、共同体として生きていくことを学習する場であるとも言える。」P 42

「共同性と個別性が絶妙のバランスで調和したとき最高潮」という表現は、鋭い。これらに加えるとしたら、個別性は、先にも述べた「対人性」と結びついているし、それらが即興性、対人的な創造性と結びついている点にも、私は興味を持つ。

3. 近世宮廷音楽と踊・宴

近世宮廷音楽は、ヤマト・薩摩との緊張関係のなかで展開した。そのことが独自の発展を促したという次の叙述は興味深い。

「薩摩の役人を歓待するとき、琉球人はヤマトの楽曲をそのまま演奏することもあったのではないと思われる。だが、薩摩の役人たちは、自分たちに親しみやすいスタイルで、しかもそこに琉球風味が混入しているような楽曲の方を、むしろ好んだのではないか。そういう唄の方がエキゾチックにきこえて面白いし、自分たちと琉球人は違うのだということを耳で確認できる。

(中略) 首里王府の側にも、琉球が完全にヤマト化するのを拒否する意識、支配者の文化に完全に同化することを拒否する意識があった。大陸との朝貢冊封関係は、明人や清人に対して、自分たちは琉球人であるという自己意識の形成をある程度促しただろう。だが、琉球と大陸の関係に比べると、琉球とヤマトの関係は、ずっと鋭い対立を孕んだものだった。ここは琉球であり、自分たちは琉球人であるという宮廷人たちの意識は、ヤマトと対峙することによってこそ明確になったと思われる。そのこともまた、琉球独自の芸能を発展させた一因だっただろう。

首里王府の楽人たちは、多くの時間とエネルギーとアイデアを投じて、きわめて洗練された芸能を発展させた。彼らは、外部の要素を取り込む器の大きさ、外部からの影響にも揺らがない強固な琉球アイデンティティ、大胆な折衷様式を発展させることができる確かな技術としなやかなセンスを備えていた。才能ある人たちが集められたはずだ。しかし、彼らの才能を開花させた状況の力も無視できない。大陸とヤマトへの両属、朝貢貿易の維持、ヤマトとの緊張関係といった歴史的、政治的、社会的状況こそが、重要な外交上の責務を担うことになった楽人たちを、そこまで鍛え上げたのである。」P 73～4

上の紹介に続く論の中で、音楽と踊・宴との関係についての次の叙述も、音楽の特質と歴史的变化を考えるうえで、大変示唆的だ。

「ここでひとつ注意しておくべきなのは、こうした宮廷音楽に踊りがついていたということである。冊封使歓待のため宴の演出にあたったのは「踊奉行」だった。宴席につらなれた者たちは、酒を飲み、珍味に舌鼓を打ち、会話を楽しみ、唄と踊り、芝居の要素を加味した組踊などで耳目の愉楽を味わい、その場の雰囲気全体を楽しんだ。元来、芸能というのは、そのように集団的、総合的、全体的な楽しみであった。

しかし、現代の私たちは、そうした総合的な場から音という要素だけを切りとって耳を傾け、それらの音を「音楽」と呼んでいる。これは、西洋近代的な音楽観である。自分の部屋で、CDなどをかけ、ひとりで目をつぶって、じっと音に意識を集中して聴く、というのがもっとも極端な姿だが、私たちは、もっぱら聴覚にうったえる表現を「音楽」と呼び、音楽は聴くものだと思っている。そこから、舞踊や演技などの要素を介在させず、ただ音だけで聴く者を揺さぶる音楽こそ、もっとも優れているという観念も生まれる。(中略)

だが、歴史を遡ってみれば、ひとりでじっと音に耳を傾けるというのが、じつに特殊な態度であることがわかる。音による表現は、それが置かれた場のなかに埋め込まれ、音以外のさまざまな事柄と不可分だった。古来、人びとはお互いの絆を確かめ合い、それを強化するために、ともに飲みかつ食べたが、共同飲食と同様に、音もまた、ともに楽しむことによって人びとの絆を強化するものだった。また、楽しむためには、音だけでなく、踊りも芝居も、酒も食物もおしゃべりも、すべて動員された。それが、芸能本来の姿だった。そのような場で、音は音以外の要素と無関係ではありえなかった。」P 74～5

かなり以前になるが、大学での授業・行事や、小中学校の生活指導教師たちとの研究会の場などで、集団的な文化創造を実践的に追求した時期、私が主張し実践したものは、音楽・踊・演技などを含んだ総合的なものだった。時には、結婚式披露宴の演出進行でも、こうしたことを追求した。

一連の叙述は、それらのときのことを思い起こさせてくれた。

4. 琉球古典音楽と沖縄民謡 毛遊びと村芝居・村々の芸能

本書は、琉球古典音楽と沖縄民謡の違いと関係について、社会的歴史的背景をもとにわかりやすく次のように述べる。

「明治の琉球王国滅亡とともに、首里王府の唄三線を支えてきた土台は崩壊した。公務としての宴は消滅した。演奏の場を失い、職を失った官僚演奏家たちの一部は、一般庶民に唄三線を教授したり、芝居小屋に出演したりして、糊口をしのいだ。王国時代に庶民は目にする機会がなかった本物の宮廷芸能は、当初、珍しがられて評判になった。しかし、あの超スロー・テンポとあまりにも洗練された表現は、民衆の生活感覚に合わなかった。そこで、もっとテンポが早く、ノリの良い曲と踊りが考案された。それらの踊りは「雑踊り」と呼ばれた。」P 76

「沖縄では現在、多くの人たちが琉球古典音楽を学習し、うたい演奏している。特定の場所、機会、人間たち

に限定されていた芸能から、音表現だけが切り離され、音のみによる表現＝「音楽」として認知され、広まった。換言すれば、首里王府の芸能のなかにあった音が、まさに音楽になったのである。」 P 77

「一般に、立派で価値ある伝統文化だという意識が強くなりすぎると、その型を安易に崩してはいけないという考え方が支配的になり、絶えず変形生成していく生きた文化の生命力を阻害する傾向がある。」 P 78

「琉球古典音楽に対して、民間でうたわれる唄は「民謡」と呼ばれている。現在、沖縄では、昔からうたい継がれてきた伝承歌謡だけでなく、それらの音楽性をふまえてあらたに作られた作品も「新作民謡」と呼んでいる。要するに、沖縄民謡は沖縄の「民の謡」、宮廷芸能ではなく沖縄の民衆がうたう唄のことだと、広く考えておけばよいだろう。」 P 81

「首里王府でうたわれた唄のなかには、民間の唄を採ってアレンジしたものが少なくない。プロの手で磨き上げられたのだから、技巧的には凝っているが、土台となった音楽性は同じである。宮廷芸能の華麗な花は、民衆の唄という豊かな土壌から養分を補給していたのである。そうしたつながりがあったからこそ、逆に、現代では多くの人びとが琉球古典に親しんでいる。同じ宮廷芸能でも、基本的に大陸の曲をコピーし、孤立した禁裏でそれを継承してきたヤマトの雅楽とは、そこが大きく異なる。

首里王府の芸能と民謡の技巧やタッチの違いによる味わいの差異は、唄の社会的背景や役割の違い、あるいは士族官僚層と民衆それぞれの生活感覚に根ざした好みの違いを反映しているにすぎない。」 P 83

琉球古典音楽と沖縄民謡とのつながり・交流の指摘は重要だ。音楽芸能についての身分差をもとにした支配統制が比較的ゆるやかだったことを示しているだろう。だから、明治以降、両者の交流関係が新たに展開しえたと言えよう。

そして、今日においても、沖縄民謡だけでなく古典音楽をも楽しむ人が、「階層差」を見せずに大量に存在しているのだろう。とはいえ、古典音楽芸能などが文化支配的なものあるいは特権的歴史背景を全く消滅させたといえるわけではないだろう。

こうしたなかで、沖縄芝居や村芝居・村々の芸能などが、どういう位置にありどういう特性を持つのかの検討にも興味をそそられる。いつか目にしたいものだ。

その点と多少かかわって、次のような毛遊びについての考察も興味深い。

「沖縄民謡の世界では、村の祭りなどと並んで「毛遊び」が重要な唄の場だった。

モーとは野原、広場のこと。一日の仕事を終えた夜、若い男女が決められた場所に集まって、うたい踊って遊ぶ。即興で唄を掛け合い、恋のやりとりをする。それが、毛遊びである。毛遊びの場で、唄は鍛えられ、磨き上げられた。」 P 84

「毛遊びは古代の歌垣（＝歌掛け）の流れをくむ風習で、唄の掛け合いによる恋のやりとりの場だった。この掛け合い唄の文化は、日本列島から南西諸島、中国大陸南部から東南アジア地域、ヒマラヤ南麓あたりまで広がっていたようだ。」 P 86

「明治時代にはまだ盛んに行なわれていた毛遊びが、大正半ばには「まさに跡を断たんとしている」という。だが、実際のところ毛遊びはその後もかなりしぶとく残り、ところによっては戦後も行なわれていた。」P 87

これらの叙述を読んでいくと、毛遊びと明治～昭和期に広く見られる村芝居・村々の芸能とがどのような関係にあるのだろうか、知りたくなる。

また、「童謡」と言われるものは、どういう歴史的社会的背景をもってきたのだろうか。知りたいことの一つだ。なお、これらは、民謡研究とも重なり合って追求される必要があるだろう。以上のいずれも、私の専門外ではあるが、興味がそそられるテーマである。

5. 宮廷芸能と民謡 男と女 人間関係と声・音の役割

宮廷芸能と民謡、男と女ということにかかわって、次のように重要な指摘がなされている。

「那覇の娼妓がしばしば地方に流れ「三味線をひき渡世」していたとすれば、彼女たちを通して、那覇遊廓の芸が広い地域に伝播したことが考えられる。そうした点からも、遊廓は沖縄の芸能を考えるうえで重要な場所と言える。

だが、宮廷芸能の担い手は男性たちであり、毛遊びでも、三線弾きは男性の役目だった。三線は男の楽器だった。女性が三線を弾くと、まず遊廓を連想させた。だから、今でこそ多くの女性たちが唄三線を習っているが、かつては女子が三線を手にするに猛反対する親が多かった。

沖縄には、唄三線に対するふたつの相反する評価がある。唄三線は、沖縄が誇るべきすばらしい文化だと見なされる一方で、下らない芸事だと貶められもする。前者は首里王府の宮廷芸能に対する称賛から出た評価であり、後者は民謡に対する蔑視から出た評価である。(中略) このふたつはただ演じられた社会的な場と役割を異にし、そのことによってそれぞれ違ったスタイルを発展させただけのことであって、両者の音楽性は共通の土台の上に立っている。しかも、現代の大衆音楽として元気が良いのは、貶められてきた民謡系の流れをくむ音楽である。」P 94～5

なるほどと思う。私の周辺でも、女性の活躍が目立つ。とはいうものの、男性の活躍もすごい。

私が沖縄に来たのは40年前。男女を問わず、音楽芸能を皆が日常感覚で楽しんでいることが、すごく印象的だった。私が生まれ育った、岐阜・愛知・東京では見られない光景にしばしば出会った。クラシック音楽やポピュラー音楽だけでなく、民謡や踊りを楽しむ若者がこく普通にいることが衝撃的だった。

その衝撃を受けて、私自身もこの世界の入り口に立ちたいと思ったが、25歳までの空白に近い状況は、決定的なハンディであった。

もう一つ、私にとってハンディになったのは、「論理言語で、生活を律しなければならない」という発想で、沖縄に来るまでの世界がおおわれていたことである。そのことに関わって刺激的なのは、次の叙述だ。

「重要なのは、声の力と言葉の力が別個のものではないということである。私たちが、言葉と声を区別してしまうのは、文字というものを扱うようになったからである。文字は、言葉を聴覚の領域から切りとって、視覚の

領域へと移行させた。そのことによって、言葉と声の間に溝ができた。だが、もともと言葉は声として出現した。始めに言葉ありき、というのは正確ではない。始めに声ありき、声としての言葉ありき、というのが正しい。

声としての言葉が帯びていた原初のマジカル・パワー。そこから連綿とつらなる変遷の果てに、現代の私たちが聴いている唄がある。」 P 116

書き言葉が作り出す論理によって、研究の世界をすすめるだけでなく、生活世界をも律しようとする志向が、近代以降強まるが、私はまさにそうした傾向を強く持っていたのだ。それが結果的に、声の世界の抑圧にも連なり、音の世界、音楽の世界との距離を広げていったのだ。

声にしても書き言葉にしても、人間関係に関わると言う性格をもっており、両者の特性を生かし、また両者を相互にかかわらせながら、人間関係を豊かにしていくことが求められる。しかし近代以降、書き言葉が優勢となり、書き言葉によって、声を含む生活世界を律する傾向が強くなる。

だが、その書き言葉の世界にしる、音・声が漏れ出てくる。学校でのレクチャでもそうだろうし、弁論術などもそうだ。唸家やアナウンサーをモデルにして修行する学校教員がその例だ。だが、それらも、教師と生徒、生徒相互間の人間関係の発展という要素を含みこまないと限界に突き当たる。

声・音の世界での人間関係形成が、唄・音楽の世界になって行ったことについて、次のように書かれている。

「谷川は、唄を掛け合う唄遊びの遙かな淵源を、アニミズムの時代、言問う世界における言葉の戦いに見いだした。この説によれば、男女の唄の掛け合いは、言葉の呪力で相手を屈伏させたり、また相手の意図を言葉の呪力でかわしたり、はね返したりする戦いから発展したというわけだ。恋の駆け引きはゲームどころか、まさにバトルなのである。」 P 104～5

「言葉が、より強力なマジカル・パワーを発揮するためには、おそらく日常的な声、日常的な言い方ではダメである。したがって、それは「唱える」「うたう」という非日常的な発話スタイルと結びつきやすいだろう。「言問う」世界の言葉の戦いは、必然的に、唄文化を発展させることになったと思われる。」 P 108

大変興味深い。人間関係の問題性が拡大してきている今日、こうした唄・音・音楽という世界からアプローチして打開策を探るのも有効だろう。

6. ヤマト化と向き合うなかでの沖縄の唄

沖縄のポピュラー音楽の展開にかかわっての以下の叙述は興味深い。

「ポピュラー音楽は、故郷を離れた人たちのための音楽だった。とすれば、故郷を離れる、あるいは故郷を思うというテーマは、ポピュラー音楽にとって本質的なものであり、きわめて重要だったと言える。

沖縄の民謡も、1920年代以降、ポピュラー音楽化していった。唄のなかで、故郷がうたわれた。だが、これらの唄は、聴き手に自分が生まれ育ったシマ(=村)を思い起こさせると同時に、より広く大きな「沖縄」という枠組みを自覚させた。」 P 151

「島唄」などが生まれた1990年代にかかわる叙述も興味深い。

「文化の価値は、そのなかにドブプリ浸かっていると、あまりにも近すぎてよく認識できないことが多い。その文化の外側にいったん出て、距離を置いて見た方がよく見えることが、しばしばある。先行世代よりもずっと考え方や感じ方がヤマト化した復帰後世代は、精神的に、いったん沖縄文化の外部に出たのである。彼ら彼女らは、沖縄の外部から沖縄文化を見る視線を獲得し、その視線を通して沖縄文化の価値をあらためて発見したのではないか。

ヤマト文化にいったん同化したからこそ見える沖縄文化の価値というものがある。意識や感覚がヤマト化したにもかかわらずというのではなく、ヤマト化したからこそ見える沖縄の価値を、新しい世代は現代の沖縄の唄のなかに感じとったのだと思われる。たとえその「沖縄」が先行世代から見て十分に沖縄的でなくても、新世代にとっての沖縄は、そこにしかない。」P176

今話題の「復帰後40年」の沖縄音楽の創造的展開の要因の説明として注目してよい叙述だろう。次の指摘も興味深い。

「一連の抗議行動、県民投票キャンペーンのなかで、大工は「沖縄を返せ」をうたいまくった。その際、彼は最後の「沖縄を返せ、沖縄を返せ」という一節を「沖縄を返せ、沖縄へ返せ」と、うたい替えた。「沖縄へ返せ」という一言によって、この唄のあいまいな位置づけは一掃された。沖縄は米軍の横暴から逃れ、日本ではなく、まさに沖縄に返されなければならないのだということを、この一言は明快に宣言した。

だが、政治的な文脈を離れて、別の聴き方もできる。この唄は、沖縄の社会と文化がどんどんヤマト化してきてしまったという現実を前にして、沖縄本来の姿を返せとうたっているようにも聞こえるのである。それは、日本国という枠組のなかにあっても、沖縄人が沖縄人であり続けることを希求するメッセージだった。」P177

私も、1960年代前半からこの曲に出会い、1970年前後、頻繁に歌った「懐かしい」曲だ。しかし、大工が替え歌にした1990年代、私は沖縄にいなかったので、この替え歌は知らなかった。この時期に登場した曲、「花」「涙そうそう」「童神」などは、私にも歌える親しみやすい曲だったが、そのあたりもからんで、次のような叙述がある。

「沖縄的なるものの自覚、沖縄人であるという自己認識からは、沖縄固有の文化を肯定し擁護しようとする姿勢も、それを否定し克服しようとする姿勢も生まれた。だが、民謡の流れをくむ唄は、肯定擁護派の側にあった。本土復帰後に、沖縄社会はヤマト文化に急速に侵食された。沖縄的なるものが失われていくことに対する危機感ゆえに、沖縄の唄はますます沖縄的なるものを主張するようになった。

こうして沖縄の唄は、まさに「沖縄の」唄になった。沖縄の唄というのは、南西諸島に生きる人びとが主にヤマトと向き合うことによって形成された概念だった。」P181

この記述は、私の「沖縄おこし・人生おこしの教育」で書いた、文化芸能界と教育界との対比を想起させる。「沖縄固有の文化を肯定し擁護しようとする姿勢」が文化芸能界であり、「それを否定し克服しようとする姿勢」

が教育界であるように読めなくもない。

その「肯定し擁護しようとする姿勢」の側にも、次のような問題性の存在が指摘される。

「沖縄のすばらしさがことさら表現されるのは、沖縄的なるものが失われつつあることの裏返しである。(中略)一九九〇年代前半は、本土でも沖縄ブームなどと言われた。沖縄の唄もずいぶん注目を集め、沖縄のミュージシャンたちが大活躍した。だが、それは沖縄音楽文化の力量を示した現象であったと同時に、沖縄文化そのものの衰退も反映した現象だったと言えるのではないだろうか。」P182

このあたりをどのように分析評価するか、重要な問題が存在している。さらに音楽だけでなく、広く芸能・美術・デザインなども視野を入れるとどうなるのだろうか。それらと、教育界の動向をからみ合わせるとどうなるのだろうか。考えていきたい。

7. 八重山 節歌 ユンタ ヤマト歌

八重山の唄の歴史について、次のように注目すべき指摘をしている。

「八重山の人びとにとって、三線はあらたな支配者がもたらした楽器であり、首里王府の文化の香りをふりまくものであった。地元の役人たちは、当初、沖縄本島の節を弾いていた。首里王府の支配下に入った以上、彼らには首里文化の素養を身につけることが要求されたはずである。だが、彼らは、やがて地元のユンタなどに三線の伴奏をつけてうたうようになった。

つまり、仕事唄をアレンジして三線の伴奏をつけたのは、実際に田畑でうたいながら汗を流していた農民たちではなく、農民たちの上に立つ役人層や富裕層の人びとだった。三線の伴奏をつけた唄は「節唄」と呼ばれ「…節」というタイトルが多い。三線伴奏つきの唄、三線を弾きながらうたうのが首里スタイル、沖縄本島スタイルであったから、節唄は、八重山の唄を沖縄（本島）化したものという見方ができる。」P185～6

「田畑では、相変わらずユンタが無伴奏で朗々とうたわれ、仕事をする肉体のリズムを作り出していた。野の仕事唄は近代に入ってからもうたい継がれ、戦後もしばらくは存在した。しかし、やがて農作業の機械化が進み、唄によって身体のリズムを作り出す必要が減少するにつれて、こうした野の唄は消滅を余儀なくされた。その結果、かつて役人層や富裕層の人びとが工夫して作り上げた節唄の方が残った。現在では、この節唄が伝統的な八重山の唄としてうたい継がれている。」P193

この「階層構造」とでも呼べるものの変遷は興味深い、加えて、次の指摘も興味深い。

「ヤマトの唄はおれたちの唄という意識のあり方は、ちょっと複雑である。八重山の人びとにとって、八重山の節唄は大切な伝統文化だと意識された。だから、安易にはうたえない。それらの唄は、型を守って、しっかりうたうべきものだった。だが、そうになると、もっと気楽に自由にうたえる唄が欲しい。そこで、ヤマト唄が親しまれた。

ヤマト唄は、もちろん沖縄本島にも流入したが、より広く親しまれ、さかんにうたわれたのは八重山地方である。八重山人は、支配者であった首里王府、沖縄本島に対して、近代以降も心理的な距離感を保ち続けた。そのため、八重山人の心理は、沖縄本島よりもむしろヤマトに接近するという側面もあったようである。」P206

複雑な「階層構造」をなすものについてのこれらの指摘の当否は、私には判断しがたい。また、トバラーマ大会にみられるものが、それらの構造のなかでどう位置づけられるのかにも関心が持たれる。最後の指摘については、そうした現実がありそうな印象を持つ人は多いだろう。近年、ヤマトから八重山への移住者が多いこともかかわりがあるかもしれない。

同じ先島でも、宮古とは事情が大きく異なるようだ。そのあたりも興味をもたれる。

8. 唄 生活 伝統 分離と一方向性 チャンプルー性

次は、唄と生活・音楽との関わり、そして伝統についての分かりやすい叙述だ。

「何らかの理由で、唄がそれまでうたわれていた生活の場から切り離されると、人びとの意識が音そのものに向くようになる。唄は道具から「音楽」になる。そこから、音楽的な発展が加速する。唄は「音楽」になることによって、一層自由な表現を獲得する。

だが、唄が音楽的に洗練されて立派なものになると、それ以上いじりにくくなる。見事なスタイルは、安易に崩せない。そこで唄は固定化し、「伝統」というレッテルが貼られ、保存志向が強まる。「伝統」は、何百年もこういう姿だったのだぞという威厳をふりまく。本当は、そうではないのに……。

唄はいつの時代にも変化してきた。伝統とは「持続する変化」の別名である。だから、伝統文化を継承するというのは、先行世代の遺産を受け継ぎながら、それをあらたに変化させていくことであるはずだ。」P207～8

私は、この説明に共感する。次の指摘もそうだ。

「社会的なポジションが変わると、音楽そのものも変わる。舞台唄となった民謡は、もはや毛遊び唄や八重山のユンタのように、生活のなかに埋め込まれ、生活のなかで機能する唄ではない。それらは、生活のなかから切り取られ、舞台という特別な時空に置かれ、見知らぬ観客も音と声そのもので満足させる唄、あるいは満足させなければならない唄になった。つまり、聴覚的に一層面白いものが要求されるようになった。そのことは、必然的に音表現のさまざまな工夫を促した。民謡は舞台唄となることによって、一層洗練された音楽になっていった。

(中略)

だが、舞台唄になった民謡は、毛遊び唄やユンタなどにあつた相互に掛け合う双方向性を弱め、舞台上の唄を客席の観客が聴くという分離と一方向性を強めることになる。そのことに違和感を持った人もいた。」P229～230

この「分離と一方向性」は、沖縄では、他府県とくに大都市地域と比べると、まだまだ弱いと言えよう。だから、シュガーホールをはじめ各地で、市民ミュージカル的なものが盛んに作られるのだろう。私自身も、197

0年代後半から1990年代にかけて、学校教員や学生たちとともに、「分離と一方性」とは逆の「結合と双方性」での文化創造に盛んに取り組んだ。(浅野誠『学校を変える 学級を変える』(青木書店1996年)参照)

もう一点、沖縄にかかわってよくいわれるチャンプルー性にかかわる次の記述も興味深い。

「チャンプルー・ソングも、沖縄では民謡と呼ばれてきた。じつは、同じような音楽的チャンプルーはヤマトでも行なわれていた。ただ、それらが民謡とは呼ばれなかったというだけのことである。」P226

「そもそも日本流行歌史は、日本チャンプルー・ソング史そのものである。日本のみならず、世界中のポピュラー音楽史がチャンプルー音楽史だと言ってもよい。つまり、チャンプルーは例外的な手法ではなく、ポピュラー音楽創作の主流だった。

外来文化のコピーは、文化の画一化を生む。外来文化のチャンプルーは、新たな文化の差異を生む。音楽に関していえば、後者の方が断然面白い。」P226～7

これらの指摘は、今後も重要であり続けるだろう。

9. マスメディアと沖縄民謡

本書は、マスメディアが沖縄民謡の世界に入り込む1960年代以降の、沖縄民謡の変容について、次のように述べる。

「さまざまな神事、年中行事、結婚や新築などの祝いの席、酒宴などで、沖縄の唄がうたわれなくなったわけではない。だが、毛遊び、ユンタをうたいながら行なわれる農作業などは絶滅した。その代わりに、メディアにのった民謡の存在が大きくなった。

だが、だれもがレコードを吹き込んだり、ラジオ放送に出演できるわけではない。だれもが舞台に立てるわけではない。そういうことができるのは、一部の芸達者な人たちだけである。そこで、コザを中心に、民謡を生業とする「プロ」らしき人たちが出てきた。プロは、民謡クラブなどの舞台に立ち、催し物や祝いごとがあれば呼ばれて唄三線を披露し、弟子をとって教え、ときにはレコーディングをしたりラジオ番組に出演することによって収入を得る。そうしたプロの民謡歌手たちによって、あらたな沖縄音楽が作られていった。

(中略) 先人たちが各自の個性を刻印し、いろいろな音楽的工夫を凝らすことによって時代とともに変化してきた唄が、守るべき「伝統」として固定化されるようになる。本来、即興的な要素を多く含む自由自在な唄であったはずの民謡が固定化してくることに、(中略) 上原直彦は、すでに二十年も前に次のような危惧を表明している。

多少関りのある者として反省をこめていうならば、文字、レコード、テープ、ラジオ、テレビの発達は島うたを後退させているのではないだろうか。なるほど、それらは普及、保存の意味では大きな役割を果している事実を確かに認めるところだが、人々は、本来、歌ってはじめて歌であるはずの歌をレコードやテープにまかせて自らは歌わなくなり自由に発想すべき歌の文句を民謡集やジャケットの歌詞カードにたよって作らなくなった。そ

れどころか現にある歌詞でさえ「本を開けばあるから」と不思議なことに民謡歌手が覚えなくなっている。更に奇妙なことには「ナークニー」「かいされー」等々の遊びうたの文句にまで民謡集は一番、二番と順番をふってあるものだから初心者はそれをまる覚えして本以外の発想を持たなくなっている。このことは、歌をワクの中に閉じ込めたのと同じで、自ら「歌の自由」を規制したことになりはしないだろうか。単にコピーされた歌にはもう生命がないことを知らなければならない。

(中略) 毛遊びの場では、唄は固定的な「作品」ではなく、臨機応変にコミュニケーションするという「行為」だった。だが、毛遊びがなくなり、唄がメディアにのり、それを多くの人が聴いて楽しむようになった現在、唄は行為ではなく作品と見なされるようになった。」P233～4

鋭い概括だ。こうした変容は、人々の直接的な相互つながりが減少して、個人化＝孤立化が進むことと並行しよう。と同時に、つながりの回復・創造への要求と、その実現のための手段として音楽、沖縄民謡が位置づくと言うこともありうる。

そうした今後の方向にかかわっての次の記述も注目されよう。

「メディアの介在が避けられなくなった時代の沖縄民謡は、少数の専門家たちの手になる作品を中心として生きのびていくだろう。そこには、大きく分けて二つの道が考えられる。

ひとつは、ある時点で出来上がった音楽スタイルを「伝統的」なものとして守り、それを沖縄のシンボルとして保存継承していく道である。その際、高い技術と洗練された味わいを持つプロの唄三線が、多くの人にとってお手本となる。こうしたあり方は、首里王府の系譜を継ぐ立派な琉球古典音楽とたいして変わらない。

もうひとつ、より面白い音楽表現を求めて、多彩な音楽的要素を外部から導入することによって変化し、市場を介して流通するポピュラー・ミュージックとして生きのびていくという道がある。こちらのタイプもまた、多かれ少なかれ何らかの沖縄らしさをその音に宿し、沖縄のシンボルとして聴かれ続けるだろう。」P234～5

いまでは、この二つの沖縄民謡の道だけでなく、琉球古典音楽、クラシック、ジャズ、また、東京などから発信されるポップスや歌謡曲など、多様な音楽が人々のなかに並存する状況にある。

そうした多様なジャンルの音楽が、併存するだけでなく、相互の垣根をこえた交流創造なども広がっていることにも注目したい。それは、「多彩な音楽的要素を外部から導入することによって変化し、市場を介して流通するポピュラー・ミュージック」だけでなく、シュガーホールなどで追求されている市民ミュージカルといった形も存在することにも注目していきたい。

10. 生きるための道具としての唄

本書は、まとめ部分で次のように語る。

「暮らしのなかに唄をもつというのは、どういうことなのか。突き詰めて言えば、唄は、人間が日々幸せに生きていくためにあった。唄は、生活に添えられた、たんなる飾りではなく、人間が幸せに生きていくために絶対

に必要な道具だった。生きるための道具としての唄は、自由自在に使いこなされた。沖縄にかぎらず、世界中でそうだった。

だが、私たちは現在、唄よりも科学技術が実現した便利な機械やお金で買えるサービスに頼って生きようになった。日常生活のなかで、唄の役割が小さくなったことは否定できない。それでもやっぱり唄が生きるための道具であるとするならば、これから私たちは、暮らしのなかで唄をどのような場所に置き、どのように使っていけるだろうか。唄はどのような役割を果たし、どんな力を発揮するだろうか。

人間は唄という文化を創った。唄を使って生きてきた。唄の力はたいしたものだった。これから唄文化がどう変わっていくにしても、唄の力は、たいしたものであり続けてほしい。それが、唄好きの願いである。私たちが唄で生きる。そのことによって、唄は、生きる。」 P 238～9

このことを、私が実感したのは、沖縄生活を始めたころだった。私が生育した地域の唄文化というと、秋祭りに青年団がみこしをかつぎながら歌う一曲だけしか、私は知らなかった。同じ岐阜県でも、郡上地方に行くと、有名な郡上節などがあるが、私の地域で地域民謡を聞くのは、その一曲だけだった。家族のなかでも唄と言えば、父親の浪曲か、それに近い歌謡曲だけだった。小学2年生の時、クラスメイトが当時の流行歌「お富さん」を歌って、若い担任からクラス全員が激しく叱責された。音楽というと、教科書にあるものか、クラシックだけが『公認』されていた。

ところが、沖縄にきてみると、ほぼ誰もがといていいほど歌うし、当時の私にとっては「無数」と感じられるほどの民謡などがあり、いたるところに音楽・唄が存在していた。まさに「生きるための道具」であり、「生きている」そのものだった。

そんなことの歴史的展開を、社会的視野をもって、分かりやすく提起してくれたのが本書だ。私がこれまで考え書いてきた音楽「論」めいたものに響き合うところ大であった。

2009年7月24日

岡田暁生「音楽の聴き方」(中公新書2009年)を読む

つい最近刊行されたばかりで、店頭で見つけた本だ。

私は、クラシック音楽にはあまり馴染んでいず、誘われてコンサートなどに行くと、どう聴けばいいのか、とまどってしまうことがしばしばだった。ともかく感じたまま聞くしかない、と開き直るしかなかったが、集中が持続しないことも多かった。

ということが動機で読みだした。案の定、知らない音楽家の名前の続出もふくめて、かなりの音楽上の「教養」が求められるものだった。それでも、メッセージはわかりやすく伝わってくる。

私に伝わってきたメッセージは、要するに、音楽を「読む」ための「教養」を積むことだ。ただ聞いているというだけではもったいないというか、音楽が出す豊かなものの大半を逃してしまうのだ。先日シュガーホールの

新人コンサートでグランプリを取った若者が演奏し始めた途端、フィンランドをイメージしたり、ベルイマン監督作品を思い出したりした。この演奏のとき、私の集中が切れなかったのは、演奏がよかったことだけでなく、曲のイメージを珍しく私が予めもっていたことにあるのだということを再確認した。

もう一つ、音楽をすることが「聴く」うえで大切だということだ。最近、中山合唱団で歌っていることが役立っていることを気づきはじめた。テレビなどで、合唱をやっていると、多少は関心が増し、味わうことが増えている。

この本は、西欧音楽の社会史というべき要素を多分に持っている。19世紀を境にして、その前と後との違い・変化というものを知ってよかったと思う。また、BGM、ヒーリング音楽の隆盛などへの指摘も興味深かった。

と書きながら、BGMとしてクラシック音楽を聞き（聴きではなく）ながら、これを書いている私だ。

2009年9月12日

岡田暁生「西洋音楽史」(中公新書2005年)を読む

しばらく前、この著者の本を読んで、このブログに書いたが、またこの本を店頭で見つけた。

中高時代以来久しぶりに、西洋音楽史を学ぶ。

この本の面白さは、バロック・ロマンの流れだけでなく、その前後、つまり中世・ルネッサンスとのつながり、そして、現代音楽とのつながりをも述べていることである。

また、社会史的な背景がわかりやすい。たとえば、こうである。

「ベートーヴェンになって初めて現れるのは、この「右上がり」に上昇していく時間の理念」である。コーダへ向けて、終楽章めがけて、いやましに昂揚していく音楽——ここにヘーゲルやマルクスやダーウィンを生んだ一九世紀的な進歩史観の刻印を見ることはたやすい。」 P 124

「天賦の才ではなく労働によって大きな建物を作り上げていくベートーヴェンの音楽が、一九世紀市民社会によってあれほど崇拝されたのは、彼らがそこに「勤労の美德」の音による記念碑ともいえるべきものを見出したからではなかっただろうか。」 P 130

そして、本文最後の次のような問題提起は興味深い。

「ポピュラー音楽こそ、「感動させる音楽」としてのロマン派の、二〇世紀以降における忠実な継承者である。」 P 229

「宗教を喪失した社会が生み出す感動中毒。神なき時代の宗教的カタルシスの代用品としての音楽の洪水。」 P 230

考えてみたい問題だ。全体を通して、大変勉強になったが、「あとがき」での「通史」を書くことについての記述も興味深い。

沖縄教育通史を一度書き、改めて書きたいと思っているわたしには示唆的であった。たとえば、「私」という

語り手の存在を中途半端に隠そうとしないこと」P233などは注目したいことだ。

2008年8月5日

阿久悠 時代を語る テレビ番組に見入ってしまう

歌番組を1時間半にわたって見てしまうなどというのは記憶にはない。それほど、今晚のNHKの番組は強烈だった。阿久悠が作詩した歌で綴ったものだ。サブタイトルは「時代を語れ」といったものだった。

彼は、私よりは少し年上の世代である。この番組で歌われた曲の多くは、歌謡曲に縁がない私でも知っているものがほとんどだ。

縁の薄い私だが、かれの詩の強烈さ、とくに時代を語る強烈さに、私は圧倒された。共感するというか、時代を共有し、そこに物語を感じる。

と同時に、彼の時代を読み取るというか、時代を先駆する、その感性にまいった。かれのような「軽快さ」には、「田舎」からでてきた私には畏怖の念さえ感じるとともに、私の時代感性がどんなものだったのか、逆照射されている感覚に陥る。

かれの時代感覚の鋭さを、「軽薄だ」とかと批判するのはたやすい。あるいはその鋭い感覚で、「なにを提起しているの?」「なにを創造したいの?」と問うのはたやすい。

そして、こうした彼のものを、「戦後スタート」時点の感覚、あるいは1960年代の、今日の日本の原型的発想から問うのはたやすい。また、「時代に棹さしていた」彼が、時代創造にどうコミットしているの、と問うのはたやすい。

私自身は、おおげさながら、時代創造にコミットしたいという気持ちを、1960年代以来持ちつづけている。その内容は、1960年代当初のものを持続しているわけではない。むしろ、持続させたいという感覚をもつ人に強く反発してきた。つねにバージョンアップしなければならないだけでなく、枠組みそのものを組みかえることが求められると思ってきた。その意味で、時代感覚が必要だ。その点で、私のかれに脱帽だ。

それにもかかわらず、彼が時代創造に提起しているものを私は感じ取れない。それだからこそ、私がかかわっている場面で、時代創造になりうることを私自身ができているのか、を問いながら、今を生きている。

中山合唱団と

私の音楽体験

2012年

4月25日

調子外れ（音痴）と付き合ってきた50年余りと老人性難聴

合唱に参加して数年がたつ。

この間の前進は、調子外れ、つまり音の高低が外れた時、それに気付くことができてきたことにあらわれているように思う。調子が外れた時に指導者や周りが困った態度を出すのが、私だといわれても、そうだなと気付かないことが多い。その時は、事情を察して、「外れた」ふりをする。しかし、その時に、原因は私だなと気付くことが出てきたのだ。以前は、外れているのを気付くことさえなかったから、前進といえば前進だ。

こうした体験で記憶に残るのは、4回ある。1回目は、小学校の時、『音楽部』というのをつくられて、「春のうらの・・・」の低音部を歌った時。担当教師が困っていたのは覚えているが、私がどう対応したかは覚えていない。音楽をいやだという気持ちをその時持ったことは確かだ。その時からひきずっていることを覚えている。

2回目は、高校時代、学校行事で校歌斉唱の際、周りが私を振り向いた時だ。大きい声だから、振り向くのだろうと、その時は思ったが、今から振り返ってみると、調子外れがきわだっていたようだった。当時は、そのことさえ気付いていなかった。

3回目は、大学教師になって数年後、なんとかしなくては、と思いついて、中村透さんが担当する「音楽通論」を学生に混じって受講し、合唱に参加した時のこと。合唱の際、彼が困って、「1オクターブずれた人がいる」と言った時だ。私には自覚はない。一緒に授業に参加していた私のゼミ生が、私であることを教えてくれた。それから20数年合唱から外れていた。

4回目は、ここ数年間の合唱のなかで、である。最初の頃は、自分が調子外れであることが、まったく分から

なかった。3～4年して、外れている自分に気付くことが始まった。

気づけるようになったから、当然なんとかしようとする。伴奏ピアノや隣の声に音を合わせようとする。その作戦は、たまに成功する。一人で家のピアノで音程をとれば、合う確率は高くなる。しかし、合唱のように、集団の場合には、調子とれないことが多い。運を天に任せて歌っている。どうしようもない時、しばし、ロパクでごまかすか、人には聞こえないような小さな声でかわすこともある。

これを繰り返してきたが、前進速度は大変鈍い。そのことを気にしていると、音楽を楽しむ所ではない。苦役に近いものになる。いつかはさらに前進できると思うが、このペースで行くと、少なくとも10年以上かかりそうだ。その間「苦役」を続けることは、辛い。

加えて困っていることは、会議や授業の際に、発言者の声が聞きとれないことが増えてきたことだ。2～3年前から始まったが、最近では、離れた位置の発言者は聞こえない方が多い。

昨年の人間ドックではじめて難聴があることが指摘された。

最近、困る場面が多いし、もしかすると調子外れも関係しているかもしれないと、耳鼻咽喉科に行き、検査を受ける。やはり老人性難聴だ。とくに高音部で悪い。まだ補聴器をつける段階ではないとのことだ。

家に帰って、ウェブで調べる。加齢に伴うもので、高音域→会話音域→低音域と進行し、両耳同時とのことだ。音は聞こえるが、何を言っているのかわからない状態がしばしば見られるという。生理的变化で、治療方法はなく、必要に応じて補聴器をつけることだ、という。

私の場合、書いてある通りだ。検査結果も、高音域がとくに悪く、会話音域も悪くなっており、低音域はそれほどでもない。私の調子外れは、ほとんどが高音で生じているので、難聴の進行が調子外れを加重しているかもしれない。

ついでに「音痴」を調べたら、今では「調子外れ」というのだそうだ。主な原因を4つ書いているが、私の場合、「乳児期におけるピッチマッチ経験の不足」「ピッチを上下にイメージできない」「言語脳と音楽脳の混乱」があてはまりそうで、「求める音高が個人の声域より外にあるために出せない」はあてはまらない。

推理としては、この三つが入り混じっているようだが、調べても始まらないようにも思う。だが、音楽脳と言語脳との関係は気になる。音楽脳の弱さを言語脳でカバーしようと長年やってきたからだ。たとえばピアノ・アコーディオン・ハーモニカといった「機械的に」楽譜どおりに音を出してくれる鍵盤楽器をかじってみたことがある。それで調子外れをなんとかしようとしてきたというわけだ。だが、歌のようなものは、コントロールしにくい。

ついでだが、そのウェブには、「心的外傷につながる事が非常に多い」とある。まさしく私だ、と思う。外れた時に「固まってしまう」ことにあらわれている。「心的外傷」がかなり層を重ねているだろうが、これ以上重ねるのは避けたい。

こんなことに気付いたのは、合唱をしてきて前進したからではないか、といわれそうだ。まさにそうだろう。だが、これ以上の前進をしていくには、さらなる時間が必要だし、その過程を楽しめるものにするには大変だ。

ということで、しばし合唱はしばし遠慮することにした。

2011年

12月

中山音楽の夕

25日6時から、恒例となった「中山音楽の夕」が、中山集落センターで開かれた。

まず10人の子どもたちのピアノは、子どもたちらしい曲を元気よく弾く。楽しい雰囲気があふれる。中学生ともなると、ショパンの『ノクターン』を弾いて、会場をうっとりさせるものも登場。中山の子ども半数以上が演奏というのもすごいことだ。

子どもたちの最後は、「琉神マブヤー」の主題歌の合唱。子どもたちには勢いを感じる。今後ますます楽しみだし、字中山の新しい世界を切り開きそうだ。

私たち大人（中高年）の合唱は、定番『ふるさと』、はじめての混成合唱への挑戦『四季』、そして『翼をください』、加えて会場と共に、『上を向いて歩こう（ウチナーグチバージョン）』だ。

そして、会場をうならせたのは、メンバー一人ひとりの独唱。曲目を記そう。

カーロ・ミオ・ベン
星の世界
えんどうの花

アメイジング・グレイス

アヴェ・マリア

プロヴァンスの陸と海 オペラ椿姫よりジェルモンのアリア

6年近く前のスタート時点では、全く想定外の世界だ。音楽素養ゼロに近い人でも、やれるもんだ、と実感。

最後は、クリスマスらしく、讃美歌のメドレー、そして、キャンドルサービスで、会場全体での「きよしこの夜」で閉じた。

写真は会場のキャンドルサービス風景





終了後は、懇親会。大いに盛り上がる。

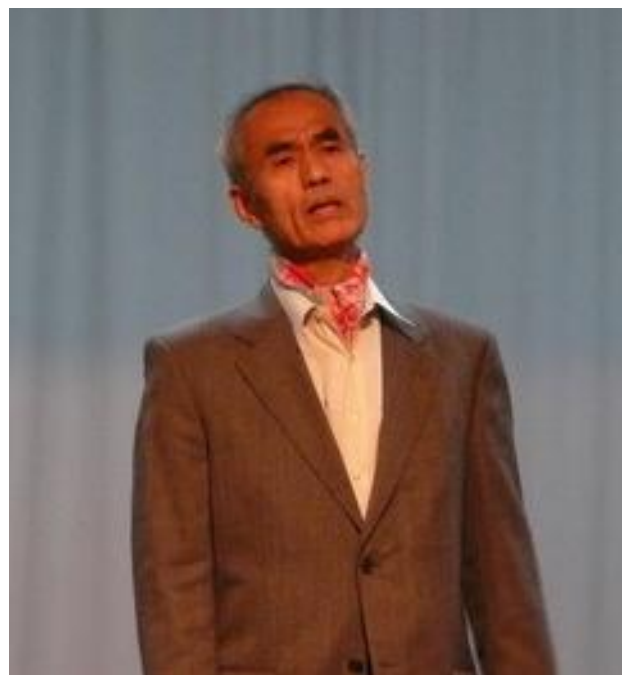
今年は、独唱にこれまでよりずっとエネルギーが注がれた。

恵美子のアベマリアは、かなり難しい曲で、大変苦勞し、最後の数日の猛練習で見事に仕上がった。

私の、カーロ・ミオ・ベンは、声楽を習う人の入門曲だそうだが、なかなか難しい。困難をきわめたのは音程とりだった。80%での確率で外れる個所があったが、なぜか本番が一番よかった。イタリア語もなんとかごまかすことができた。半年に及ぶ練習のために、ユーチューブで参考にするプロの歌唱を聴いた回数は100回ぐらい、自分で練習した回数は、200回ぐらいだろうか。

団員の熱唱にあおられて、指導者の井上靖さんも、突然「オーソレミオ」をアカペラで歌う。昨年までは伴奏者がいたが、今年はいないので、予定には入っていなかった。

他の団員もすごかった。2～3年先にはシュガーホールで、うん十年先にはカーネギーホールでという団員の冗談も、半分は本気になるかもしれない。



5月1日

「上を向いて歩こう」のウチナーグチ版に挑戦・・・中山合唱団

結婚式での『花』の合唱に続く中山合唱団の次のステージ？は、5月末の中山豊年祭（5月29日予定）である。大震災後、再び歌われることが多くなった『上を向いて歩こう』が候補に上っている。しかも、そのウチナーグチ版で行こうというのだ。

初めての試みということで、メンバーがウチナーグチに直す作業をする。

念のためとおもい、インターネットで調べてみた。すると、すでにあるではないか。早速取り寄せることにした。聴いてみた。主として三線伴奏のソロなので、合唱とは雰囲気やや異なる。

それにしても、大和歌を沖縄歌にする、逆に沖縄歌を大和歌にするのは、なかなか難しい。たとえば、童神のウチナーグチ版は、私が大好きなものだが、大和口歌詞になると、その情感が薄れる。

57577の和歌調になじみやすい大和口と、8886の琉歌調になじみやすい沖縄口との違いがあるのかな、とも思う。

『上を向いて歩こう』は、もともと大和歌だが、世界的に広がって、英語にもなっているが、どうも情感が異なる。沖縄口にするのも、少々難しい予感がする。

さて、どうなるやら。挑戦である。

4月17日

中山合唱団 結婚式で歌う

合唱団は、これまで中山集落センターだけで合唱を披露してきた。今回メンバーの一人の御子息の結婚式ということで、初めて『出前』をした。『花』1曲だけだが、1月から練習を繰り返してきた。会場の都合で、伴奏は電子ピアノ。並び方も急遽変更などと、慣れない場面もあったが、とにかく歌いきった。

会場の反応は上々で、メンバーはホットする。

『声量がすごいですね』・・・声量だけは、

『ハーモニーがいいですね』・・・まだ、二重唱ができないんですが。一応、ほんの一部分だけ、高音部と低音部をつくってはありますけど。

もともと出発点が、超ドシロウトで、その時点と比べれば、すごい前進だが、普通の合唱団並になるには、まだまだ時間が必要のようだ。苦勞の旅は続く。



1月6日

合唱 正月個人随想

年賀状代わりに出している年末年始通信の「2010年ニュース」には、こう書いた。

「一週間の生活リズムは、大学授業日、卓球練習日に加えて、合唱練習日を軸にまわっています。字中山住民の平均年齢六〇歳？の中山合唱団で歌っています。五月の字行事豊年祭でやった地域素材のコントは大受けて、南城市の市民便りに写真入りで掲載されました。12月は無謀にも、カンツォーネ「オーソレミオ」(イタリア語)に挑戦させられました。歌詞を覚えるのが大変でした。でも、二重唱の低音部は断念しました。」

合唱をはじめて4年余りになるが、こんな展開になるとはまったく予想できなかった。12月にはいつてからの猛特訓練習はこたえたが、それまでの週一回の練習は、それがないと欲求不満がたまるほどだった。都合が悪くてお休みが続いた時は、恵美子とカラオケに行き、欲求不満解消をするほどだ。

「オーソレミオ」の本番は、最後部の上のソは、かすれてしまったが、まあなんとか歌った。そもそも、最近まで、私は低音だと思っていたし、高音は上のレが精いっぱいだと思い込んでいた。最近になって、テノールであるといわれて、ようやく気づいた。

豊年祭のコントも、かなりの特訓だった。私がボケ役だったが、こんなことをするのは初体験だった。近隣の人には、次回はウチナー芝居の「戻り籠」をしたらどうかという人がでる始末だ。機会があれば、再挑戦になるかもしれない。

合唱団だけでなく、字にいる歌三線の名手たちが中心になった発表も期待したい。そして、30～40年前は棒で有名だった中山だ。それらが復活できないものか、とも思う。

夏に、近くの地域合唱団のいくつかが集まったコンサートがシュガーホールであった。それを聴くと、私たちの合唱団では、あと20年練習しないと到達できないなあと痛感した。それでも、私たちなりの合唱団であることは確かだ。

さて、このあと1年で、どんな軌跡をたどるか、予想はできない。

2010年

12月

第四回中山音楽の夕

1. 予告

私が住んでいる中山の年末恒例の「中山音楽の夕」が、12月26日に行われる。

年々進化する。子どもたちのピアノ、芸大生のゲストピアノ演奏、そして中山合唱団。

我が中山合唱団は、大半が50～70歳代だが、40、20代もいる。プロ水準の人が指導するが、大半は全くの素人。それでも、積み重ねていくと、少しは様（さま）になっていくのが不思議だ。

今回は、ハーモニーに初挑戦。「大きな古時計」。なかなか「うんちく」が深い曲だ。

そして、ソロに何人も挑戦。私は、なんと「オーソレミオ」をイタリア語で歌うという、大胆過ぎる挑戦。意味不明の言葉を丸暗記する。だけど、音程とか、強弱とかに気を取られて、暗記していたはずの歌詞がすぐどこかに飛んでいく。私の声は、テノールだそうだ。数年前までは、低い声だと思い込んでいたから、びっくり。そう指導されると、上のファやソまで出るのが不思議。

もう一つの悩みは、ハーモニー。低音部をやると、すぐに音程不明の世界に迷い込むので、今は高音部をしている。

子どもたちも、ピアノだけでなく歌にも挑戦。

12月26日夕、よろしかったら来て下さい。場所は、中山集落センターです。

この「夕」の出演者はほとんどが、中山住民。人口200余の字だ。合唱経験者・ピアノ経験者はほんの少し。指導が良くて、「少しずつ前進のつもり」ということでやればなんとかなる、という事例になるだろう。まともな合唱団になるには、10年以上かかりそうだが。

定例の練習日の昨日は、都合により、お休み。その代わりといっってはヘンだが、二人でカラオケに行って「練習」。なんと、カラオケにオーソレミオがあるではないか。大きな古時計もある。恵美子のソロの予定曲の『知床旅情』も「練習」。

半年ぶりのカラオケ、十分に楽しむ。フリードリンク付き夕食代まで含めて、二人で3000円。安くなったものだ。3時間OKだが、2時間で引き上げる。それでも一人で10曲以上歌う。18年ほど前に、学生に連れられて初めてカラオケに行き、歌える曲がなくて困り、「月光仮面」を歌った時より、随分「成長？」したもんだ。

2. プログラム

いよいよ近づきました。どなたでも参加できます。無料です。しかも終了後のミニパーティまであります。

※ 無論、差し入れ大歓迎です。

長年、とくにこの半年間の猛練習の成果の発表です。下はプログラムです。お待ちしております。

問い合わせは、私までよろしくお願ひします。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第4回中山音楽の夕べ

2010年12月26日18時～

中山集落センター

プログラム

司会 井上守 生花 金城エイ子 キャンドル 浅野誠

区長あいさつ 金城道年

子どもたちによるピアノ 指導 井上靖

- | | | |
|--------------|--------------|------------|
| 1、井上夏美 (小一) | ホットクロスパン | グローバー作曲 |
| 2、井上朋恭 (小一) | インディアンがやってきた | グローバー作曲 |
| 3、井上夏穂 (小三) | 歓喜の歌 | ベートーベン作曲 |
| 4、井上拓武 (小三) | 兵隊の行進 | グローバー作曲 |
| 5、井上春香 (小三) | むすんでひらいて | |
| 6、井上千穂 (小三) | おもちゃの兵隊さん | グローバー作曲 |
| 7、井上香奈 (小五) | 古い柱時計 | グローバー作曲 |
| 8、當山優香 (小六) | ワルツ | グローバー作曲 |
| 9、金城未咲 (中三) | プレリュード ハ長調 | バッハ作曲 |
| 10、金城美月 (中一) | 渚のアデリーヌ | Rクレイダーマン作曲 |

子どもたちによる合唱 「となりのトトロ」 指導伴奏 井上靖

井上夏美、井上朋恭、井上拓武、井上千穂、井上夏穂、井上春香、井上香奈、中山友愛

ピアノゲスト演奏 塚田ゆき奈

- 1、亜麻色の髪の乙女 ドビュッシー作曲
- 2、前奏曲 カプースチン

塚田ゆき奈 2002, 2004年上田晴子ピアノマイスタークラス受講。

沖縄県立芸大第12, 13回室内楽定期演奏会出演。

作陽大学第4回イタリア研修セミナーにて、Silvia Rumi 氏のレッスン受講。

長井美江、松島恵子、糸数ひとみの各氏に師事。

現在沖縄県立芸術大学4回生。第14回卒業演奏会に出演予定

来春より兵庫教育大学大学院進学

合唱 中山合唱団 (當山牧 宮平和美 當山清美 浅野恵美子 浅野誠 金城節 与那覇カズ子)

指導・伴奏 井上靖

- 1、ふるさと
- 2、大きな古時計

会場全員合唱 上をむいて歩こう

独唱 指導・伴奏 井上靖
 浅野誠 オーソレミオ
 当山清美 ていんさぐぬ花
 浅野恵美子 花 ※シンギングボウル
 当山牧 アメイジング・グレイス
 金城節 マイ・ボニー
 井上靖 ※曲目は当日発表 ピアノ 塚田ゆきな



合唱 中山合唱団 指導・伴奏 井上靖
 1 主イエス降誕（もろびとこぞりて）
 2 主イエス降誕（牧人）
 3 主イエス降誕（荒野の果てに）
 キャンドルサービス
 会場全員合唱 主イエス降誕（聖夜）

ミニパーティー

.....

上写真は、花の準備中光景。生け花は、隣家の達人が、近隣の草花を活用して生ける。

3. キャンドルサービス

26日夕に開かれた『中山音楽の夕べ』の夕べは、中山内外から幼児から高齢者まで70名余りが音楽を楽しんだ。家族ぐるみの参加が目立つ今年だった。

4回目になるが、プログラムが少しずつ充実してきた。



その風景を、何回かに分けて紹介しよう。

左写真は、クライマックスの「聖しこの夜」をキャンドルサービスで全員合唱の風景。

まさに「聖なる」雰囲気や皆で味わう。キャンドルのセッティング、キャンドルサービスは私の担当。

プログラムの前半は、ピアノ演奏。まず中山ピアノ教室の子ども10人の演奏。習いたての小学1年生の短い演奏に、高齢者から「短いぞ。もっとやれ」とウチナーグチで「かけあい」の声が出る。



何回か演奏している子どもたちは、司会者と会場の掛け合いの会話の後、落ち着いて上手に演奏。高学年、特に中学生になると、会場をうっとりさせる演奏。



ピアノの最後は、芸術大学4年生の塚田さんのドビッシェ、カプーチンの演奏。中山集落センターが、突然「音楽の殿堂」になる。

その後、中山合唱団メンバーのソロの連続。個性的過ぎて、ハーモニーが上達しないメンバーにしびれを切らして、個性を生かすにはソロがいいという判断があるとの「陰の声」が聞こえてくるが。



それはともかく、ソロの最初は私がやる習慣になりつつある。今年は、オーソレミオをイタリア語でやる。

苦闘の練習の連続。なにせ意味がわからない言葉を丸暗記。それでも格好は少し



ずつついてきた。最後の高音が出るかどうかが問題。家で練習する時は出るが、会場ではなかなかでない。

本番でも、やはり出ずに上ずってしまった。課題を先送りして、次の楽しみということになった。

4. ていんさぐぬ花 花（シンギングボール）

ソロの2番目は、「ていんさぐぬ花」 素質に恵まれた美声
右上写真

3番目は恵美子。ピアノ伴奏ではなく、自分でシンギングボールの響きにのせて、「花」を歌う。

会場の人たちは、初対面の響きにうっとり。





5. マイボニー

4番目は、写真がないのが残念。大変な美声で、アメイジンググレイス。歌手に誘われたほどだ。

5番目は、ソロのエース登場。昨年は箱根八里の迫力で会場を沸かせたが、今年は「マイボニー」。女声のバックコーラスつきで。



6. 蝶々夫人

ソロの締めは、わが合唱団指導者の蝶々夫人。さすが元プロ歌手。会場を圧倒。

12月に入って、喉を痛めていたので心配されていた



が、本領発揮。ピアノ伴奏は塚田さん

7. クリスマス讃美歌と懇親会風景

「夕べ」の最後は、讃美歌3曲を歌う。神聖な雰囲気漂わせる。

中山合唱団は、讃美歌3曲の他に、「ふるさと」「大きな古時計」

会場参加者とともに「上をむいてあるこう」「聖しこの夜」を披露。





終了後は、懇親会。合唱団メンバーが3日ばかりでつくった「おでん」。そして、ピアノ演奏小学生の親たちがつくった料理を食べながら、大いに盛り上がる。この雰囲気の中、入団希望者が出てきそうだ。次の年は、どんな合唱を披露できるか、当事者にとっては大変だが、地域の人々と楽しみながら、年齢を気にせずやっているところがいい。

12月12日

シンギングボール

しばらく前に、恵美子を買ってきた。彼女は、最高にはまっている。

仏壇にあるチーンと鳴らすものの大型だと思えばいい。これは、チーンと鳴らすだけではない。右側に写っている叩き棒を外側にまわしていくと、共鳴音で響き渡る。かなり遠くまで聞える。それがシングしているような

感じに聞こえるので、シンギングボールというのだろう。

彼女は、毎日それで歌っている。ついに、12月26日の中山音楽の夕べで、それを伴奏楽器にして歌うことになる。興味ある方はどうぞ。

いい音はするが、金属音がそれほど好きでない私には、時々、刺激を強く感じすぎる。でも興味深いものだ。



8月5日

二重唱で音程が崩れるが、どう崩れているのかわからない私

中山合唱団は、楽しくやっているが、私個人には大きな壁がたちはだかった。

宿願の二重唱に挑戦し、その練習をかさねているのだが、低音部だけをピアノに合わせて練習する時は、ようやくできるようになった。しかし、高音部といっしょに低音部を歌うとなると、音程が取れず、『霧の中』をさまよう事態になる。音程がはずれさまよっているのは、最近ようやくわかるようになって、私の音楽史上画期的な前進だが、どうはずれているのかがまったくわからない。特定の個所だけでなく、全体がさまよっているということらしい。

過去の合唱体験が思い出されてきた。この3年余りの中山合唱団のおかげで、その頃よりは、随分良くなっていると思う。私としては画期的前進だと思う。生まれてこのかた、ということでは、いまがもっとも音楽的に充実している。なにせ、かなりゼロに近いレベルからの出発だから、当然だろう。

しかし、二部合唱となると、外れてしまうことは、変わりない。困ったことに、どう外れているか分からない。だから、どう直したらいいかわからないのだ。このあたりで成長するには、何年かかるかわからない。2、3ヶ月で何とかなるものでもない、ことははっきりしている。

そんなことで、考えあぐねた結果、二重唱場面では、私は席をはずすことを決意した。

困ったことだ。だが、どうしようもない。

7月17日

中山合唱団 南城市広報誌「なんじょう」に 載る

7月の広報誌が配布された。写真のように、私たちの合唱風景が掲載されている。

私たちの合唱実力とはかかわりなしに、地域での物語づくりが評価されているようだ。



2009年

12月

第三回中山音楽の夕

花の演出

あと20日

会場を花とローソクなどで飾る。演出担当の私も、会場設営の工夫をする。近所の花師匠が試作品を作ってくくださった。地元に生えている素材ばかり。当日はもっと華やいだものになりそう。真ん中にローソクをたてる。このセットを6～10個置く予定。当日が楽しみ。



案内

昨年に引き続いて今年も楽しい夕べを開きます。

子どもから老人の方々まで世代を問わず、中山区の皆様のご参加を心待ちにしています。もちろん、区外からも大歓迎です。歌とピアノ演奏を、花・ローソク・香りのなかで楽しみましょう。

2009年12月22日 午後6時15分～8時15分 終了後 懇親会
場所 中山集落センター

プログラム

ピアノ演奏とパフォーマンス

中山の小中学生

ピアノゲスト演奏 沖縄県立芸術大学学生

合唱 中山区民による中山合唱団

独唱 中山合唱団メンバー

合唱団指導者

参加者全員合唱

クリスマスソング合唱 中山合唱団

参加者全員合唱

※ 懇親会の飲食物は、中山合唱団メンバーの積み立てをもとに、手作りで準備します。どうぞご参加ください。差し入れ・寄付金などは、もちろん大歓迎です。

曲目一覧

曲目を紹介しよう。出演者を反映して、プロの曲から初心者の曲まで、盛りだくさんだ。

ピアノ

月旅行 兵隊の行進 おもちゃの兵隊さん スケート ロングロングアゴー
 おつかい ソナチネアルバムより第一番 さようなら
 ピアノ連弾のための28の旋律練習より 第6番 および 第7番 移調弾きを楽しく
 水の反映 プレリュード

合唱

ふるさと サトウキビ畑 花 主イエス降誕（もろびとこぞりて）
 祈祷 讚美歌（冬の星座） Amazing Grace 主イエス降誕（聖夜）

独唱

早春賦 この道 ゆうなの花 愛のテーマ 未来 箱根八里
 イタリア近代歌曲より Non ti Scordar di me! 僕を忘れないで

全体の様子

22日夜、中山集落センターで、70名ほどの参加者のもと開かれた。

2008年1月、12月に引き続く第3回目の今回。その以前の2007年5月からの毎年の中山豊年祭への合唱団出演まで含めると、3年近くの間、合計6回の発表だ。少しずつだが、成長してきているな、と感じる。

印象深いことをいくつか書こう。

- 1) まず人口2百名余りの小さい集落で、よくぞ、こういう催しものが続いてできているものだと、自画自賛だ。
- 2) 子どもたちの上達はとても早い。ピアノ教室の積み上げの成果だ。今回の双子新人を含めて、度胸がすわった発表だ。家族ぐるみでの参加もとても楽しげ。発表ではない子どもたちもたくさん参加している。メンバーが増えるかも。
- 3) 合唱団は、昨年までに引き続く合唱に加えて、全員が独唱に挑戦。緊張しながらも、個性あふれる発表。バラエティに富む曲目で聴衆を飽き





させない、というか、聴衆の思い入れ参加が凄い。

4) 初心者曲目から、ピアノ独奏・オペラ独唱まで、幅の広い設定は昨年来のもの。応援参加の県立芸大生のはるかに高い水準の演奏も魅力の一つだ。

5) 参加者も中山内外の多様な世代の方々。愛知からわざわざ来られた方々が話題の一つ。参加者の仲のよさをはじめとして、いろいろなところが魅力的だったようだ。県立看護大学の職員の方々も何人か参加して下さった。とくに、全員合唱での、会場の大きく美しい声が素敵だった。そして、中山のお父さんたちの参加が多かったのも心強い。来年からは、三線を含め、新しい発表が生まれそうな気配だ。

6) 終了後の懇親会、大いに盛り上がる。料理などは、合唱団メンバーが用意したが、参加者がたくさん手伝ってくださった。話が尽きず、途中で失礼した私には、いつまで続いたかはわからないが、みんな満足し、次への 期待・決意な

どがとびかった。

- 7) 司会は昨年に引き続き井上守さん。ふんだんにアドリブで出演者と会場を盛り上げ沸かす。会場設計というか、演出は私が担当。昨年に引き続いてキャンドルサービス。その中で、「聖しこの夜」の全員合唱。
- 8) 飾りつけは、金城道年さん宅の大きなクリスマスツリー。そして、メインは、エイ子さんが飾り付けた9個の生花。近隣の花・草木で見事に生けられている。花瓶は、夏に玉城焼で作ってもらったもの。真ん中に西洋ろうそくをたてる。見事だ。今年は、我が家のレモングラス・ティートゥリー・セージを煮立てたものを大きな花瓶に入れて、会場いっぱい香を漂わせる。
- 9) ステージが高すぎるので、我が家からもってきた大型テーブルで「出舞台」とでもいうべきものをつくって、そこでソロを歌ってもらうことをもくろんだが、結局は私だけがそこで歌った。結構気分が良かったが。

こんな小さな集落だが、すごい催しができたもんだと、皆で喜び合う。

右写真は、私が早春譜を歌っているところ。
上写真は、恵美子が「愛のテーマ」を歌っているところです。



9～10月

第3回中山音楽の夕の練習

昨年に続いて、開くことになった。

昨年のスタイルを引き継ぎながらも、今年の特徴もある。

その一つは、合唱団の一人ひとりがソロで歌うプログラムを盛り込むことだ。

****影の声・・・一人ひとりの個性が強すぎて、合唱レベル向上がゆっくりとした歩みなので、独唱させるのも一案だろう。****

ということで、全員の曲目も決まり、ひたすら練習である。

私の話——早春賦を歌う。練習時、うまくいくときといかないときがある。困ったことに、私がうまくいったと思ったときに、指導者が困った顔をする。指導者が「うまい」といったときは、私うまくいかなかったと思うことだ。要するに、私は、自分のでき具合がよくわからないのだ。リズム・音程ともに、だ。

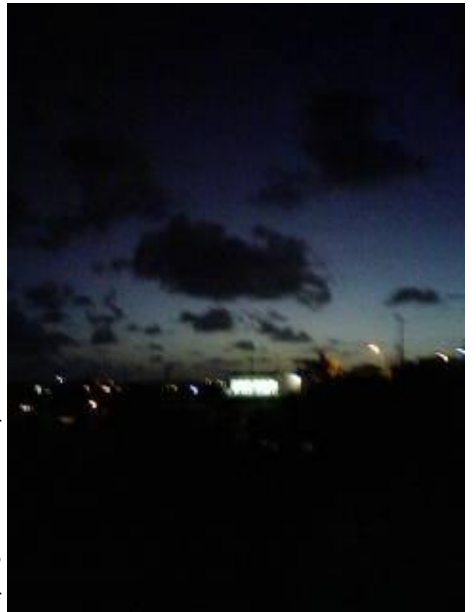
私と指導者の苦勞の旅は続く。うまくいくかどうかは、当日次第だ。

他の方も、その人なりに楽しみ、苦勞している。ちなみに予定曲を紹介しよう。

この道 愛のテーマ ゆうなの花 未来 箱根八里

毎回、中山の方ばかりでなく、近隣からもお見えになるが、今回は他府県などからも「ツアー」を組んでこられる方がいる。私は「もの好き」と思うのだが、いろんな出会い、そしてドラマがあるのは、これまた楽しいことだ。

上写真は、練習会場の中山集落センター。夕暮れ時



8月22日

50年ぶりのハーモニカ

恵美子にそそのかされ、ハーモニカを買いに行った。売っている店を探すにも一苦勞。美栄橋駅近くの高良楽器店で数十種類の商品を発見。ベテラン店員のアドバイスを受けながら、写真のハーモニカを選ぶ。

楽譜も沢山。ハーモニカ特有の数字楽譜が健在。感動だ。

帰宅して吹いてみる。50年前のカンがほぼ残っている。いくつかの技法も磨き上げれば行けそう。

小学生時代、かなりはまっていて、舞台演奏をしたこともあった。

8月5日

カラオケに行く

昨日、台風接近対策の農業作業のための合唱団中止があつて、少々欲求不満。そのため、恵美子とカラオケに行く。

合唱団で練習している曲も含め、たくさん歌う。二人で2時間だと、一人20曲ぐらい歌うことになる。こんなに歌に親しむのは、生まれて初めてだ。

昨晚のNHKで新垣勉が歌った「サトウキビ畑」は、わが合唱団でも練習中。そこで、今日も歌う。

5月12日

豊年祭に向けて、中山合唱団の練習

5月24日午後。中山集落センター。

女声合唱「愛の讃歌」に挑戦。

他に「サンタルチア」「ふるさと」など

私は「見上げてごらん夜の星を」



5月3日

中山合唱団、カラオケで盛り上がる

いつもの合唱団メンバーで、一日橋「トマト」にいき、カラオケをする。

おいに楽しむ



4月1日

三重唱への挑戦 音程はずれに苦しむ私

中山合唱団は、毎週火曜日の練習が続いている。いまは、「四季の歌」の三重唱に挑戦している。男・女低音・女高音の三部である。

以前に「荒城の月」の二部合唱に挑戦したが、うまくいかなかったので、再挑戦だ。「荒城の月」よりは、やさしい曲を、指導者が選んでくれたのだ。

私は時々音程がはずれる。しかも、いつはずれて、いつはずれていないのかが、自分では分からないのだ。だから、運を天に任せる感じだ。

家で、ピアノに合わせて、音程をとる練習をくりかえす。少しずつはよくなっているらしい。ここまできたからいいか、と思うと、指導者はより高いレベルへの挑戦を指導する。

ふりかえてみれば、成長してきたと思うが、この先、どんな風になっていくのかがイメージできないので、どのくらいのレベルになっているかが、わからない。だから、多少は不安である。

そんな調子なのに、我が合唱団員の注文・夢は高い。独唱希望もどんどんでてくる。シュガーホールで歌いたいという要求もある。なかには、冗談だが、カーネギーホールでやりたいという声もでてくる。

高齢者合唱団なので、音楽の世界の「世間知らず」で、「向こう見ず」なのだ、と思う。

それにのっかかって、私もやっている。

2008年

2008年12月23日

中山クリスマス音楽の夕

練習風景

12月23日夕に「中山クリスマス音楽の夕」が開かれるが、それに向けて「猛？練習中」。この日は、子どもたちのピアノ発表もある。

楽しい夕べになるように、いくつか趣向もこらそうとしている。



プログラム

中山は70余戸230人の小さな集落。それでも張り切っている。

23日の5時30分から、中山集落センター（公民館）で、クリスマスコンサートをする。プログラムができた。

子どもたちのピアノ演奏 6名9曲

県立芸術大学学生の本格的ピアノ演奏 ベートーベン バッハ ラフマニノフ

中山合唱団のクリスマス賛美歌6曲

加えて、プロの独唱というサプライジングもうわさされている。

終了後は、持ち寄りのミニパーティ。プレゼント交換の企画も検討中。

中山合唱団は、できて2年あまりになるが、10月の半島芸術祭 in 南城にひき続いての登場。少しずつはうまくなってきたと思う。私は、合唱に出るとともに、演出めいたことも少しする。

中山内外のご希望の方はどうぞいらしてください。無料です。少しだけパーティの食べ物（そして、手作りか300円以下のプレゼント）をもってきてくださるとうれいなあ。無料にしては、いい音楽が聞けそうだと私は思う。70代から7歳まで幅広く、輝かしい過去と将来、そして充実した現在をもち、本格的な芸術家からずぶの素人まで、バラエティに富んで、楽しい夕べになりそうだ。

ご希望者は、合唱団員など関係者にご連絡ください。このブログのコメントでも受け付けます。



会場を飾る生け花 (左写真)

こんな生け花、そしてろうそくをいくつか置くつもりです。

準備作業

いよいよ今日は当日。昨晩は、合唱・ピアノ最終練習。会場設営。キャンドルサービスなどのリハーサル。ミニパーティの食事づくり。などなど。

合唱は、もともとズブの素人ばかりだが、回を重ねて、なんとかやってきたという感じ。今回はクリスマス向けの賛美歌ばかりだが、いろいろとアクセントがついている。

キャンドルサービスもいろいろと準備している。10種類くらいのキャンドルを用意した。大きなクリスマスツリーも飾られた。



子どもたちのリハーサル

いよいよこれから、23日に開かれた中山クリスマス音楽の夕べのデジタル写真を連載します。



といっても、照明を落とし、遠距離から写したものをさらに拡大しているので、鮮明さの不足があることをお許しください。

左は、直前のリハーサル風景です。ピアノ演奏を終えた後、子どもたちがそろってあいさつする場面です。左側は、司会者 下には指導者

キャンドルサービスの打ち合わせ

今回の演出のメインの一つはキャンドルサービス
ピアノ演奏をする6人の子どもが、参加者全員にキャンドルを点火する。

安全を考え、また美しくするために最後の打ち合わせ。

メインテーブルの上には、生け花。そして多様なロウソク。そして大きな壺のなかには、ティートリーとレモングラスを煮出した汁。これで会場全体にいい香りを広げた。





クリスマスプレゼントの番号付け

演出のもう一つは、クリスマスプレゼント交換。参加者が手作り、または300円以下のものをもってきて、それをくじ引きで交換する。その番号つけ作業。

実にいろいろなプレゼントが集まった。

Tシャツ 石鹸 飾り

傑作の一つは、サヤインゲン 中山ならではの、だ。

パーティで交換をしたが、いろいろと楽しい風景。子どもた

ちがとくに興奮状態だった。もらってプレゼントを交換しあう風景もあった。

開会

いよいよ開会

最初に区長あいさつ

このあと、演奏にはいる予定だったが、6時に市役所からの「6時の放送」が流れて、演奏を中断することになってしまうので、演奏開始は、この時報の後、ということになった。

まさにこの地域ならではのことだ。



子どもたちのピアノ演奏

小学生から中学生まで、集落センターでのピアノ教室の成果を発表

一人ひとりの特徴を司会が絶妙の紹介

前回は、緊張の余り、途中でストップしたり、やりなおしたり、テンポが早すぎたりなどもあったが、今回は、練習の成果、そして慣れてきたこともあってか、みんな堂々と演奏していた。





2組連弾姉妹のあいさつ
2組ともなかなか息があった演奏

最後に全員であいさつをし、クラッカーを鳴らして、雰囲気盛り上げる。



本格的ピアノソロ演奏と独唱



本格的ピアノソロに、みんながうっとり
ピアニストは、パーティ最後まで、みなさんと交流し
楽しんだ。私達もうんと楽しんだ。

その次は、ホワイトクリスマスの独唱。指導者の独唱
で、伴奏は、ソロでピアノを弾いた方
中山は、なかなかの芸術家が住んでいるのだ。

中山合唱団

プロのソロのあとは、素人の私達の合唱。クリスマス賛美歌シリーズだ。



今回の練習は、10月の半島芸術祭 in 南城のあとから行った。短期間だったが、ムードは盛り上がった。途中には、ソロも何人か組み込む。ゲストメンバーとして、ピアノのソリストと、滞在中の私達の娘夫婦も加わった。



最後は、「聖夜」をキャンドルサービスしながら歌う。会場参加者全員もキャンドルをもちながら、歌う。

下写真は最後の合唱「聖夜」で、キャンドルサービスをしながら、歌っている場面



ミニパーティ

音楽のあとは、ミニパーティ。

前日から準備したおでんや差し入れに舌鼓を打つ。

演奏だけでなく、準備活動にみなさんたくさん貢献。食事の準備、会計、生け花づくり、キャンドル準備、司会、パーティ運営などなど。私は演出を担当した。

楽しいあいさつ、乾杯の音頭、そしてプレゼント交換。ユンタクが2時間も続く。
充実しすぎるほどの夕べだった。



司会者 ピアノソリスト 歌のソリストの談笑。ご苦労さまでした。





10月

夕方コンサート

我が家も、半島芸術祭 in 南城の1会場となる。
井上靖コンサートをする。伴奏は、塚田ゆきなさん



左写真は、アンコールのオーソレミオ

9月

中山合唱団練習風景

本番まで20日。4人の見学者も。

そして、団員の隣人のお家の犬までも見学。

とっても可愛いこの犬、自分で飼い主がいるところを探し出して登場。

隣家といっても、ちょっと離れているし、会場は我が家のとてもわかりにくいところであるので、どうやって気づき、そしてどうやって場所を探し出したのか、皆で不思議がった。ほんのわずかな音を聞きあてたのか。それでも、締め切ってクーラーをかけて練習していたので、音が届くのだろうか。それとも匂いなのだろうか。

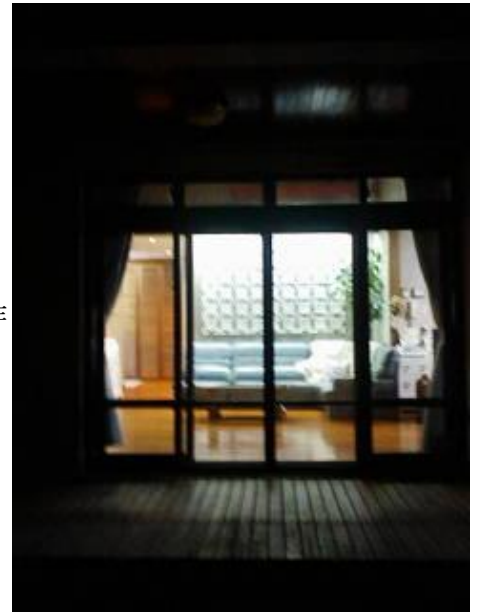


6月

合唱団反省会

右写真は、隣家の美しい夜景

5月末の豊年祭での合唱の反省会 実のところは夕食会アンド飲み会。
会場の隣家の芝生でえんえんと12時まで。その芝生の庭から写す。
家の中央に写っているのは、大型パッチワーク「さざなみ」。プロの作
品だが、光が反射してうまく写っていないのが残念。



中写真は、合唱団指導者自ら、おいしい料理を作る。
カルボナーラアッラペンネ



5月

中山豊年祭で歌う中山合唱団



5月

二部合唱に苦闘する私

25日日曜日は恒例の中山豊年祭だ。そこで、わが中山合唱団の三度目の発表となる。今回は「荒城の月」の二部合唱に挑戦である。2月から練習に励んでいる。

そこでの焦点は、私の音程がはずれないかどうかであることは、合唱団内部での一致した見方である。斉唱や独唱と比べると、なかなか難しいのである。私の数十年の難しい課題だ。

私自身もいろいろと練習するのだが、なかなかうまくいかない。そこで、いろいろな作戦を考える。しっかりした人の側にくっついて音程をなんとか確保する作戦が一番だ。しかし、ここにきて頼りにしていた人が当日でられないことになり、「深刻な」事態に。そこで新作戦、出だしは音を出さないで、音程をつかめたところで、歌いだす、という作戦だ。

さて、当日うまくいくかどうか。まさに「清水の舞台」の気分である。

当日は、私たちの中山合唱団だけでなく、メンバー外の「青年」（平均年齢50歳だが）合唱団、そして女性合唱団も当日出演。それをわが中山合唱団がサポートするという。両合唱団が歌う曲目は、我が中山合唱団の前回発表の際のレパートリーであったからだ。

さて、この私がうまくサポートできる一員になれるかどうか。原始的ないい方だが、「あとは気合」しかない。

2月

井上靖歌う

我が中山合唱団指導者ついに歌う、中山体育大会結団パーティで





1月

中山合唱団コンサート 信じられない盛り上がり

27日、中山集落センターで、中山合唱団、そして中山ピアノ教室のコンサートがあった。人口200名あまりの小さな集落の公民館に70～80名の方々が、もしかすると、100名くらいかもしれないが、集まって、大変な盛り上がりとなった。まさに「想定外」。

私たち合唱団は、指導者井上靖のすばらしい指導のもとにつくりあげた1年半の成果を発表した。曲目は、「ていんさぐぬ花」「故郷」「涙そうそう」「芭蕉布」「アメージンググレイス」「千の風になって」である。そして、ソロで「見上げてごらん夜の星を」「サンタルチア」である。

日頃の練習の成果を発揮して、いや、日頃以上の成果を発揮して、歌いあげた。私も合唱の他に、ソロで「見上げてごらん」を歌った。

一年半前に、私の集落にいるすばらしい歌手・合唱指導者の井上靖さんに、合唱を習いたいと依頼したことがスタートであった。全くしろうと、しかも指導者以外は中高年齢者である。このメンバーでよくぞここまで来たものだと思う。

それに集落センター、つまり地域公民館での発表会である。聴衆は、地元住民たちばかりである。それだけに雰囲気はとってもすばらしい。近隣の集落からの参加者から、「中山は、～～という話ばかりだったが、こんなにすごいことをやるなどとは信じられない」という声を耳にした。こんな小さな目立たない集落が、すごいことをやっているという印象なのだ。

終了後の、懇親会は大変な盛り上がりである。参加者の突然の歌唱が続いた。日頃、歌とは縁がなさそうな方々を含めて、突然の即席女声合唱団、男声合唱団の歌声が響きわたった。合唱団員がふえそうな気配である。集落外以外からも入りたいとの希望が寄せられている。

地味な中山が、新しい胎動を示しているのかもしれない。
中山に声援をください。

上写真はコンサート終了後即席男声合唱団
大受け 中山を担う頼もしい方々

右写真は、即席女声合唱団
入団希望者が出そう。



2007年

8月30日

カラオケ

娘夫婦とカラオケにもいった。いつもは二人だけでいくので、忙しいが、四人だとゆったり歌えていい。いつもは曲選びに忙しいが、今回は分厚い本から選ぶ作業なしで、思いつく歌を選んだ。

ふと気づいた。中山合唱団でのレパートリーを恵美子とともに歌う。練習成果がでてきているようだ。娘夫婦にほめられる。歌や音楽でほめられるのは、初体験に近い。娘夫婦も、とくに彼氏は音楽をやっていたこともあって、うまい。合唱団での指導者のとともうまい指導が反映しているをつくづく思う。この年齢になって、歌に開眼した感じである。

二人、四人の合唱になった曲も多かった。楽しい「夏休み」最後の行事となった。

10数年前までカラオケ大嫌いの私が大きく変わってしまった。

5月

中山豊年祭で中山合唱団の発表

27日恒例の中山豊年祭が開かれた。その「余興」のなかで、我が中山合唱団の最初の発表を行った。「ていんさぐぬ花」「故郷」「千の風になって」「芭蕉布」の4曲である。

昨夏、ちょっとしたことをきっかけにして、この合唱団ははじまった。集落住民で合唱しろとがほとんどだが、すばらしき合唱指導者の力により、ここまできた。はじめのころ「冗談」のつもりでいていた豊年祭で発表が本当になってしまった。

まだ体調芳しくない私であったが、こんな機会を休むわけにはいかないと必死に参加し、歌った。出来ばえはいかがであったろうか。

他の余興も例年よりもまして充実した感じがしたが、私はそうそうに失礼してしまった。

今後ますます興味深い展開になることを期待したい。

4月

中山歌う会 歴史的デビュー予行演習

昨日夜、中山区の新旧三役歓送迎会で、中山歌う会は、5月豊年祭でのデビューの予行演習をした。聴衆50～60人前で、8人のメンバーは多少の緊張・もつれはありながらも、見事に歌い終わった。聴衆もみんな身近な人ばかりだが、合唱をこの集落センターですること自体が画期的であったこともあって大受けであった。

歌う会加入の問い合わせ・相談も何人かあった。

5月からはじまる集落センターピアノ教室も予想より多い申し込み者があって、私は補欠扱いとあいなった。こんな動きは、中山に長年住んでいる方々にもインパクトが強く、その晩の飲み会は、いつもよりはるかに多い人数で遅くまで盛り上がった。

そのなかでは、長老より、ここでも芝居が行われたとか、いろいろな歴史が語られ、今、新たな歴史がはじまろうとしているという印象を強く受けた。また、これからの農業の話とか、子ども・若者のこととか、いろいろと話の花が開いた。

楽しみである。

私はこの二日間にいろいろなことが集中して疲れてしまい途中退席したが、夢のなかまで、集落でこんなことをしたらとか、ということが登場してきた。その一つは豊年祭に出店があったらなあ、という夢だった。

歓送迎会の乾杯の音頭で、集落重鎮女性から、もともとの住民と県内外から移住してきた方々との協力融合のなかで、新たなものが生まれつつあるとおっしゃったが、そのとおりだと思う。

美術工芸

2013年



8月16日

イチハナアートプロジェクト

14日、三世代家族7名で出かける。

立派な元伊計小中学校校舎を中心にあくさんの美術制作作品が並ぶ。

まず目につくのは、102歳の長寿を全うした東江ツルさんのいくつもの大型人形だ。最大のもの、上の写真のように校舎のひさしに座っている。そして、元運動場の駐車場中央にも座っている。

そして、教室展示のなかにも。

親しみやすい。親しみやすいのはツルさんだけでなく、作品の多くがそうだし、展示のありようそのものがそうだ。

学校の教室だけでなく、今は住み手がない民家の庭にも展示されている。

下の写真は、その一つで、寝転がっている人が日時計になっている。



んでいた。

対応する係員も若々しく親切に対応してくれる。民家展示物を見に行く時も、クバ傘を貸してくれる。教室の中には、地元産品のお菓子、飲み物が販売され、カフェ風の教室もある。教室からの島風景や海風景などの景観が素晴らしく、「海辺と民家のカフェ」伊計小中学校と云った感じだ。

芋などで地元の人が作ったお菓子、そして芋そのものを安価で販売している。いくつも購入した。

この会場には、9月以降もいくつも予約・計画が入っているそうだ。こんな素晴らしい教室・景観なら、うまく運用すれば、一大拠点になるだろう。伊計島おこしを期待したい。



齋木喜美子さんのお菓子で作った作品は、新聞にも掲載された。右下の写真がそうだ。

こんな親しみやすさなので、小学生の孫たちも楽し



2012年

9月7日

大城清太の天描画

5日夕、二つの所用間のスキマ時間に県立博物館美術館訪問。

天描画の展示があるという話を知人から聞いたからだ。最近、孫たちが描いていたこともある。

会場に着いて、大城清太さんの天描画であることを知る。

彼と彼の天描画との付き合いは、私が玉城に住んで以降だが、年に一回ぐらいは出会う。去年は、我が家までおこし頂いて、ユンタクした。

会場に着くと、数十人の方が、彼の説明に聞き入っている。それだけ、彼の画は魅力的だろう。私も最初に出会った時の衝撃を覚えている。

同じような作品に見えるかもしれないが、私が拝見した期間での作風の変化も著しく、それがまた印象的で魅力的だ。

今回の作品は、彼のおばあちゃんが語っていたという、地球とのつながりをまさに感じさせるものだ。

気付いたことを並べよう。

- ・円が一つのモチーフだ。地球と言うことがあるかもしれない。
- ・円は閉じられていない。円への入り口があり、出口がある。人と地球との躍動的なかわりあい、といったところか。
- ・エネルギーが強い。以前のような荒々しさ・若さを伴うというよりも、多少「熟」を感じるものだが、なおかつ、なにかに「収まりきれない」躍動・エネルギーだ。
- ・子ども(幼児)、龍、クジャクの尾羽など、描かれているいろいろなものが、安心と流動の双方を感じさせることが多い。
- ・画と向き合っていると、いろいろな物語が生まれてくる。



6月

原研哉「日本のデザイン」(岩波新書2011年)を読む

フィンランドに長期滞在していると、街の至る所にデザインというものを感じるようになる。デザイン博物館などの施設も多い。ひるがえって、日本のデザインはどうなんだろうか、と考えてしまう。愛知に住んでいた頃、豊田あたりをよく行き来したが、立体交差する道路たちが景観デザインには縁遠い人工物という印象だったのを思い出してしまう。豊田に限らず、都市景観がおかしくなっているところにしばしば出会う。最近では多少の反省があっただけか、デザインが考えられ始めたのだが。

といっても、私はヨーロッパのものに親しみを感じてばかりはいない。ベルサイユにしろ、ウィーンにしろ、宮殿の幾何学的デザインは好きではない。

自然を生かして自然とともにある、というデザインが好きだ。最近の南城市のオープン・ガーデンなどを見ても、多様なガーデンづくりがあるのだが、好きなタイプとそうでないタイプとがある。「自然と闘う」ようなもの、「あふれかえる」ようなものは、余り好まない。

そんなことを勝手に考えているのだが、デザインの本などは一冊も読んだことがない。そこで、まずは入門と思って、本書を店頭で見つけて読んだ。少しばかり紹介コメントしたい。

1

著者は、日本のデザイン、とくに工業デザインといわれるもののこれまでの特徴について、次のように書いている。

「戦後の日本が得意とした工業生産は「規格大量生産」、つまり均一にたくさん製品を作ることとをきわめて安定した水準で達成することであった。また、製品を小型化する凝縮力のようなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功した。日本の生産技術は、量を前提とした品質と、緻密さや凝縮性を工業製品として体現した結果、世界からの高い信用を獲得したのだ。

しかしながら、ここで言う「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔にものづくりを遂行することであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。」 P 4～5

この「繊細、丁寧、緻密、簡潔」ということがくりかえし書かれている。そして、デザインを考える際に必要な生活や文化との関わりの重要性について、次のように書く。

「日本は多くの工業製品を世界に輸出する工業国であるが、その生産物がいかなる文化を育むかという視点でものを考え、表現することが少ない。文化は美術・芸術のみに根ざすものではなく、生み出される製品からどんな暮らしや営みが芽生え、またそれがどのような生活環境を育てていくかを見定めて提示していくことが、世界の未来に影響を持つ。」 P 10

「そのためにはまず、自分たちの作り出すものの文化的な意味についての多角的な考察やヴィジョンが不可欠になる。」 P 10

こうした考えをベースにおいて、今後の方向性について、次のように提起する。

「ものの生産においては、量よりも質へと、はっきりと重心をシフトしていくことを考えなくてはならない。さらには、工業生産と同時に、恵まれた自然環境にも目を向け、サービスやホスピタリティの局面にも資源としての美意識を振り向けていくことが重要である。そうすることで、自然をハイテクノロジーと感性の両面から運用できる、新しいタイプの環境立国として日本はその存在を示していくことができると思うのだ。」P7

これらの指摘に私は共感する。

2 デザインと生活の思想 「作ると同様に、気付く」

以下の引用には、私のこれまでのデザインについての認識を越えた、興味深い主張が見られる。

「デザインとはスタイリングではない。ものの形を計画的・意識的に作る行為は確かにデザインだが、それだけではない。デザインとは生み出すだけの思想ではなく、ものを介して暮らしや環境の本質を考える生活の思想でもある。したがって、作ると同様に、気付くということのなかにもデザインの本意がある。

(中略) 人間が生きて環境をなす。そこに織り込まれた膨大な知恵の堆積のひとつひとつに覚醒していくプロセスにデザインの醍醐味がある。普段は意識されない環境のなかに、それを意識する糸口が見つかっただけで、世界は新鮮に見えてくる。」P43～4

「漆器にしても陶磁器にしても、問題の本質はいかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである。漆器が売れないのは漆器の人气が失われたためではない。今日でも素績らしい漆器を見れば人々は感動する。しかし、それを味わい楽しむ暮らしの余白がどんどんと失われているのである。」P105

「ものを介して暮らしや環境の本質を考える生活の思想」「作ると同様に、気付く」「魅力的に味わう暮らし」といった主張には、感心させられる。ただ作るプロセスだけでなく、生活と結びついたものとして、あるいは生活のプロセスそのものがデザインなのだ、という主張は魅力的だ。デザインはデザイナーの仕事だけでなく、生活しているすべての人がかかわっているということなのだ。

とすると、生き方問題をテーマにしてきた私にとっても、視野に入れなければならない新たな課題を寄せられた、ということにもなる。

その課題が今日特に重要になるには、次のような問題が前面に出てきた、ということがある。

「日本も百年もつような建築が豊富に供給されるようになり、ようやく、その再利用という冷静なムーブメントが起こりつつある。見栄やステイタス表現のためなら大きくてぴかぴかの新品がいいのかもしれないが、用と対価のバランスを合理的に考えるなら、無理をしない範囲でより賢い選択をすればいい。すなわち、長く使う構造体(スケルトン)と、可変性のある内装(インフィル)を分けて考え、良質なスケルトンを吟味して入手し、インフィルを自分の暮らしに合わせて徹底改修すればいいのである。」P91

「暮らし方の異なる人々が、皆同じ間取りに住む必要はない。自分の身の丈に合った「住まいのかたち」を自由に構想すればいいのだ。集合住宅の外観は変わらないとしても、その内側にめくるめく多様性を育むことができるなら、それは豊かさでもあるはずだ。

日本人は明治維新以降、西洋文明の影響に翻弄され、関東大震災や敗戦のどん底を経験し、一方では世界にも稀な経済の成長や爛熟を経てきた。現在の日本はもはや均一なサラリーマンの国ではない。人々は自分と社会を応分に見つめ、働き方も、暮らしのペースも、興味も趣味も、ひとりひとりがその個性を自覚しはじめている。」

P 9 2

ここ数十年の人々の暮らし方、住まい方、生き方には、経済的成長を基盤にして、「豊かになっていく」「標準」に沿いながら、それにどれだけ合わせられるか、というテーマが強力に入りこんできた。そのため、結果的に生き方の画一化も並行した。

そうしたありようから自由になり、これらを個人個人が創造的に展開するありようへと転化することが求められる、あるいはそうすることができるようになってきた、ということでもある。そうした視野のなかで、デザインを考えるというのは、歓迎すべきことであろう。

3 量→質 大量生産・消費 醜い景観

従来の日本の産業、生産・消費のありように手厳しい指摘が続く。

「「量」から眺める産業ではなく、日本人がその深層に保持し続けてきた美意識を運用して、美の国としての「質」を運営していくことのできるヴィジョンを僕は提示したい。高度なテクノロジーも、結局は技術の上にかに高度な美意識や洗練を適用できるかによってその水準が決まってくると思うからである。」 P 8 4～5

「廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、さもないとそれを購入する時に考えた方がいい。もったいないのは、捨てることではなく、廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

だから大量生産という状況についてももう少し批評的になった方がいい。無闇に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴイスティックな成長意欲だけではない。所有の果てを想像できない消費者のイメージの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要でもないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。」 P 1 0 2～3

「経済を加速させていくために容認されてきた公共空間における奔放な商業建築や看板の乱立は、景観を慈しむ感覚を麻痺させ、日本人の感性の上にかさぶたのような無神経さと鈍感さを貼り付けてしまった。現代の日本人は「小さな美には敏感だが、巨大な醜さに鈍い」と言われるが、その背景がここにある。

茶の湯や生け花といった伝統文化、あるいは個々のデザインや建築に関してはきわめて高度な創造性や洗練を見せる日本ではあるが、その集積であるはずの景観が醜い。この傾向は都市に限ったわけではない。田舎もまた同じ問題を抱えている。都市に倣おうとしているところも、単に洗練に至っていない鈍重な感性も含めて、そう言えるのではないか。田舎にはたしかに、あふれるような自然がある。しかし殺伐とした風景にも数多く出会う

のだ。」P148～9

これらの指摘は、いずれもその通りだと思う。個々の限られた所に絞った美しさではなく、広い視野でバランスを考えながら、美を追求する。しかも長期的視野に立って追求すること。金を大量に使って、自然を加工して一時的な美をつくるようなありようから卒業してほしいものだ。

脱線するが、「借景」について述べよう。たとえば、家を建てる時、主として自然がつくりあげている既存の美をできる限り生かすのだ。我が家は、急傾斜地にあるが、造成工事をせずに、既存の森の自然を最大限に生かす方向ですすめた。雨の際に流れる水路もそのまま残した。立木は、建物敷地にあるものも移植で残した。工事関係者は大変な苦勞だったが、協力して下さった。

だから、我が家は、今も森の中にあり、動植物が多い環境だ。5～6月には、天然記念物アーマンを見ることが多い。

話は変わって、次のような記述も興味深い。

「このような場所に日本のファッション・ジャーナリズムは情報を得るために大挙して「取材」に行くのである。これがファッション情報の流れに上流と下流ができる所以である。だから、もし日本にずば抜けて優れたファッションデザイナーがいたとしても、日本で仕事をしていただけではその仕事は世界に知られることはない。力のある服飾デザイナーが、わざわざパリやミラノに赴いて仕事を発表してきた理由はここにある。そして、そういう状況を日本のマスコミは「世界で評価される」と言う。」P179

同じことは、クラシックやジャズなどの音楽でもいえそうだ。そして、国内でも東京に出ることが求められると言えそうだ。さらに学問研究の分野でも、その傾向があるといえよう。「地方の時代」と言われるが、そうしたありように変化が加えられるだろうか。新たな課題を探り創造していきたい。

1月4日

福木工房の首里織





一昨年の半島芸術祭で訪問した福木工房。長年にわたって首里織に打ち込んでおられたのこと。現在は、つきしろの街にある工房でお仕事をなさっている。ご主人は陶芸に打ち込んでおられる。

気にいって、注文した。お忙しいなか、1年余りかけて完成となり、届けて下さった。

1点はタペストリー風、もう一点はテーブルクロス風。上品で、使うのがためられる感じ。

2011年

8月

家族制作の自然素材装飾品

貝など材料集め 孫

穴開け 息子

制作 恵美子 嫁さん

撮影 私

合作の作品 お盆の記念品



6月

民泊高校生のフイアート作品

3人の協同製作。明るく健康なメンバーの個性がハモっている。

民泊の後半は台風で大変だった。それで、フイアート製作とあいなった。

民泊は、知らないもの同士が、そして、全く異なる年齢・文化・生活を持つものの出会いだから、驚くような発見の連続だ。

久しぶりに、大都市圏の若者の雰囲気を感じた。

台風だったが、無事帰ったことだろうと思う。



2010年

11月12日

南城の工芸・芸術・芸能 フログ記事の振り返り・再発見

2007年のブログスタートから2008年末までの南城の工芸・芸術・芸能というと、何といても半島芸術祭 in 南城の記事だ。恵美子も含めて近隣の女性が主催して、隣家と我が家で行ったものがその一つだ。恵美子などは素人だが、「ブイアート」を飾った。他の方は、パッチワークをはじめ、素晴らしいものを飾った。私も新鮮ハーブを提供した。大変な賑わいだった。

そして、私は、この年の芸術祭では、30余りの全会場を訪問して楽しんだ。人口4万の小さなところによくぞこれだけの芸術家・工芸家があつまっているものだ、と感心するばかりだった。

陶芸などは、芸術祭参加不参加を問わないで数えれば、10余る陶房がある。しかも皆個性的だ。超ベテランで名の知れた方から、新人とも言うべき人たちまで様々だ。まとまって「南城焼」といったものがあるわけではなく、作風は実に多様だ。これだけ多種の人たちが集まっていて、年数が重なっていくと、かなり注目できる世界が生まれてくるのではないかと期待する。

陶芸を含めて、工芸関係は、ここ10年、20年の歴史のものがほとんどだが、芸能関係は、戦前来の100年内外の歴史を持つものが多い。その多くは、シマ（共同体）の中で創造継承されてきたものだ。そうしたものが、青年芸能フェスタ、南城祭り、さらにシュガーホールの企画として継承され、現代に復活してきている。そして、それらは、伝統的な遺産を受け継ぎつつ現代的な創作としても展開している点に注目する必要がある。

南城に限らず、沖縄の芸能音楽工芸芸術は、歴史的伝統を引き継ぎつつも、現代における創作創造に熱心であるとともに、それにかかわる人に、もちろんプロもいるが、たくさんの素人が参加していることに大きな特徴をみることができる。

そうしたものが、南城市誕生を契機に新たなステージに入ってきた。それが、2007～8年の特徴といえよう。

10月2日

我が家の美術・飾り・ブイアート フログ記事の振り返り

我が家で目立つのは、まずブイアート。海岸で拾ったブイを洗って、それに色々なものを描く。私は一個だけ描いた。恵美子は何十となく描いている。あちこちに置いて、我が家の強烈なアクセントになっている。

もう一つは、近隣の芸術家・工芸作家作品だ。たとえば、

我が家入り口の「浅野」入りのシーサー・・・玉城焼

クバ製の明かり・・・・・・・・・・・・・・・・小川京子作

布絵・・・・・・・・・・・・・・・・梅原龍作

キジムナーの絵・・・・・・・・磯崎主佳作

私の机・・・・・・・・・・・・・・・・木創舎

他にも、クラフト陶K'sをはじめとする陶芸作家作品、木作品など、いろいろある。いずれも、顔見知り
 というか、直接本人から購入したので、特別価格だ。

近隣の工芸・芸術作家を育てる意味でも、皆さんにお薦めしたい。

飾りの中で、私の自慢は、ふくろうコレクションだ。10年ほど前からはじめ、今では十数個になった。

どこの家でも、旅先の土産などを買ってくるが、置き場に困っている。これは恵美子のアイデアだが、建物を作る際、普通なら、階段通路で「使用不能」になる場所に、置き場を作ってもらった。お陰で、せっかくのものを押し入れにしまい込むことなく、楽しんでいる。



9月2日

恵美子の新作フイアート

以前ほどの数ではないが、描き続けている
 だんだん洗練されてきた印象を受ける

8月

我が家にある小川京子クバアート作品を

撮影するプロカメラマン

東京画廊に見せるために、ということだ。
 カメラマンは平良俊雄さん





5月26日

小川京子作クバ オブジェ「創造 の始まり」

我が家の階段踊場
美術スペースにセッ
ト

小川さんの特別制
作

一カ月ほど前に話
が盛り上がり、早速実現。



大きさタテヨコ1メートル以上のでっかいもの

作品の裏側には、廊下の元々の照明器具がある。左の写真は、その照明を消して撮影してみた。

オブジェの左側には、窓を通しての外からの明かりが映っている。

1～2月

恵美子新作ファイアート

このごろ海岸に流れつくブイが減って、作品製作も減っている

右下のテーマは、海と橋。どこに行く橋だろうか



2009年

10月

フイアートの展示**半島芸術祭**

半島芸術祭に向けて、境界壁の上に小さな珊瑚岩をくっつけて、フイアートを支えるものを設置する。

そこに並ぶフイアート。すべて恵美子作品



9月18日

小川京子作「フツダのこぼれ種」

快気祝いでいただいた。

小川さんは、著名なバスケット制作の芸術家。この5年親しく付き合っている。30年以上前、私の授業をとったそうだ。お兄さんは、恵美子のクラスメイトだ。

芸術制作話を沢山聞く。

8月 中山 親子でフイアート描き

海岸で流れ着いたフイを集める。半島芸術祭 in 南城に向けて、中山の親子たちが中山集落センターで描く。白く塗ってから描く。



8月12日

みんなで描くフイアート

子・孫たちと
クワガタ
おうち
踊っている人
太陽
子ども
……



3月

漢字を描く 恵美子のフイアート

これまでと異なって、漢字を描くことに挑戦した。

3月

私の作品

アクリル絵の具を、透明なビニール紙の上に置く。それを適宜散らしたりしながら絵にしていく。

背後に和紙を置いてみた
恵美子がアドバイザー





私のフイアート初挑戦

恵美子の勧めで。

以前に私が見つけたデカイブイに、まず下塗り
この後どんなになっていくでしょうか

上中が片面。見た人の印象の言葉。

キャッチボール。 抱く 包む
・・・いろいろできそうだ

右上がもう一方の片面

片面が、抽象的なのにたいして、こちらは具体的

海・空・大木・太陽・雲・鳥 など



2009年1月

フイアートがある我が家玄関

両脇と正面にブイアート

恵美子は私にもブイアートを描けというが、まだだ

1月

思い出の絵

インドネシア光景

我が家にある美術品を紹介していこう。

最初に、この絵。思い出多き絵だ。カナダのトロントにいるときの友人が描いたもので、かれとは今もメールを通して交流している。

彼はインドネシア生まれ育ちで、芸術系の大学を出て、ストリートチルドレン支援のNGOに深くかかわる。

その活動周辺で出会ったカナダ人と結婚し、トロントに住むことになった。

私達がトロントから離れる直前、かれから長いメールがきた。インドネシアにいる人たちと連絡を取り合ううえで、ファックスが必要だが、経済的に新品を買うゆとりがないので、あなたたちが引っ越すときに置いていくファックスをゆずってほしい。その交換に自分の作品をさしあげる、というものだった。

私は以前から、彼のこの絵が気に入っていたので、無条件に承諾した。

今もかれは、トロントとインドネシア、とくにバリと行き来をし、バリでの恵まれない子どもたちのための教育活動を展開する大きなプロジェクトを追求している。



バリへの行き帰りに日本にも立ち寄ることが多い。一度、中京大学の特別講座で、ワークショップをしてもらった。その時に、かれは「リレーお絵描き」をした。それ以後、私もリレーお絵描きを、私流にしばしばおこなっている。

桃源郷のような雰囲気をもちつつ、何かを求めている絵、といった感じだ。

我が家辺り

この絵は、同じ作者が、我が家に滞在したときに描いたもの。

かれが、中京大学でワークショップをした時に、我が家に滞在したが、そのホームステイのお礼にということで、我が家周辺のイメージをもとに描いた。

当時の愛知の我が家の、森に近く、というか囲まれている

雰囲気もこの絵にも投影しているかもしれないが、むしろ、下に書く現実のほうが鋭く投影しているだろう。その愛知の家の周辺も宅地開発が進み、以前とはかなり変化しているが。

その当時、彼は、バリでの子どもの教育にかかわるプロジェクトを準備していた。日系企業などが、独身の若い女性を雇うというので、独身女性を装うために、子どもがいないことにみせる結果、子どもたちが路頭に迷う事態がでていたという。そうした子どもたちに向けてのプロジェクトに取り組んでいたのだ。

訥々と英語を話し、穏やかな「やさしいおじさん」の雰囲気をもつ彼だが、かれが取り組む課題は厳しい現実のなかにある。そんなイメージが、この絵にも映し出されているのだろう。穏やかで豊かな自然のなかに、厳しい社会現実がさしこむ一方、それに取り組む姿もある、といった、複雑な世界が描かれている、と私は勝手に推測する。

彼の商売感覚は鋭くない。それで私たちが、懇意にしていた近くのギャラリー式のカレー店で、彼の個展を開くことにした。そこで、彼の絵が売れた。彼にとっては画期的なことだった。

その個展の絵のなかにもいい絵があったが、この絵を私が気に入った。どれか一枚をあげるといっているので、この絵を選んだら、彼は惜しそうにしていた。描いたばかりだったが、思い入れが強かったのだろう。



ネパールのポカラ近郊

ポカラ在住画家の作品。12年ぐらい前、ポカラ一人旅の折購入。2000円ぐらいだったか。

山はマチャプチュレ。人気の山だ。

購入したが運ぶのが大変で、枠をはずして日本に持ち帰った。

はずしたまま、10年あまり眠っていたが、最近それを取り出して、自分で枠をつくって、書斎に飾っている。



裏磐梯

写真家になった卒業生の作品

中京大学に転勤して間もないころのゼミ生の話だ。

彼が写真の世界に深く入り込んでいるのを知って感動し、当時もっていた私のカメラ一式を寄贈した。

1980年代を通して愛用したカメラ・交換レンズ2個などだ。

その彼は中途退学したが、何年かして愛知県美術館で

個展をしているのを知り、私は訪問した。なかなか素晴らしい写真だ。その折に、この写真を購入した。福島県の裏磐梯を写したものだ。

その彼が、プロの写真家としての道を歩み、いずれ北海道を拠点で活動するという話を聞いた。

その後、再び何年かして、私が北海道に講演・ワークショップにでかけた折に再会した。

元気で活躍している。写真ばかりでなく、近隣の小学校にもかかわるなど、多様な活動をしていた。その折にとっていただいた写真が何枚か、私のホームページを飾っている。

卒業生が多様な分野で活躍しているのを見るのはうれしい。

学生たちにプレゼントされた沖縄の絵

1990年春、私は琉球大学から中京大学へと転任した。1988年入学の学生たちの指導教官をしていた私は、この学年の学生たちと2年間、いろいろなドラマをつくりだした。

そんな思い出の学年だ。受験戦争の厳しさが増すなかで入学してきた学生たちで、それだけにいろいろな世界を知り、教職への前向きな楽しい世界を、遊びつつ体感していく、そんなことを願って、いろいろな活動をした。その学生たちが、私の転任をとっても残念がってくれた。

ということだろう。沖縄を忘れないで、という意味をこめてか、沖縄の景色の絵を記念品として贈ってくれた。

学生たちだから予算はそれほどないと思うので、相談して思い切って購入したと思う。

この学年の学生たちとは、その後何度も会った。多くが教員生活と子育て生活に真っ最中で大変忙しい時期だろう。また、会いたいな、という気持ちに時々なる。

この絵の作者は、Tsuneyuki とサインされているが、どんな方なのか、存じあげない。もし知っている方がおられたら、教えてください。



2008年

11月

恵美子新作 愛を奏でる女

恵美子が、チェロを弾いている女性の姿にインスピレーションを得て、ブイに描いたものだ。

チェロを「抱いて」、恵美子にいわせると、ハグしながら弾いているところに「愛」を感じるという。

ところで、半島芸術祭 in 南城での催しで、ブイアートを買う人が初めてでた。その後も予約を含めて4個が行き先が決まった。スピリチュアルなものを感じた人たちのようだ。



ちなみに、値段は買う人が中心に決めたようだ。



10月

半島芸術祭で販売予定の

ブイアート写真

8～9月

海岸でブイアートを撮影する恵美子



このところ、恵美子は、自分が描いたブイアートを海岸にもっていて、写真にとることに勤しんでいる。

ブイアートは、部屋にあるとき、庭にあるとき、海岸にあるとき、各々の顔を見せる。

これが結構おもしろいのだ。



7月

下地敏一「宮古馬」

恵美子が購入した版画



2008年5月21日

恵美子が描いたフイを海に浮かべる

近隣の芸術家たちが、海岸のゴミを美術にしたものを海岸に展示するという企画を練っている。そこで恵美子のブイアートが眼にとまったようだ。



恵美子

も自分の描いたブイアートを海に浮かべてみたい、とちょうど思っていたところだった。

ということで、20日恵美子は海にブイアートを浮かべてみた。その写真だ。観音像だ。我が家にはブイアートがもう30余るほどだろう。

4月9日

梅原龍さんの布絵

昨日から我が家の仲間入りをした。山中の光景。山間に明かりがみえ、そこに天狗が翔ぶ。タイトルは、「空の山へ向かう」

光の反射の都合で、うまく撮影できない。折をみて、実物をごらんください。彼の個展の際に、テレビなどにも放映された作品だとのこと。

※ これより鮮明な写真を、「シリーズ南城物語2 南城の芸能・工芸・芸術」に掲載したので、ご覧ください。



2007年

10月6日

小川京子新作

私たちの友人小川さん宅訪問



8月26日

**グローブでフイお絵描き**

滞在中の娘夫妻と娘の友人と私達の合計5人でのお絵描き。美術教師である娘の友人が、家のあちこちにあるフイ絵に興味をもつ。

そこで、みんなで描いてみようということになる。このフイは、宮古島で恵美子が見つけて持ち帰ったもの。

左写真はその描きはじめの時。

左下はお絵描き中間場面。

右下は完成場面

絵の具はアクリルを使用。水に濡れても大丈夫だから、外に置いてもOK

5人思い思いに描く。私が一番「破壊」的だったようだ。

でも、さすが美術教師。うまくまとめていく。結構な作になったようだ。

私はワークショップで頻りにリレーお絵描きをするが、こんな風に、同時にみんなで描くのも結構楽しいし、いいものができる。きあがるようである。



8月

恵美子のフイ芸術

恵美子は海岸に流れついたブイを拾ってきては、それに絵を描いて、楽しんでいる。もうかなりの数になり、私も上達してきていると思う。

7月最終週の5日間、琉球放送テレビの「気ままにロハス」に私達の生活風景が放映されたが、そのうちの一日は、このブイ「芸術」を扱ったという。その日は、二人とも都合が悪くて見ていない。

いろいろなものを描いている。恵美子のイメージに浮かんだもの、仏像などさまざまである。

中右は、不動明王系である。フラッシュなしで撮影したので、暗く感じる。実際、迫力のあるものになっている。



下は、空海だ。





左上は、八咫鳥。

右上は、熊野の発心門王子を描いたもの

中右は、観音系である。ブイの下にフジツボがびっしりついて
いたのをそのまま絵にしている。





ここからは、庭に置いてあるシリーズとなる。
 実物をごらんになりたい方は、どうぞ我が家を訪問
 してください。



フクロウ

10年以上にわたって、集めてきた。記事写真にも、重複しているものがある。

そこで、作品ごとに配置しよう。

※ 年月は、記事作成時を示す。



ガラス製

はじめに、ガラス製を紹介しよう。右上が『全員集合』割れそうで、はらはらするが、透明感というか、輝きがいい。同じガラス製でも、全く異なる印象をもつ。中には、いただいたものがあるし、小樽で購入したものもある。

同じふくろうでありながら、趣が全く異なる。

(2013年11月)

スタンドガラスのふくろう

左は私のふくろうコレクションの新顔

先日の矯正展で購入したものだ。(2009年12月)



右は、小樽で5年ほど前に購入した。ガラス工芸品である。(2007年)





紅型製

我が家隣人の紅型作家當山雄二さんの作品だ。 (2013年11月)

右は、フィンランドで購入の写真。
Naturephoto from Finland by Jouni Riihela Nelmipollo Tengmalm's owl と書かれている。



下左と中写真のなかの左は、同じもの。
布製の壁飾り。布に染めてある。
京都の染色家紀田秀夫作。
ふくろうは「福を呼ぶ」というだけでなく、「不苦勞」をもじって、苦しまないという意味づけする人もいる。
最近、旅にでかけた折、時々「ふくろう」の工芸品を買う。10年ほど前、恵美子が、「福郎」というぬいぐるみ風の置物を買ってきて、「幸福を呼ぶ」ということで、自動車に置きはじめたのが、きっかけである。 (2007年5月)



陶器製・石製など

写真奥は、陶器製で夫婦と子ども2人の家族。

中央前は、何でできているか不明の本体の表面全体に、貝を貼りつけたもの。

右は、石製。写真角度を変えると、とても可愛い姿になる。

(2013年11月)

上写真の右下に写っているものを角度を変えて見る
(2008年)



ぬいぐるみ

二つとも、フィンランドで購入。右は、フィンランド製。左はスウェーデン製

この二つの国のデザインの違いがここでも表れているように思う。フィンランドの方がシンプルな印象。

二つともやわらかく可愛い。触ると、とてもいい感じだ。(2013年10月)

陶器製

後の二つは、フィンランドで購入してきたものだ。ろうそくで明かりを灯すことができる。小さな穴をたくさん開けてあり、点描画のようだ。

前の二つの購入先は、記憶がない。

すべて「これがフクロウか」と思うほど、デフォルメされたデザインだ。「かわいい」の一言。(2013年10月)



竹皮製

竹皮製だが、筍の皮製と言ってもいいだろう。

二つとも、とても安い値段で国内購入した。アジア製で輸入ものだ。

製品がしっかりしているだけでなく、デザインもかなり面白い。「お買い得」の感じだ。

一つは、よく覚えていないどこかの土産物店だが、もう一つ大きい方は、普通の土産物店でなく、高知の朝市という意外なところで見つけて購入したという記憶だ。

(2013年10月)

右下は、同じものを角度を変えて見る。

(2009年6月)



木製

もともと木製品が好きなので、よく購入する。総計で10点になってしまった。

左から紹介しよう。細かな穴が羽をあらわしている。この細かさが特徴。購入先は次ページ参照。

奥にある2番目は大きいものだ。なんと網走刑務所製だ。沖縄刑務所の矯正展で購入。

3番目の手前の小さなもの（2センチ足らず）は、近くの村山工房で購入したものの「おまけ」でいただいたもの。

4番目の中央のものは、2003年12月阿寒湖岬で購入したもの。これまた芸術品に近い。

5番目の奥のものは、半島芸術祭 in 南城で購入した地元製品。もう一品あるが、鉛筆立てとして使用中で、写真撮影しそこねた。

6番目の手前のものも、購入先を思い出せない。

みんな表情があって、素晴らしいものだ。（2013年10月）



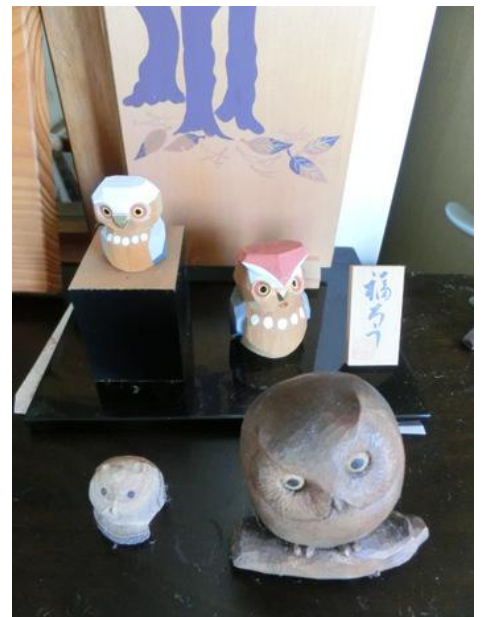
下の二つの写真は、伊予一刀彫のふくろう

3年前、愛媛に出かけた折、道後温泉商店街の南雲工房で購入。上品だ。横の名札には「福ろう」とある。フクロウは「福」をもたらすのだろう。道後温泉で購入。本格的作家の作品だけど手頃な価格。

これまた可愛い。最近では可愛いのが流行か。（2009年6月）



下右写真のなかの前の右側は、隣の字玉城の村山工房で購入。5, 6年前の半島芸術祭 in 南城の折。もともと那覇の出身で、北海道でも修業なさったとのことだ。穏やかな木彫り師という感じだが、品のある作品だ。（2007年ごろ）





左側のものは、残念ながら、購入先を思い出せない。(2013年10月)

右は、「2003.12.10 阿寒湖 栓」のサインがしてある。前ページでも紹介した。

釧路にでかけた折り、阿寒湖岬のアイヌ工芸品店で購入した。近くの店では、沖縄-アイヌ交流ということで沖縄にこられた方とずいぶん話し込んでしまった。



左は、この5月の連休に、木曾の奈良井宿で買った、一番新しいもの。

いろいろなものでつくられているが、木製が気に入っているので、我が家には木製が多い。

(2013年10月)

沖縄刑務所矯正展でふくろう購入

毎年この時期、沖縄刑務所で矯正展が開かれ、全国の刑務所で製作されたものが即売される。ほぼ毎年訪れる。今回の購入物その1は、木彫りのふくろう。網走刑務所の製作品。

全国各地の土産物屋でふくろうが売られるようになってきたが、その価格に比べると、1/3以下かな。

なかなかのものだ。今回は、ガイド付の施設内見学にも参加した。施設内の工場をみた。陶器、紅型、革製品などをつくっている。そして体育館、単独室の建物の外観、面会室などを見て回った。
(2008年12月14日)



高さ3センチのかわいいふくろう

左は、字玉城の村山工房作

リュウキュウコクタン(琉球国産)の枝でつくったとのこと。(2009年3月)

石製

石を素材にした彫り物は、多くない。

今回の二つとも、どこで手に入れたか記憶にない。

雰囲気のある大小の取り合わせだが、特に右側の大きいのが、私の好みだ。豊かな表情が魅力的だ。

(2013年10月)





左は、2008年ごろの撮影

下は、小さなもので、鈴になっている。



和紙製と炭製

下写真の右側は、数年前、鳥取で購入した「ひおき夢折工房」作品「ふう」

和紙の軟らかくほのぼのとした感じが魅力。



左は、「ポリレジン素材に液状備長炭（トルマリン入り）を二重にコーティングした」もの。素材も面白いが、形も面白い。

フクロウには、実に様々な素材のものがある。（2013年10月）

※ 鹿児島島の磯庭園訪問の時、お店で見つける。炭でコーティングしているので、きれいな黒だ。（2010年11月記）

陶器製

残念ながら、いずれも、どこで入手したか思い出せない。かなり以前のことだろう。

大きい方は、高さ15センチぐらいで、中にろうそくを灯すと、明りになる。渋いと言うか、ユーモラスと言うか、微妙だ。

小さい方は、フクロウ家族が並んで、木の枝にとまっている光景。(2013年10月)



手縫いのフクロウ

布製のものは、ふっくらとして温かみを感じる。

3～4センチ大で可愛い。

このうちの左中と左下の2対は、私が集めているのをお聞きになって、わざわざ手作りされたものをいただいた。

右下のものは、どこで手に入れたか記憶にない。

